

東九州自動車道関係 埋蔵文化財調査報告

— 8 —

福岡県築上郡上毛町大字緒方所在遺跡群の調査

緒方古墳群

七ツ枝遺跡

龍毛遺跡

2013

九州歴史資料館

序

福岡県では、西日本高速道路株式会社の委託を受けて、平成 19 年度から東九州自動車道建設に伴う発掘調査を実施しています。本書で報告する緒方古墳群・七ツ枝遺跡・龍毛遺跡は県域の東端に近い築上郡上毛町の西部、豊前市との境近くに位置する遺跡群です。

緒方古墳群では破壊された古墳の一部と、江戸後期の文人であり農政家であった曾木墨莊に関わる墓地などの調査、七ツ枝・龍毛両遺跡では本県で調査例が少ない水田の可能性のある遺跡などを調査することができました。

本書が、郷土の偉大な先人曾木墨莊を顕彰すること、また、教育・研究、文化財愛護思想の普及の一助となれば幸いです。

なお、発掘調査・報告書作成にいたる間には西日本高速道路株式会社および関係諸機関、上毛町・同教育委員会、そして地元有志の方々の御協力を得て、これを無事に終了することができました。深く感謝する次第です。

平成 25 年 3 月 31 日

九州歴史資料館

館長 西谷 正

例 言

1. 本書は、東九州自動車道建設に伴って発掘調査を実施した、福岡県築上郡上毛町大字緒方に所在する遺跡群の記録である。東九州自動車道関係埋蔵文化財調査報告の第8集にあたる。
2. 発掘調査・報告書作製は、西日本高速道路株式会社九州支社中津工事事務所の委託を受けて、福岡県教育庁総務部文化財保護課・九州歴史資料館が実施した。

なお、調査・報告書作製に関して福岡県高速道路対策室、上毛町・同教育委員会の多大な御協力を得た。
3. 緒方古墳群・七ツ枝遺跡は東九州自動車道中津工事事務所管内の第33地点、龍毛遺跡は同34地点にあたる。
4. 本書に掲載した写真は、遺構を飛野・吉村・荻・末永が、遺物は北岡伸一が撮影したものを使用した。

なお、空中写真は東亜航空技研株式会社に委託して、ラジコンヘリを使用して撮影したものである。
5. 本書に掲載した遺構図は、発掘作業員の補助を得て、飛野・吉村・荻・末永が作成した。
6. 出土遺物の整理作業は、九州歴史資料館において、小池史哲の指導の下で実施した。
7. 出土遺物及び図面・写真等の記録類は、九州歴史資料館において保管する。
8. 本書に使用した地図は国土地理院発行の1/50,000地形図「中津」及び1/25,000地形図「土佐井」を改変したものである。

また、使用する座標は世界測地系による。
9. 平成23年度から、福岡県教育庁総務部文化財保護課の埋蔵文化財発掘調査業務は九州歴史資料館へ移管された。
10. 本書の編集は飛野が行い、執筆者名は目次に記した。なお、緒方古墳群のうち、墓地出土金属製品については松崎の執筆による。

本文目次

	頁
I. はじめに (飛野)	1
1. 発掘調査に至る経緯	1
2. 調査の組織と関係者	3
II. 位置と環境 (飛野)	7
1. 地理的環境	7
2. 歴史的環境	7
III. 調査の内容	13
1. 緒方古墳群の調査 (飛野・松崎)	13
1) 概 要	13
2) 古 墳	15
3) 土 坑	16
4) 溝状遺構	21
5) 石敷き遺構	25
6) 曾木家墓地	25
7) 石 垣	39
8) その他の遺構と遺物	39
9) 小 結	42
2. 七ツ枝遺跡の調査	43
1) 概 要 (飛野・萩・末永)	43
2) 第2次調査 (末永)	44
3) 第4次調査 (萩)	50
4) 小 結 (飛野・萩)	58
3. 龍毛遺跡の調査	60
1) 概 要 (飛野・萩)	60
2) 第2次調査 (萩)	61
3) 第3次調査 (吉村)	70
4) 第4次調査	74
5) 自然科学的調査 (株式会社 古環境研究所)	77
6) 小 結 (飛野・萩)	88
IV. おわりに (飛野)	90

図版目次

緒方古墳群

図版 1	1. 調査区全景（南東上空から）	2. 緒方古墳群全景（上空から）
図版 2	1. 2号墳現況（南西から）	2. 5トレンチ北壁土層（南から）
	3. 3号墳周溝（1号溝）土器出土状況（北東から）	
図版 3	1. 1号土坑（南西から）	2. 2号土坑（北東から）
	3. 3号土坑（北東から）	
図版 4	1. 4号土坑（北西から）	2. 5号土坑（北西から）
	3. 6号土坑（北西から）	
図版 5	1. 7号土坑（北から）	2. 8号土坑（北東から）
	3. 9号土坑（南西から）	
図版 6	1. 10号土坑検出時（北東から）	2. 10号土坑（南東から）
	3. 南西端土坑群（北西から）	4. 南西端土坑群（東から）
図版 7	1. 2号溝状遺構（南から）	2. 2号溝状遺構完掘後（西から）
	3. 3号溝状遺構全景（南西から）	
図版 8	1. 3号溝状遺構1区（西から）	2. 3号溝状遺構2区・3区南半（北西から）
	3. 3号溝状遺構3区南半（北東から）	
図版 9	1. 3号溝状遺構3区南半（北から）	2. 3号溝状遺構3区北半（北西から）
	3. 4号溝状遺構（西から）	
図版 10	1. 石敷き遺構（南東から）	2. 石敷き遺構南西端（北東から）
	3. 石敷き遺構完掘後（北東から）	
図版 11	1. 曾木家墓地発掘前（北西から）	2. 曾木家墓地発掘後（北西から）
	3. 1～3号墓（北から）	
図版 12	1. 2・3号墓検出状況（北西から）	2. 2号墓蓋石除去後（北東から）
	3. 4号墓（仮称）検出状況（東から）	
図版 13	1. 5号墓礫群検出状況（東から）	2. 5号墓床面（北西から）
	3. 6号墓礫群検出状況（東から）	
図版 14	1. 6号墓床面（西から）	2. 7号墓礫群検出状況（北東から）
	3. 7号墓床面（北西から）	
図版 15	1. 8号墓（北西から）	2. 8号墓床面（北西から）
	3. 火葬骨壺出土状況（北西から）	
図版 16	1. 現石垣（南東から）	2. 古石垣（東から）
	3. 新旧石垣間の状況（北東から）	
図版 17	1. 調査区南東端の埋甕（南東から）	2. 調査区東端部北半（北西から）
	3. 調査区東端部南半（北西から）	
図版 18	出土遺物 1	

図版 19	出土遺物 2	
図版 20	出土遺物 3	
七ツ枝遺跡		
図版 21	1. 第 2 次調査区全景（南東上空から）	2. 同（北西上空から）
図版 22	1. 1 号竪穴住居跡（南から） 3. 1・2 号掘立柱建物跡（北西から）	2. 同カマド付近（南西から）
図版 23	1. 3 号掘立柱建物跡（南西から） 3. 第 2 次調査区出土遺物	2. 1 号溝状遺構（北から）
図版 24	1. 第 4 次調査区全景（東上空から）	2. 第 4 次調査 1 区全景（上空から）
図版 25	1. 1 区 2 号溝状遺構検出状況（北東から） 3. 1 区 3 号溝状遺構検出状況（北東から）	2. 同完掘後（南西から） 2. 同完掘後（北東から）
図版 26	1. 2 区 1 号溝状遺構検出状況（北西から） 3. 2 区 3 号土坑検出状況（北西から）	2. 同完掘後（北西から） 4. 同半截状況（北西から）
図版 27	1. 4 区 3 号溝状遺構（北東から） 3. 4 区 4 号溝状遺構付近土層（北から）	2. 4 区 4 号溝状遺構（北から） 4. 4 区西端付近「畦畔」（北東から）
図版 28	第 4 次調査区出土遺物	
龍毛遺跡		
図版 29	1. 第 2 次調査区西端付近全景（北西から）	2. 同（上空から）
図版 30	1. 10 号溝状遺構（南東から） 3. 1 号溝状遺構（北東から）	2. 12 号溝状遺構（南西から） 4. 2 号溝状遺構北東部（南西から）
図版 31	1. 2 号溝状遺構南西部検出状況（南西から） 3. 2 号溝状遺構南西部周辺（北西から）	2. 同完掘後（南西から） 4. 2 号溝状遺構土層（南西から）
図版 32	1. 14 号溝状遺構検出状況（南東から） 3. 調査区北半部全景（北西から）	2. 同完掘後（南東から） 4. 2 号溝状遺構北東端土層（南西から）
図版 33	第 2 次調査出土遺物	
図版 34	1. 第 3 次調査区全景（北東上空から）	2. 同（上空から、上が北）
図版 35	1. 第 3 次調査区全景（北西から） 3. 2 号土坑（北西から）	2. 1 号土坑（南から）
図版 36	1. ピット遺物出土状況（南東から） 3. 土層堆積状況（東から）	2. 溝状遺構（東から）
図版 37	第 3 次調査区出土遺物	
図版 38	1. 第 4 次調査西区（南東から） 3. 2 号土坑（北から）	2. 同（北西から）
図版 39	1. 柱穴 P1 土器出土状況（東から） 3. 第 4 次調査東区全景（北東から）	2. 柱穴 P2 土器出土状態（南から） 4. 3 号土坑（南から）
図版 40	第 4 次調査区出土遺物	

挿図目次

	頁
第 1 図 築上郡上毛町緒方の位置	1
第 2 図 東九州自動車道路線図及び調査区地点位置図 (1/100,000)	2
第 3 図 周辺遺跡分布地図 (1/50,000)	8
緒方古墳群	
第 4 図 調査区位置図 (1/2,500)	12
第 5 図 「福岡県文化財カード」の緒方 2 号墳	13
第 6 図 緒方古墳群遺構配置図及び現況地形測量図 (1/200)	14
第 7 図 出土土器実測図 1 (1/3)	16
第 8 図 土坑出土金属製品実測図 (1/2)	17
第 9 図 土坑実測図 1(1/30)	18
第 10 図 土坑実測図 2(1/30)	19
第 11 図 土坑実測図 3(南西端土坑群、1/60)	20
第 12 図 溝等実測図 (1/40)	22
第 13 図 石敷遺構実測図 (1/40)	23
第 14 図 曾木家墓地周辺遺構配置図 (1/80)	24
第 15 図 曾木墨荘系図	26
第 16 図 曾木家墓地遺構配置図 (1/40)	28
第 17 図 近世墓実測図 1(1/30)	30
第 18 図 出土土器等実測図 2 (1/3、1/4、1/1)	31
第 19 図 1・6 号墓出土遺物実測図 1(1/2)	32
第 20 図 7 号墓出土遺物実測図 (1/2)	33
第 21 図 8 号墓出土遺物実測図 (1/2)	34
第 22 図 近世墓実測図 2(1/30)	35
第 23 図 出土石製品等実測図 1 (2/3)	38
第 24 図 出土石製品等実測図 2 (2/3)	39
第 25 図 出土石製品等実測図 3 (2/3)	40
第 26 図 出土土器実測図 3 (1/3)	41
七ツ枝遺跡	
第 27 図 七ツ枝遺跡地区割図 (1/2,000)	43
第 28 図 第 2 次調査区遺構配置図 (1/200)	44
第 29 図 第 2 次調査区 1 号竪穴住居跡実測図 (1/60)	45
第 30 図 第 2 次調査区 1 号竪穴住居跡カマド実測図 (1/30)	45
第 31 図 第 2 次調査区 1 号掘立柱建物跡実測図 (1/60)	46
第 32 図 第 2 次調査区 2 号掘立柱建物跡実測図 (1/60)	46
第 33 図 第 2 次調査区 3 号掘立柱建物跡実測図 (1/60)	47

第34図	第2次調査区1号溝状遺構実測図(1/100)	48
第35図	第2次調査区2号溝状遺構実測図(1/100)	49
第36図	第2次調査区出土石製品実測図(2/3)	49
第37図	第2次調査区出土遺物実測図(1/3)	50
第38図	第4次調査区1・4区遺構配置図(1/200)	折込
第39図	第4次調査区第2水田面出土遺物実測図(1/3)	53
第40図	第4次調査区4区南壁土層図(1/40)	53
第41図	第4次調査区溝状遺構土層実測図(1/40)	54
第42図	第4次調査区第3水田面出土遺物実測図(1/3)	54
第43図	第4次調査区2・3区遺構配置図(1/200)	55
第44図	第4次調査区2・3区出土遺物実測図(1/3)	56
第45図	第4次調査区出土石製品等実測図(2/3)	57
龍毛遺跡		
第46図	龍毛遺跡地区割図(1/2,000)	60
第47図	第2次調査区第1水田面遺構配置図(1/200)	61
第48図	第2次調査区第1水田面出土遺物実測図(1/3)	62
第49図	第2次調査区2号溝状遺構付近土層実測図(1/40)	62
第50図	第2次調査区第2・3水田面遺構配置図(1/200)	63
第51図	第2次調査区第3水田面出土遺物実測図(1/3)	64
第52図	第2次調査区第5水田面遺構配置図(1/200)	64
第53図	第2次調査区水田下面遺構配置図(1/400)	65
第54図	第2次調査区土坑土層実測図(1/40)	66
第55図	第2次調査区出土石製品等実測図1(2/3)	68
第56図	第2次調査区出土石製品等実測図2(2/3)	69
第57図	第3次調査区土層模式図	70
第58図	第3次調査区遺構配置図(1/200)	71
第59図	第3次調査区土坑・柱穴実測図(1/30、1/40、1/15)	72
第60図	第3次調査区出土遺物実測図(1/3、1/2)	73
第61図	第4次調査区遺構配置図(1/200)	74
第62図	第4次調査区土坑・柱穴実測図(1/40、1/20)	75
第63図	第4次調査区出土遺物実測図(1/3、2/3)	76
第64図	龍毛遺跡第2次調査の植物珪酸体(プラントオパール)	82
第65図	龍毛遺跡第2次調査におけるプラントオパール分析結果	84
第66図	龍毛遺跡第2次調査の花粉・孢子	85
第67図	龍毛遺跡第2次調査における花粉ダイアグラム	86

表目次

	頁
表 1 東九州自動車道中津工事事務所管内調査地点一覧	4
表 2 緒方古墳群出土石製品観察表	41
表 3 七ツ枝遺跡 4 次調査区出土石製品機種別・石材別組成表	59
表 4 龍毛遺跡第 2 次調査におけるプラントオパール分析結果	83
表 5 龍毛遺跡第 2 次調査におけるプラントオパール分析結果	87
表 6 龍毛遺跡出土石製品機種別・石材別組成表	89

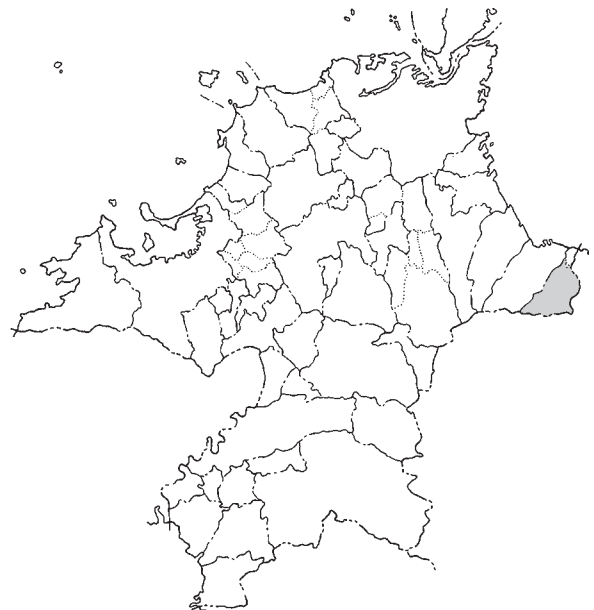


工事の進む龍毛遺跡の向こうに豊前の山岳地帯を見る

I. はじめに

1. 調査に至る経緯

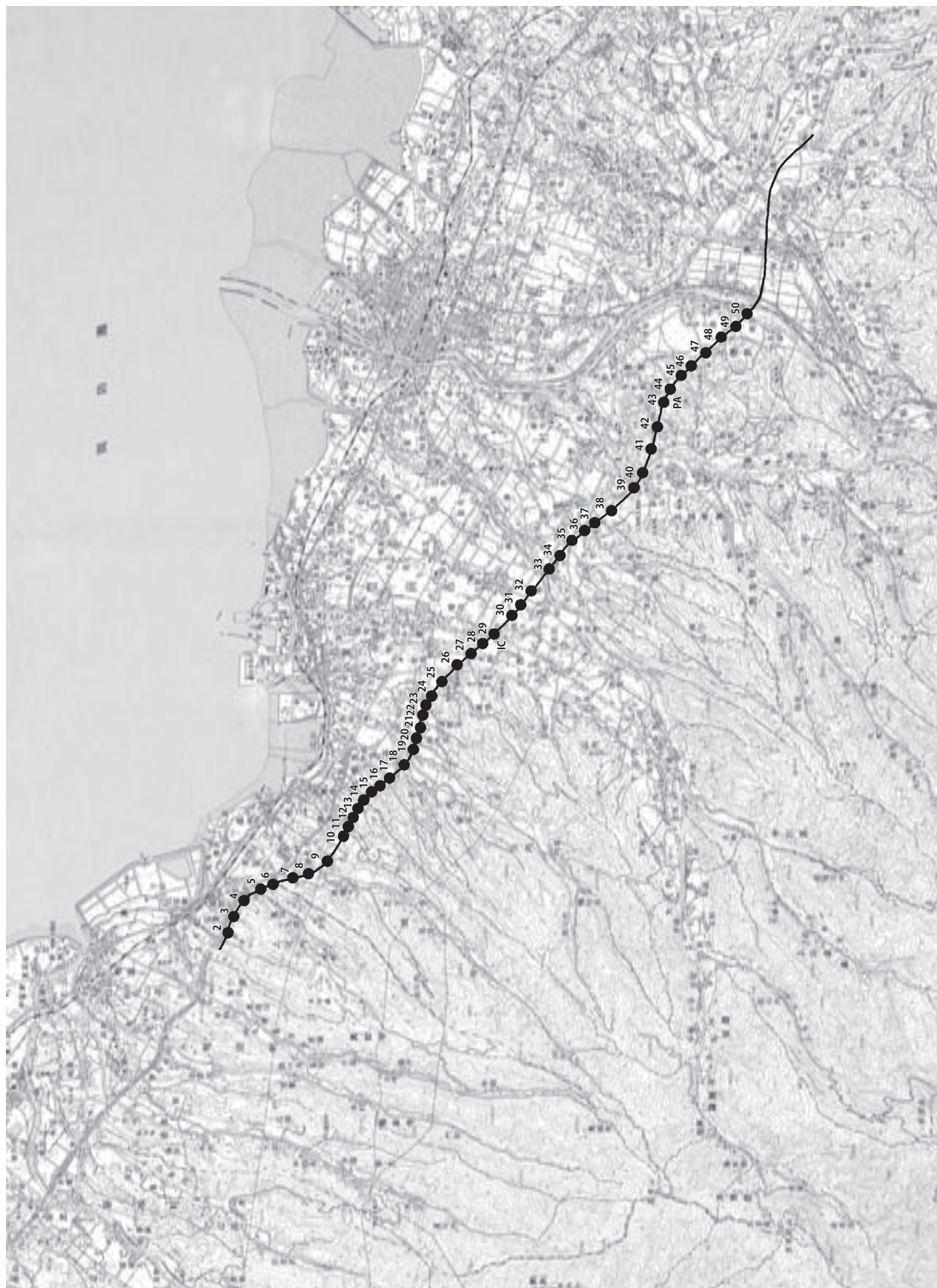
東九州自動車道は、九州縦貫自動車道小倉JCTで分岐し、東九州の主要都市を貫いて鹿児島市に至る全長436kmの高速道路である。東九州の県庁所在地である大分市・宮崎市はそれぞれ大分自動車道・宮崎自動車道によって九州縦貫自動車道に繋がるが、北九州市小倉東ICまでの距離を東九州自動車道と比較すれば、大分市であれば約80km、宮崎市でも約40kmの短縮となる。また、九州新幹線が福岡市・鹿児島市間に開通した九州西回りルートに比して、東回りルートの日豊本線は福岡県全域と大分県域の一部が複線化されるのみで単線区間が多く、運行本数も多くはない。都市部と異なり、生活に占める自動車の比重が高い地域が多いことも、東九州自動車道の重要性を増大させることとなっている。



第1図 築上郡上毛町の位置

現在、工事に着手している区間については、平成3年12月3日第29回国土開発幹線自動車道建設審議会の開催により、北九州市～豊津間、椎田町～日出間などが基本計画決定されたことから始まる。福岡県内では、苅田北九州空港ICから供用中の椎田道路に取り付くまでの区間を西日本高速道路株式会社九州支社福岡工事事務所が、椎田道路から分岐する椎田南ICから大分県境にかけての区間を同中津工事事務所が管轄して建設工事を行っている。以下で発掘調査に至る経緯を略述する。

- ・平成11年12月24日 第32回国土開発幹線自動車道建設審議会により、椎田町～宇佐間などの整備計画が決定
- ・同12年3月1日付（九州支用管第71号）
「高速自動車国道の調査開始の指示および埋蔵文化財の分布調査について（依頼）」
※東九州自動車道椎田～宇佐間を含む調査開始の指示
- ・同12年6月30日（12教文調第21号の3）
「東九州自動車道にかかる埋蔵文化財の分布調査について（回答）」
※『福岡県遺跡等分布地図』および関係市町村へ照会した結果をもって作成
- ・同13年8月1日（九州支用管第156号）
「東九州自動車道（椎田～宇佐）における埋蔵文化財の分布調査について（依頼）」



第 2 図 東九州自動車道路線図および調査地点位置図 (1/100,000)

※ H12.6.30 の回答を受けて、さらなる精度を求めているもの

- ・ 同 17 年 10 月 1 日 道路公団民営化
- ・ 同 18 年 7 月 3 日 (18 教文調第 1903 号)

「東九州自動車道建設予定地内の埋蔵文化財の有無について (照会)」

※ 東九州自動車道の計画平面図を提示し、各種開発で蓄積したデータの集約を関係市町へ依頼

- ・ 同 18 年 9 月 21 日

※ 上記のデータ集約作業終了。11.13 に関係市町村へ配布。それ以前に西日本高速・県土木部高速道路対策室にも手交。

- ・ 同 20 年 6 月 13 日 福岡県知事および関係自治体首長と西日本高速道路株式会社九州支社長との間で、「東九州自動車道 (築上～県境間) 埋蔵文化財発掘調査協定書」を交わす。
- ・ 同 7 月 10 日 福岡県知事および西日本高速道路九州支社中津工事事務所長との間で「埋蔵文化財発掘調査委託契約」を交換。
- ・ 同 20 年 8 月 22 日 上毛町安雲山田遺跡で発掘調査に着手

なお、当然ながら、協定書締結以前に福岡県文化財保護課と中津工事事務所の関係者は幾度となく協議を行い、事前調整を行ってきた。

ここで報告する七ツ枝遺跡・龍毛遺跡については、新吉富村 (当時) が県営圃場整備事業で発掘調査を行った地点の周辺部にあたる。西日本高速道路株式会社の依頼を受けて、平成 20 年 12 月 23・24 日にかけて路線内の確認調査を行って調査範囲を絞り込んだものである。各遺跡の詳細は各報告に譲る。

2. 調査の組織と関係者

平成 19 年度から発掘調査に着手した東九州自動車道は、苅田北九州空港 IC～行橋 IC 間 (9km) が平成 25 年度に、行橋 IC～豊津 IC 間 (7km) および椎田南 IC～県境間 (15km) が同 26 年度に供用が予定されている。しかも、高速道路株式会社は供用後 1 年をもって道路建設に要した経費を日本高速道路保有・債務返済機構へ引き渡すこととなっていて、整理費用の負担も供用後 1 年に限られるということで、9 年間で総延長 30km 余の調査・整理報告作業のすべてを行わなければならない状況となった。加えて、高速道路供用にあわせて、国道 201 号行橋インター線や豊前 IC へのアクセス道路となる県道豊前犀川線を始め、沿線では大小様々な関連事業が計画されていた。

当時、19 年度は国道 208 号有明海沿岸道路および九州新幹線建設に伴う発掘調査の最終年度にあたっていて、調査が一段落するとはいえ、それぞれの整理・報告書作成作業が 23・22 年度まで予定されていた。この状況で新たな大規模事業を行わなければならないが、当時の組織は関係部署 (調査第二係) に係長を含めた 7 名 (うち、1 名は再任用職員で整理担当) が配置されただけであった。このような事態に対し、福岡県文化財保護課では、短期間の事業に新規職員の複数採用が困難であることから臨時調査員を採用することとし西日本高速道路株式会社の了解を得て 20 年度から採用に踏み切った。調査対象地が福岡・北九州両都市圏から離れた地域であるために該当事が現れるか不安であったが、結果的にほぼ常時 5 名の臨時調査員を確保することができ

表1 東九州自動車道中津工事事務所管内調査地点一覧

地点	工事件名	遺跡名	所在地	対象面積 (㎡)	試掘年度	調査面積 (㎡)	調査年度	報告年度	既刊報告 書番号	備考
2	中津	石堂大石ヶ丸遺跡	築上郡築上町石堂	9027	H21～23	200	H23			
3	中津	福岡菜切古墳群	築上郡築上町上ノ河内	16644	H21～23	1000	H22			
4	中津	頭無古墳群 西一町田遺跡	築上郡築上町上ノ河内	19420	H22					遺跡なし
5	中津		築上郡築上町上ノ河内	2840	H21					遺跡なし
6	中津	中村西峰尾遺跡	築上郡築上町上ノ河内・豊前市中村	26972	H22	24000	H23・24			
7	中津	中村山柿遺跡	豊前市中村	16579	H21・22	700	H22			
8	中津		豊前市中村・馬場	10354	H21					遺跡なし
9	中津		豊前市中村・松江	42434						
10	中津		豊前市松江	9905	H23					遺跡なし
11	中津		豊前市松江	26570	H21・23					遺跡なし
12	中津	松江黒部遺跡	豊前市松江・四郎丸	14462	H21	600	H23			
13	中津		豊前市四郎丸	12986	H21・23					遺跡なし
14	中津		豊前市四郎丸	2390	H21					遺跡なし
15	中津		豊前市四郎丸	9735	H22					遺跡なし
16	中津		豊前市四郎丸	10432	H22					遺跡なし
17	中津	川内下野添遺跡	豊前市川内	15972	H21～23	3600	H22・23			
18	中津		豊前市川内	16040	H21～23					遺跡なし
19	中津	鳥越下屋敷遺跡	豊前市鳥越	4963	H23・24	2000	H24			
20	中津		豊前市鳥越	8762	H23・24		H24			
21	中津		豊前市大村	0						
22	中津		豊前市大村	0						
23	中津		豊前市大村	0						
24	中津	天地山遺跡	豊前市大村	6777	H20・22					遺跡なし
25	中津	大村上野地遺跡	豊前市大村・荒堀	10527	H20・22・23	1100	H23			
26	中津	荒堀山田原遺跡	豊前市荒堀	21821	H21～24	1000	H22			
27	中津		豊前市荒堀	9823	H21・22					遺跡なし
28	中津		豊前市大西	23122	H21～23					遺跡なし
29	中津	塔田琵琶田遺跡 大西遺跡 西ノ原遺跡 時末遺跡	豊前市大西・永久・塔田・久路土	63733	H21～24	21600	H23・24			H22 豊前市による調査
30	中津	久路土馬踏遺跡	豊前市久路土	9463	H23					遺跡なし
31	中津	鬼木溝添遺跡	豊前市鬼木	12636	H23					遺跡なし
32	中津	鬼木鉾立遺跡	豊前市鬼木	25256	H21・23	1200+	H24			
33	中津	緒方古墳群 七ツ枝遺跡 春屋敷遺跡 道ノ本遺跡	築上郡上毛町緒方	12456	H20～23	3500	H20～22	H24	8 集	上毛町試掘
34	中津	龍毛遺跡	築上郡上毛町緒方	11732	H20・21・ 23・24	5000	H21・24	H24	8 集	上毛町試掘
35	中津	下尻高遺跡 ハカノ本遺跡	築上郡上毛町緒方・尻高	11517	H20・21	7200	H20・21	H24	7 集	
36	中津	安曇山田遺跡	築上郡上毛町安曇	10135	H20	9400	H20			一部上毛町により調査
37	中津	安曇山田遺跡	築上郡上毛町安曇・宇野	24970	H20・21		H20・21	H24	7 集	
38	中津		築上郡上毛町土佐井	22252	H20					遺跡なし
39	中津	土佐井西遺跡	築上郡上毛町土佐井	21860	H20～22	4400	H22～23			
40	中津	土佐井東遺跡	築上郡上毛町土佐井	13476	H20～22	600	H23			一部上毛町により調査
41	中津	土佐井小迫遺跡 唐原山城跡	築上郡上毛町土佐井	7887	H21・22・24	1500	H22・24			
42	中津	ガサメキ遺跡 穴ヶ葉山南遺跡	築上郡上毛町下唐原	33002	H21・22・24	4000	H22			一部上毛町により調査
43	中津		築上郡上毛町下唐原	25215	H21・22・23					遺跡なし
44	中津	大久保櫓迫遺跡	築上郡上毛町下唐原	13452	H22	7500	H22			
45	中津		築上郡上毛町下唐原	11997						
46	中津	皿山古墳群	築上郡上毛町下唐原・上唐原	23977	H22・23	12000	H23・24			
47	中津	四ツ塚山古墳群	築上郡上毛町上唐原	7193	H22・23	6600	H23			
48	中津		築上郡上毛町上唐原	4577						
49	中津	榎町遺跡	築上郡上毛町上唐原	14250		8240	H24			
50	中津	榎町遺跡	築上郡上毛町上唐原	4935	H23	1050	H24			

て大いに助けられた。

さらに、関係市町村への協力依頼を行った。市町の協力を得るには、県教委が窓口となって事務を行い市町へ再委託する方法も考えられたが、その場合は膨大な事務が1部署に集中することが予想され、予算の執行・管理も困難であるなどの理由から、これも西日本高速道路株式会社との協議を経て同社と関係市町との間で業務委託契約書を直接交わすこととした。このような経過を経て、24年度には福岡工事事務所管内の発掘調査は終了する見込みとなり、25年度前半までには中津工事事務所管内でもほぼ終了する予定である。

発掘調査から本報告書作成にいたる間の西日本高速道路株式会社九州支社中津工事事務所の関係者は以下の通り。

	20 年度	21 年度	22 年度	24 年度
西日本高速道路株式会社九州支社				
支社長	久保晶紀	久保晶紀	久保晶紀 (～9.30) 本間清輔 (10.1～)	本間清輔
西日本高速道路株式会社九州支社中津工事事務所				
所 長	浜田兼栄	浜田兼栄 (～9.30) 上羽坪勲 (10.1～)	上羽坪勲	三瀬博敬
副所長（技術担当）	大串久之	大串久之	大串久之 (～11.30) 森田忠敏 (10.16～)	森田忠敏
副所長（事務担当）	山本弘一 (～9.30) 平松善司 (12.1～)	平松善司	平松善司	中村重俊
総務課長	江口政秋	江口政秋 (～9.30)		
		宇都良典 (10.1～)	宇都良典	宇都良典
用地第一課長	戸上正明	戸上正明	戸上正明	藤江 正
工務課長	窪 修 (～5.31) 田中 満 (～6.1)	田中 満	田中 満 (～9.30) 渡邊浩延 (10.1～)	渡邊浩延
上毛工事長	渡久地正樹	當房周三	當房周三	荒平裕次

同じく、福岡県教育委員会および上毛町教育委員会の関係者は以下の通り。

福岡県教育委員会

総 括

教育長	森山良一	森山良一	杉光 誠	杉光 誠
教育次長	檜崎洋二郎	亀岡 靖	荒巻俊彦	荒巻俊彦
総務部長	荒巻俊彦	荒巻俊彦	今田義雄	西牟田龍治
副理事兼文化財保護課長	磯村幸男			
文化財保護課長	平川昌弘	平川昌弘	伊崎俊秋	
同副課長	池邊元明	池邊元明	伊崎俊秋	
同参事	新原正典	伊崎俊秋	小池史哲 (課長技術補佐)	

	20 年度	21 年度	22 年度	24 年度
課長補佐	小池史哲 (課長技術補佐)	小池史哲 (課長技術補佐)		
同参事補佐	前原俊史	前原俊史	日高公德	
	小田和利 (調査第一係長)			
	飛野博文 (調査第二係長)	飛野博文 (調査第二係長)	飛野博文 (調査第二係長)	
同技術主査		吉村靖徳 (調査第一係長)	吉村靖徳 (調査第一係長)	
庶 務				
管理係長	富永育夫	富永育夫	富永育夫	
庶務担当	小宮辰之	野田 雅	仲野洋輔	
調査・報告書作製				
参事補佐	飛野博文 (調査担当)	飛野博文 (調査担当)	飛野博文 (調査担当)	
臨時調査員		荻 幸二	荻 幸二	
九州歴史資料館				
総 括				
館 長				西谷 正
副館長				篠田隆行
総務室長				圓城寺紀子
文化財調査室長				飛野博文 (担当)
文化財調査室長補佐				吉村靖徳
文化財調査室班長				小川泰樹
整理担当				
保存管理班長				加藤和歳
同参事補佐				小池史哲
技 師				小林 啓
臨時調査員				松崎由里
上毛町教育委員会				
教育長	小林政文 (前任)			百留隆男
教育長	百留隆男 (後任)			
教務課長	福本豊彦			
総合窓口課長				末松克美
文化財保護係長	末永浩一 (調査担当)			末永浩一
主任主事	矢野和昭			佐藤 信
主任主事	佐藤 信			
嘱託	塩濱浩之			塩濱浩之

なお、発掘調査にあたっては、福岡県高速道路対策室、上毛町役場および上毛町教育委員会、工事関係者、そして地元有志および調査地に隣接する方々の多大な御協力を得て、無事に完了ことができました。記して謝意を表します。

Ⅱ．位置と環境

1. 地理的環境

ここで報告する 4 遺跡は、福岡県築上郡上毛町（平成の大合併以前は新吉富村）大字緒方に所在する。上毛町は平成 7 年（2005）に築上郡大平村および新吉富村が合併したものである。ちなみに、築上郡は明治 29 年（1896）に築城郡・上毛郡が再編されて新たに作られた郡名であり、上毛町の町名はこの上毛郡に由来する。さらに、上毛郡は古代律令制下では「上膳」郡で「加牟豆美介（かむつみけ）」と呼ばれていて、現豊前市の北西端を除く大部分から山国川（古名：御木川）に至る範囲を指した地名であった。新しく成立した上毛町は、町域 62.4km²、人口約 7,700 人である。

福岡県内では東南端に位置する。北は吉富町を介して周防灘（瀬戸内海）を望み、東は一級河川山国川をもって大分県と接する。山国川とともに福岡県と大分県を画する英彦山（標高 1200 m）・犬ヶ岳（同 1130 m）山塊から周防灘に向かって多くの山系が派生するが、特に築上郡築上町から豊前市西部にかけてはヤツデ状に細い谷と山系が周防灘まで延びて独特の景観を作っている。その一つの山系に英彦山・求菩提山と同様修験が栄えた松尾山（上毛町）があり、緒方地区はその北東麓にあたる。豊前市との境をなす佐井川の右岸に位置し、地形的には成恒・安雲原と呼ばれる低台地上にある。緒方古墳群が位置する佐井川右岸肩は山林であったが、地形はかなり改変されている。後述するように、江戸後期には町営団地を含むこの一体が屋敷地となっていたらしく、本来の山林ではない。他の調査対象地は宅地跡、圃場整備が施工された水田であり、全体に南西から北東にかけて緩傾斜を有するなだらかな地形となっている。

2. 歴史的環境

福岡県は律令制下で成立した筑前・筑後及び豊前国の一部からなる。豊前国 8 郡のうち、下毛・宇佐両郡は大分県に編入された。京都郡（旧京都・仲津郡）と築上郡（旧築城・上毛郡）は旧企救郡（現北九州市の一部）、旧田川郡（現田川郡）と区別されて「京築」地域と総称されている。

昭和 62 年（1987）、建設省（当時）による一般国道 10 号線バイパス建設事業を受けて福岡県教育委員会が大平村（当時）上唐原遺跡の調査に着手して以降、平成 6 年（1994）度に至るまでの 8 年間にわたって大平村・新吉富村（当時）の両村域で同事業に関わる埋蔵文化財の発掘調査が実施された。さらに、平成の年号になった頃から、これらの地域でも圃場整備事業が本格的に開始され、両村ともに文化財専門職員が配置された。これらの大規模事業の他にも、国・県・村や民間開発に伴う発掘調査が相次いでおり、地域の歴史資料の発掘・蓄積には目を見張るものがある。しかし、特に圃場整備事業に伴って発掘調査された遺跡については、村の体制に比して事業規模が大きく、現場を優先しなければ事業自体が進まないために整理作業を後回しにせざるを得ず、事業期間（通常 5 年）内に整理作業を完遂できなかったものが多い。その後、文化財関係事業の縮小、町村合併などによる調査担当者の配置転換などもあって報告がなされていないもの



- | | | | | | |
|----------------|--------------|-------------|-----------|--------------|--------------|
| 1 ハカノ本遺跡2次調査1区 | 20 空遺跡 | 39 畔塚遺跡 | 58 宇野田遺跡 | 77 板敷遺跡 | 96 穴ヶ葉山南遺跡 |
| 2 ハカノ本遺跡2次調査2区 | 21 道ノ本遺跡 | 40 堂ノ前遺跡 | 59 唐ノ本遺跡 | 78 溝添遺跡 | 97 穴ヶ葉山古墳群 |
| 3 ハカノ本遺跡3次調査 | 22 原ノ前遺跡2次調査 | 41 大ノ瀬官衙遺跡 | 60 宮ノ後遺跡 | 79 新助田遺跡 | 98 穴ヶ葉山遺跡 |
| 4 ハカノ本遺跡1次調査 | 23 セツ枝遺跡2次調査 | 42 ハッ並下ノ原遺跡 | 61 宇野代遺跡 | 80 牛頭天王遺跡 | 99 上唐原甚吾久保遺跡 |
| 5 下尻高遺跡 | 24 セツ枝遺跡1次調査 | 43 下島ヲカ遺跡 | 62 竹ノ下遺跡 | 81 中桑野遺跡 | 100 大久保櫛迫遺跡 |
| 6 安雲山田遺跡2地点 | 25 セツ枝遺跡3次調査 | 44 下島地区遺跡 | 63 ウツケ畑遺跡 | 82 下唐原柳遺跡 | 101 恵良古墳群 |
| 7 安雲山田遺跡1地点 | 26 春屋敷遺跡 | 45 城ヶ森遺跡 | 64 馬々代遺跡 | 83 上桑野遺跡 | 102 東下井手ノ上遺跡 |
| 8 山田窯跡 | 27 緒方古墳群 | 46 コシノ木遺跡 | 65 長田遺跡 | 84 下唐原桑野遺跡 | 103 今蔵遺跡 |
| 9 山田1号墳 | 28 屋敷田遺跡 | 47 小宮本遺跡 | 66 ツッ溝遺跡 | 85 桑野遺跡 | 104 今蔵遺跡B地点 |
| 10 照日遺跡 | 29 恒石遺跡 | 48 十二遺跡1次調査 | 67 正ノ坪遺跡 | 86 大塚本遺跡 | 105 今蔵遺跡C地点 |
| 11 龍毛遺跡4次調査 | 30 柿ノ木田遺跡 | 49 稲築遺跡 | 68 阿高田遺跡 | 87 寺前遺跡 | 106 下村池ノ本遺跡 |
| 12 龍毛遺跡3次調査 | 31 中屋敷遺跡 | 50 安雲ハタガタ遺跡 | 69 石筆遺跡 | 88 能満寺遺跡 | 107 下村養生寺遺跡 |
| 13 龍毛遺跡2次調査 | 32 尻高後椀遺跡 | 51 南田遺跡 | 70 垂水庵寺 | 89 土佐井西遺跡 | 108 堂ヶ迫遺跡 |
| 14 龍毛遺跡1次調査 | 33 寺ノマエ遺跡 | 52 小木戸遺跡 | 71 垂水高木遺跡 | 90 鳴水遺跡 | 109 鬼木鈴立遺跡 |
| 15 インキウ遺跡 | 34 シバワラ遺跡 | 53 野内遺跡 | 72 一ノ坪遺跡 | 91 土佐井東遺跡 | 110 久路土鐘鐸田遺跡 |
| 16 尻高畑田遺跡1次調査 | 35 ハンダ遺跡 | 54 町ノ上遺跡 | 73 横道遺跡 | 92 土佐井ミソンデ遺跡 | |
| 17 尻高畑田遺跡2次調査 | 36 フルトノ遺跡 | 55 曲ノ遺跡 | 74 池ノ本遺跡 | 93 土佐井小迫遺跡 | |
| 18 八反田遺跡 | 37 中アサバ遺跡 | 56 太田遺跡 | 75 池ノ口遺跡 | 94 唐原神籠石 | |
| 19 宮ノ上遺跡 | 38 中坪遺跡 | 57 松掛遺跡 | 76 小柳遺跡 | 95 ガサメキ遺跡 | |

第3図 周辺遺跡分布地図 (1/25,000)

がまだ少なくない。以下では主に報告された遺跡等を中心として歴史的環境を略述したい。

旧石器時代 遺物は山国川左岸の段丘上にある金居塚古墳群^{註1}から出土している。後期古墳下層、いわゆる旧地表と呼ばれる土層およびその下位の風化土層からのもので、時期は単一ではないものの、珪質岩製ナイフ形石器などがある。近接する下唐原十足遺跡^{註2}(珪質頁岩製ナイフ形石器)、桑野遺跡^{註3}(流紋岩製ナイフ形石器)、上の熊遺跡^{註4}(安山岩製剥片尖頭器)などでも二次的な状況での出土例があり、今後良好な遺跡が発見される可能性が高い地域といえる。今ひとつ、比較的まとまった資料が出土した遺跡に豊前市青畑向原遺跡^{註5}がある。これは圃場整備事業に伴って調査された遺跡で、「標高 42 m の丘陵先端部」に位置する。石英などを使用したナイフ形石器 5 点、安山岩製剥片尖頭器 1 点、流紋岩製角錐状石器 1 点、安山岩製スクレイパー 3 点などが出土した。これらも原位置を留めるものではないが、一定範囲内で各種石器が出土した例は周辺には乏しい。

縄文時代 従来、京築地域では広く分布する前期押型文土器群が最古であったが、京都郡みやこ町(旧犀川町)の祓川上流域の伊良原ダム建設に先立つ調査で早期の土器群が初めて確認された。狹隘な谷の標高 220 m ほどの地点、上伊良原榎遺跡^{註6}で発見された粘土瘤をもつ刺突文土器、柏原式土器である。まとまった量の出土は京築地域で初めてであり、出土地がダムが建設されるような「山奥」であることも驚きの一つである。

前期以降は散発的に遺物は出土するものの明確な生活の痕跡は確認できないが、後期になると様相が一変する。山国川左岸の原井三ツ江遺跡^{註7}・上唐原遺跡^{註8}、東友枝川右岸の東友枝曾根遺跡^{註9}(以上、上毛町)、狭間宮ノ下遺跡^{註10}・中村石丸遺跡^{註11}(豊前市)、山崎・石町遺跡^{註12}(築上町)、節丸西遺跡^{註13}(みやこ町)など、大小の河川に近接して集落が営まれる状況が明らかとなってきた。しかも、いずれも土器・石器の量が非常に多い点で特徴的である。その後、晩期の遺跡はやはり希薄となる。

弥生時代 周防灘沿岸地域で最古の弥生土器は行橋市の海岸砂丘上の長井遺跡^{註14}から採集された副葬用とされる小壺など、そして中世でも「津留の港」と呼ばれたという行橋市津留に隣接する辻垣地区^{註15}から出土した板付Ⅰ式土器群である。ただ、確実な住居跡や貯蔵穴といった遺構はなく、溝が主体であった。

山国川左岸では、下唐原地区の段丘上において前期後半から集落が営まれ、中期には同大塚本^{註16}遺跡で墳丘墓が、野地川という小河川を挟んで北に続く垂水地区牛頭天王遺跡^{註17}では大型掘立柱建物や環濠集落が営まれるに至った。墳丘墓は内法 14 × 16 m の長方形墳丘の四周に溝を巡らせるもので、内部は中央から偏して小児棺などが調査されたが、中心部付近は失われていた。圃場整備事業や工業団地造成に伴う調査などによって中期にはこの段丘上に広く集落が広がっていたことが判っていて、墳丘墓や環濠がその中心的な遺構であったものと思われる。小河川や浅い谷地形などを含むが、集落の規模は南北 1,200 m、東西 700 m ほどと推測される。後期になると南側の低地に南北 500 m、東西 700 m ほどの規模に復元された大規模な環濠集落が想定されている^{註18}。

古墳時代 そして低地の環濠が埋まる頃、集落西の段丘上に全長 30 m ほどと小規模な前方後円墳(能満寺古墳^{註19})が営まれ、続いて墳丘規模が倍となる西方古墳^{註20}にいたるまで、少なくとも 2 世代の首長が存在したようである。山国川流域の前方後円墳は、確実にはこの 2 基で、5 世紀代に比定される吉富町楡生山古墳^{註21}もその可能性が指摘されている。しかし、5 世紀～6 世紀前半代の古墳は前方後円墳のみならず、円墳・方墳もほとんど知られていない。わずかに右岸の

中津市幣幡邸古墳^{註22}（方墳）およびその足下の段丘斜面に掘り込まれた上ノ原横穴墓群^{註23}の一部があるのみである。

反面、6世紀後半代は爆発的な数で円墳が造られ、中には直径40mにおよぶものも複数ある。この規模は、みやこ町橘塚^{註24}・綾塚古墳^{註25}（国史跡）など「豊国造家」の墓所といわれる古墳に匹敵するものであるが、当地域では大小数多くの古墳が群集している点で、独立した先の2古墳とは異なっている。また、古墳が築造された段丘の法面には横穴墓群が穿たれている。先の中津市上の原遺跡が斬新な調査法や古式の形態をもつことなどで著名であるが、上毛町側でも下唐原金居塚遺跡^{註26}で群集墳と共存している。また、百留横穴群^{註27}は凝灰岩の岩盤に穿たれ、円文を赤色顔料で描いた例が知られていて、付近の段丘上には大小無数の古墳が立地する。

古代 古代の遺跡として大規模なものが3遺跡あり、優雅な新羅系軒瓦を出土する垂水廃寺が早くから知られている。国内最古の梵鐘といわれる太宰府市観世音寺梵鐘の口端部に「上三毛」の線刻があり、この寺院跡との関係が興味深いところである。この垂水廃寺に対しては、昭和48年度から実施した確認調査で主要遺構が不明瞭のまま、方2町の寺域が推測された^{註28}。その後、南に隣接する南吉富小学校講堂の改築に伴う調査ではカマド袖に垂水廃寺から出土する新羅系瓦頭を使用した竪穴式住居跡や磁北に近い方位をもつ大型掘立柱建物跡などを検出した^{註29}。さらに、金堂推定地の西側の調査では推定寺域に方位を揃える2×2間の掘立柱建物や、磁北に近い方位の溝から多くの瓦を出土する^{註30}などしている。このように新しい知見が得られているものの、推定寺域全体から見れば調査面積はごくわずかであり、遺跡保存のためにも早急に継続的な調査が強く望まれる。なお、供給瓦窯^{註31}もいくつかが調査されている。

平成平成7年度から開始された大ノ瀬地区の圃場整備事業によって郡衙政庁と思われる大規模な遺跡が確認され、国史跡として保存された^{註32}。遺跡は古代官道の推定ラインに接して、150m四方を部分的に柵列で囲み、その中央付近にほぼ55m四方の内郭をやはり柵列で囲んでいた。中心部は7×4間四面庇の正殿、12×2間の脇殿からなる。正殿はほぼ位置・方位を同じくして立て替えがなされ、脇殿は大きく方位を違えて立て替えがなされる。郡衙政庁内を完掘した遺跡として特筆され、数多く確認された掘立柱建物跡群に対する検討が必要である。また、官道を挟んで49×37mの柵列で囲んだ区画があるが、郡衙付属の駅家の可能性も考えられる。また、旧新吉富村内では、大ノ瀬官衙遺跡に先行する官衙的建物配置をもつフルトノ遺跡や2棟の倉庫からなる岡遺跡などが調査されていて、それらの関連性も今後の検討課題として残る。

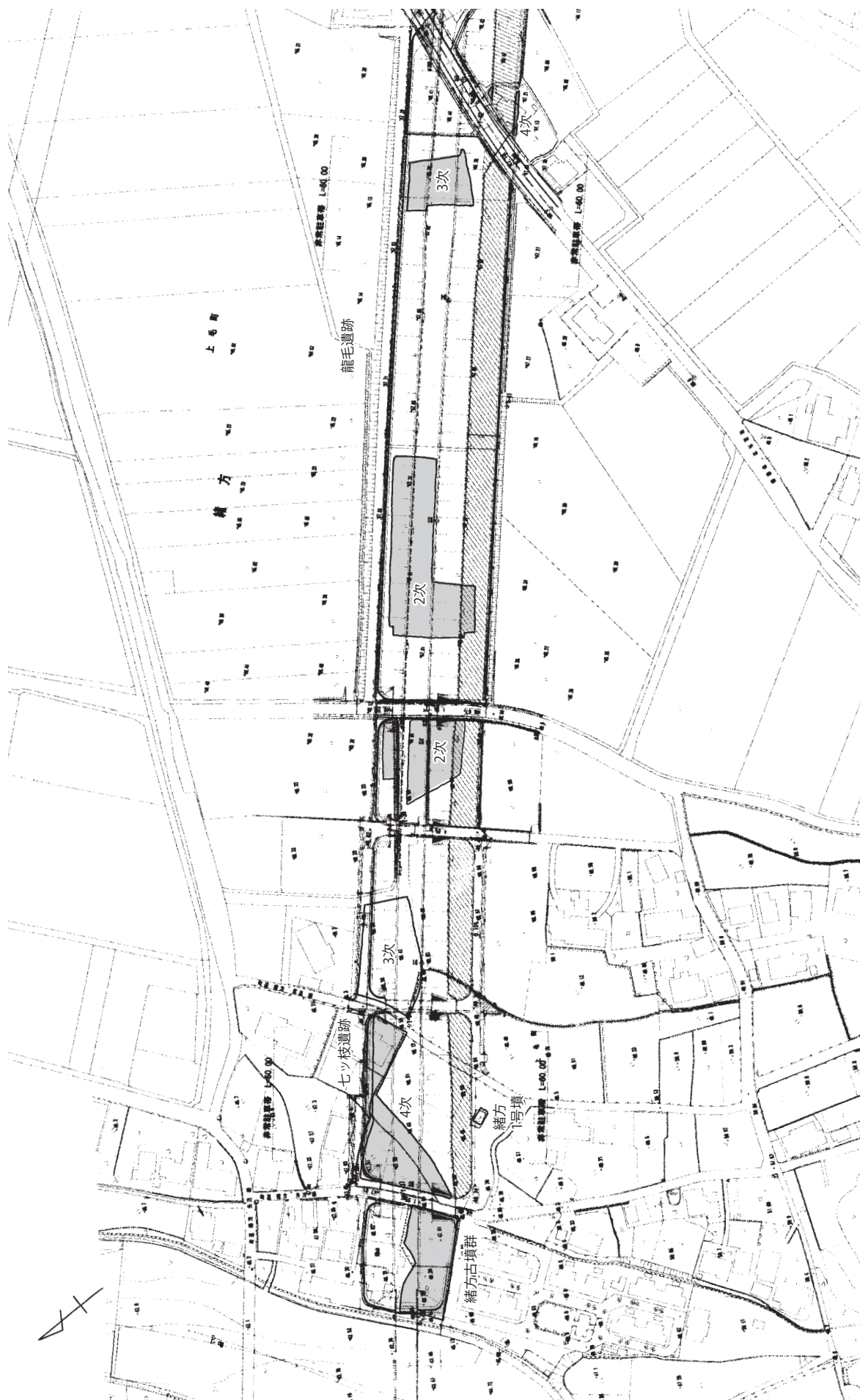
地権者の通報から始まった唐原神籠石^{註33}の調査は平成11～16年にかけて実施された。友枝川右岸の丘陵先端部付近を東西500m、南北600mの規模で地形に沿って復元されたが、列石は余り残っていない。礎石建物が発見されたが、遺構の性格上、同時性の確認は困難が伴う。土塁も部分的に確認されただけで、果たして完成されたものか疑念がある。黒田如水が天正15年(1587)に築城した中津城石垣にここから運ばれたと思われる石材が使用されており、その際に破壊されたことが判る。なお、東九州自動車道の路線発表と神籠石確認がほぼ同時期であったが、トンネル構造へ計画変更して保存されることとなった。

古代の問題として、条里制地割の施工時期の問題がある。圃場整備施工以前、上毛町(旧新吉富村)宇野・垂水地区は古代官道に方位を揃えて条里地割が良好に残存するといわれていた。しかし、国道バイパス建設などに伴う大規模な調査でそれに関連する遺構は明らかでなく、また、12～13世紀の遺物を含む不整形の大規模な浅い落ち込みが正ノ坪遺跡^{註34}などで見られた。豊前市三毛門放

生田遺跡^{註35}や同小石原泉遺跡^{註36}でも同じ頃の居館（屋敷）が官道に方位を揃えて現水田下で見されていることなどを考えれば、地割そのものは官道に規制されたといえようが、現在のように水田化した時期は中世以降のことと考えられる。

註

1. 福岡県教育委員会「金居塚遺跡Ⅱ」（『一般国道10号線豊前バイパス関係埋蔵文化財調査報告』第7集、1997）
2. 大平村教育委員会「下唐原十足遺跡」（『大平村文化財調査報告書』第12集、2002）
3. 福岡県教育委員会「桑野遺跡・上の熊遺跡・小松原遺跡」（『一般国道10号線豊前バイパス関係埋蔵文化財調査報告』第6集下巻、1997）
4. 同上
5. 豊前市教育委員会「青畑向原遺跡・永久遺跡」（『豊前市文化財調査報告書』第12集、1999）
6. 福岡県教育委員会「伊良原Ⅱ上巻 上伊良原榎遺跡 上高屋台ノ原遺跡」（『福岡県文化財調査報告』第229集、2011）
7. 大平村教育委員会「原井三ツ江遺跡」（大平村文化財調査報告書第5集、1990）
8. 福岡県教育委員会「上唐原遺跡Ⅱ」（『一般国道10号線豊前バイパス関係埋蔵文化財調査報告』第5集、1996）
9. 小池史哲・末永浩一「大平村東友枝曾根遺跡の調査」（『考古学ジャーナル』第443号、1999）
10. 豊前市教育委員会「狭間宮ノ下遺跡（遺構編）」（『豊前市文化財調査報告書』第13集、2000）
豊前市教育委員会「狭間宮ノ下遺跡（遺物編）」（『豊前市文化財調査報告書』第14集、2001）
11. 福岡県教育委員会「中村石丸遺跡」（『一般国道10号線椎田バイパス関係埋蔵文化財調査報告』第8集、1996）
12. 椎田町教育委員会「石町遺跡」（『椎田町文化財調査報告書』第2集、1988）
福岡県教育委員会「山崎遺跡 付石町遺跡」（『椎田バイパス関係埋蔵文化財調査報告』第7集、1992）
13. 豊津町教育委員会「豊前国府および節丸西遺跡」（『豊津町文化財調査報告書』第9集、1990）
14. 定村貢二・小田富士雄「福岡県長井遺跡の弥生土器」（『九州考古学』25・26号、1965）
15. 福岡県教育委員会「辻垣ヲサマル遺跡」（『一般国道10号線椎田道路関係埋蔵文化財調査報告』第1集、1993）
16. 福岡県教育委員会「大塚本遺跡」（『一般国道10号豊前バイパス関係埋蔵文化財調査報告』第9集、1998）
17. 新吉富村教育委員会「牛頭天王遺跡 垂水高木遺跡」（『新吉富村文化財調査報告書』第8集、1994）
18. 福岡県教育委員会「郷ヶ原遺跡」（『一般国道10号豊前バイパス関係埋蔵文化財調査報告』第10集、1998）その後、周辺部を町教委が調査。
19. 大平村教育委員会「能満寺古墳群」（『大平村文化財調査報告書』第9集、1994）
20. 福岡県教育委員会「金居塚遺跡Ⅰ」（『一般国道10号豊前バイパス関係埋蔵文化財調査報告』第4集、1996）
21. 吉富町教育委員会「楡生山古墳」（『吉富町文化財調査報告書』第3集、1991）
22. 中津市教育委員会「幣旗邸古墳」（『中津市文化財調査報告書』第4集、1984）
23. 大分県教育委員会「上ノ原横穴墓群Ⅰ～Ⅲ」（『一般国道10号線中津バイパス埋蔵文化財調査報告（2）～（4）』、1989～91）
24. 綾塚 井上信隆「綾塚古墳」（『勝山町史』2006）
25. 橘塚 井上信隆「橘塚古墳」（同上）
26. 註20に同じ
27. 上毛町教育委員会「百留横穴墓群」（『上毛町文化財調査報告書』第13集、2010）
28. 新吉富村教育委員会「垂水廃寺」（『新吉富村文化財調査報告書』第2集、1976）
29. 註17に同じ。
30. 新吉富村教育委員会「垂水廃寺Ⅱ 宇野地区遺跡群Ⅰ」（『新吉富村文化財調査報告書』第12集、1999）
31. 森田 勉「垂水廃寺」・「友枝瓦窯跡・山田窯跡」（『九州古瓦図録』九州歴史資料館編、1981）に触れている。その後の新しい発見として次の遺跡がある。
新吉富村教育委員会「照日遺跡群」（『新吉富村文化財調査報告書』第9集、1995）
32. 新吉富村教育委員会「大ノ瀬下大坪遺跡」（『新吉富村文化財調査報告書』第10集、1997）
新吉富村教育委員会「大ノ瀬下大坪遺跡Ⅱ」（『新吉富村文化財調査報告書』第11集、1998）
33. 大平村教育委員会「唐原神籠石Ⅰ」（『大平村文化財調査報告書』第13集、2003）
34. 新吉富村教育委員会「正ノ坪遺跡」（『新吉富村文化財調査報告書』第12集、1999）
35. 大平村教育委員会「唐原神籠石Ⅱ」（『大平村文化財調査報告書』第16集、2005）
36. 福岡県教育委員会「三毛門放生田遺跡」（『福岡県文化財調査報告書』第121集、1995）
37. 豊前市教育委員会「小石原泉遺跡」（『豊前市文化財調査報告書』第11集、1998）



第4図 調査区位置図 (1/2,500)

Ⅲ. 調査の内容

1. 緒方古墳群

1) 概 要

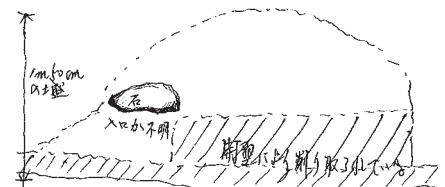
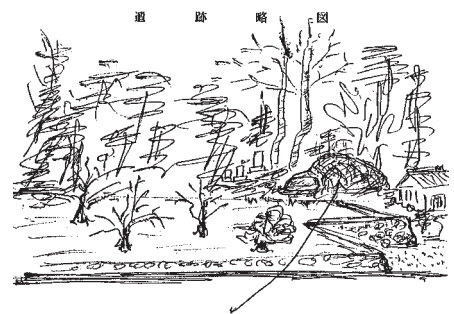
この調査対象地は中津工事事務所管内の第 33 地点で、築上郡上毛町大字緒方 389-1 番地ほかに所在する。なお、これは後述する曾木家墓地の所在地の地番である。ここは、近年の圃場整備事業に伴って調査された七ツ枝遺跡・春屋敷遺跡・道ノ本遺跡などの周知の包蔵地が周辺に所在する地点であった。また、『福岡県遺跡等分布地図（豊前市・築上郡編）』1976 では、この調査対象地内の西端、佐井川右岸肩に緒方 2 号墳が登録されていて、「低台地上に所在、墳丘周囲削平」と概要が記されている。その埋蔵文化財包蔵地調査カードには「約 30 m 南側にやや大型の古墳があったが、昭和 20 年頃開墾時他に搬出し消滅」とある。カードに付された位置図、現況スケッチを見ても、カードに記載された古墳が今回 2 号墳として報告するものに間違いない。なお、1 号墳は同分布地図では当調査地の東側の水田中に残存する古墳で、これも東九州自動車道建設用地内となり上毛町教育委員会によって調査が実施された。また、包蔵地調査カードに「消滅」した古墳とあるものが、今回周溝のみを確認した古墳と思われ、これを 3 号墳として報告する。

今回の調査対象地は 3 筆からなっている。西端、佐井川右岸となる部分は山林で、今回の高速道路用地として買収後に伐採され、大小の株が残っていた。2 号墳はこの北端に位置する。東端は 1 m 以上低くなる畑地（旧土地所有者である初山潮見氏によれば以前は水田）であった。間は山林とほぼ同じレベルの畑地で、果樹が植栽されていた。

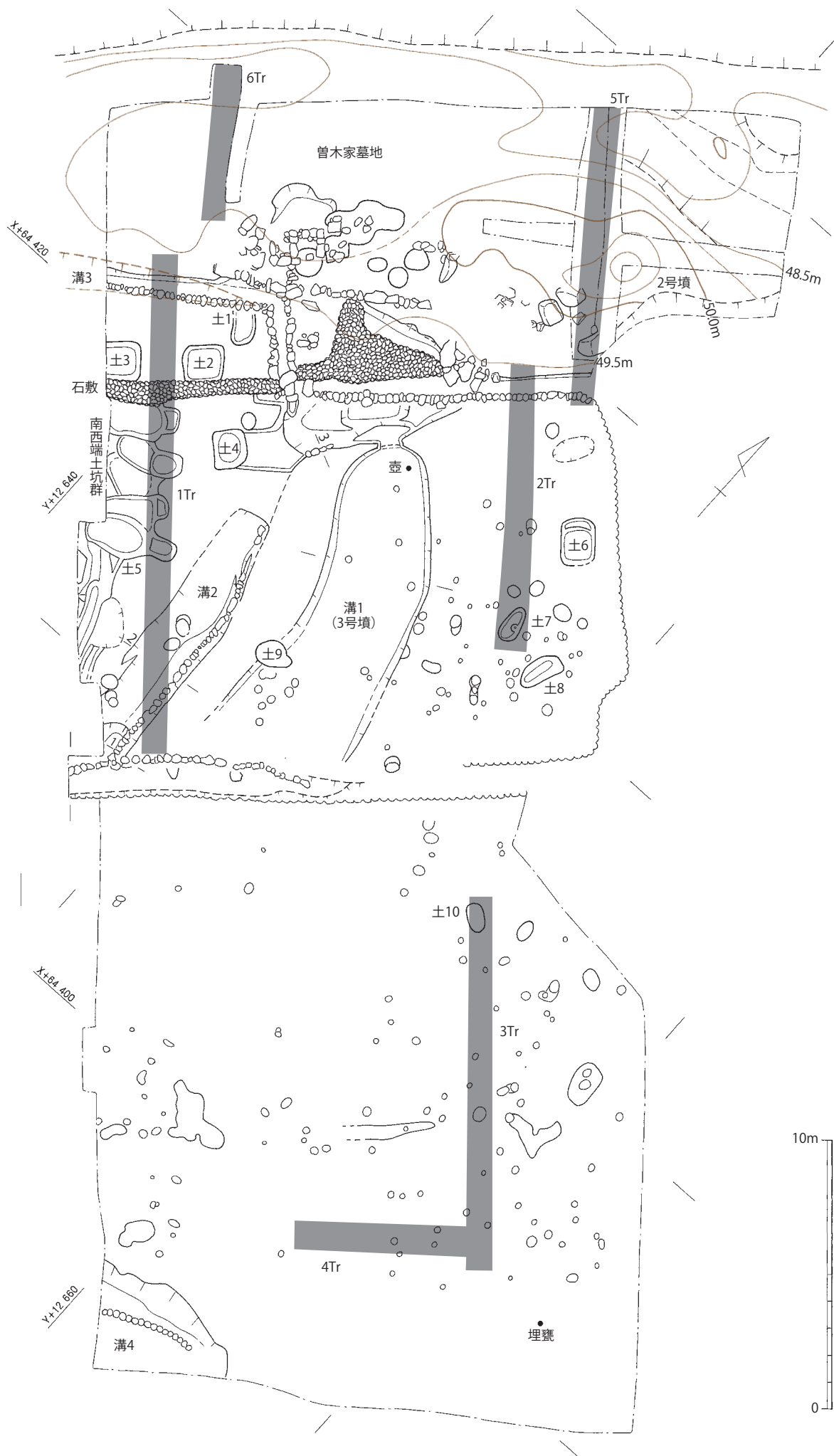
発掘調査は、平成 21 年（2009）12 月 2 日に古墳の有無を確認するトレンチを入れることから開始した。その後間もなく、元福岡県文化財保護指導委員宮本工氏が現地に来訪して、ここが「八石屋敷」と呼ばれる江戸後期の曾木墨荘の邸宅にあたり、調査対象地内に墓地があったことなどの教示を得て、その後の調査に大いに役立った。

トレンチ調査を行う中で、西側 2 筆では石組みが随所に見られ、かつ表土が 10cm ほどと浅かったこともあり、この範囲はすべて人力で表土掘削することとし、東端の畑地は排土置き場確保のために南北に分けて調査を行った。

なお、旧土地所有者で曾木家墓地を守ってこられた初山氏、そして曾木墨荘を研究されていた在野の郷土史家橋本寛和氏のご教示を得たことを記して謝意を表します。報告書作成にあたって、なお橋本氏の御協力を得られたならば、より内容深いものとなったと思うが、氏は報告書作成に至る前に不慮の事故で他界された。ご冥福をお祈りします。



第 5 図 「福岡県文化財カード」
の緒方 2 号墳



第6図 緒方古墳群遺構配置図および現況地形測量図 (1/200)

2) 古 墳

緒方 2 号墳（図版 2、第 5・6 図）

現況で 1 m ほどの高まりがあり、南東側に一見楣石のように見える大型の川原石が露出していた。現況からは古墳と確信を持てるものではなく、地形測量図を見ても同様である。北側が窪地となつて周溝のようにも見えるが、ここは地山直上までゴミが遺棄されていた。

墳 丘 5 トレンチを入れて高まりの土層を観察したが、明らかに盛土といえるものはなく、鮮やかな赤褐色土上に薄い腐植土層があり、その上は締まりのない土で客土されたもののようである（図版 2 参照）。そのために土層図は作成していない。なお、客土中に散乱した状態の大小の川原石が検出されたが、これは破壊された石室の石材であろう。当地域では横穴式石室や横穴墓の床面に比較的大振りの川原石を置き、その目地に小石を置くことが普通に行われている。

主体部 主体部の痕跡を残すものではなく、掘形も不明である。ただ、上記したように大小の石材が周辺に散乱すること、露出した楣石状の石材の南付近で比較的まとまった須恵器が出土していることから、古墳が存在したことは間違いないのであろう。

出土遺物（図版 18、第 7 図 1～6） 5 トレンチ南東部の南側、巨株の脇付近で比較的まとまって出土した須恵器蓋杯である。1 は口縁部が 1/4 ほど残存する蓋で、天井部と口縁部の境に段や沈線はなく、丸く連続して続く。5mm ほどの石英粒が器表に浮いているが、破面を見る限りでは胎土は精良といってよい。2 はかろうじて口端部が残る小片で、復元したものの口径は不確かである。天井部外面に 3 本の篋記号があるが、その断面は片切り彫りとなる。3 も 2 と同じような篋記号をもつ残片で、これも復元径は不安である。

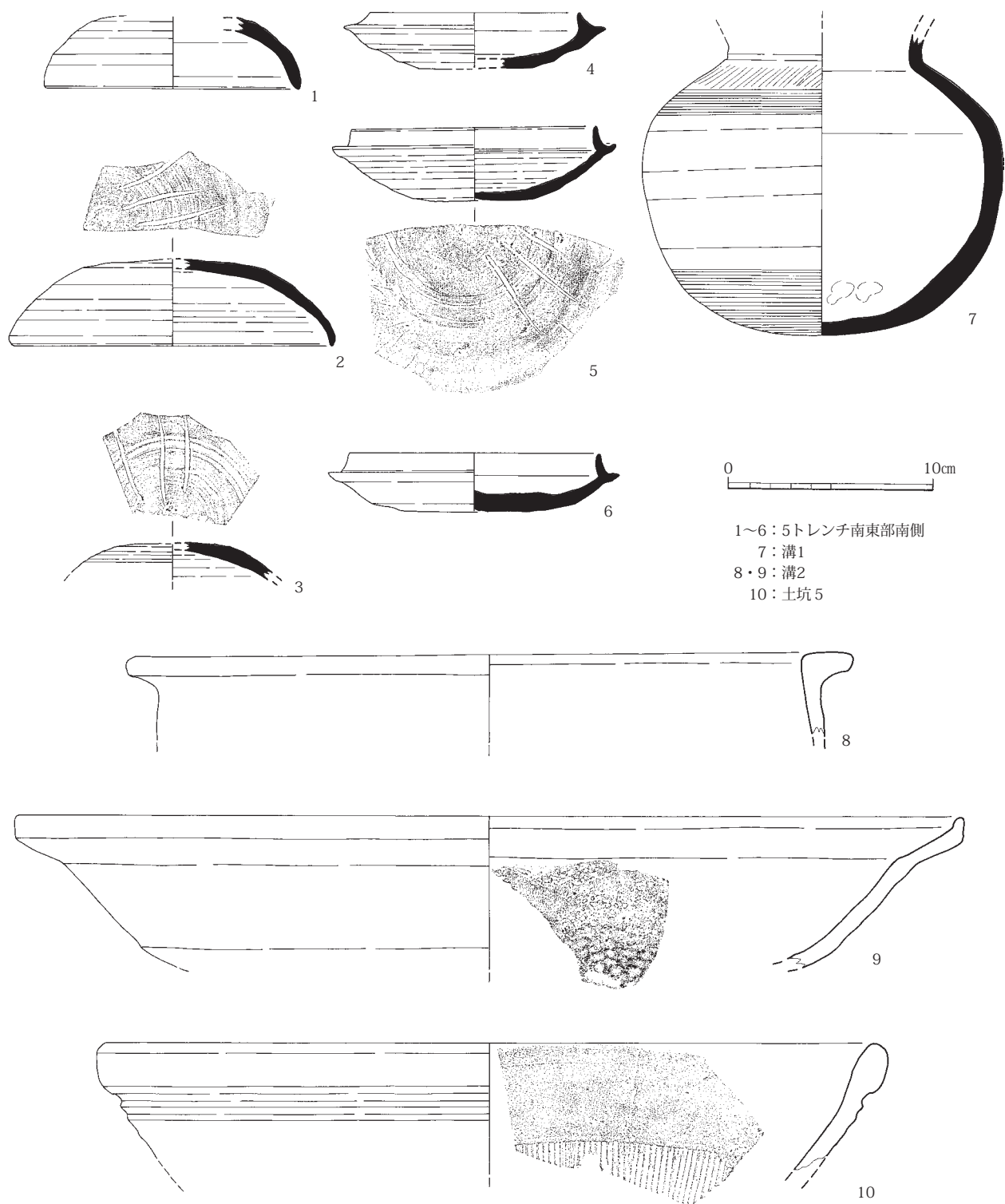
4・6 はいずれも口縁部付近の 1/4 が残存、器面調整は粗雑である。5 は 1/2 が残存し、外底面に 2・3 と同じような篋記号が刻まれる。この篋記号をもつ 3 点は胎土精良で、器面も丁寧に調整されているが、記号をもたない 3 点は胎土もどちらかといえば粗く、調整も粗雑で小片であっても一見して区別できるものである。

緒方 3 号墳（図版 1・2、第 6 図）

表土を除去して検出した溝で、当初は 1 号溝状遺構と呼称していた。溝底に置かれたような状態で須恵器壺が出土したことから、古墳の周溝であろうとの認識に至ったものである。

墳 丘 上記のようにまったく残存しない。周溝は、最大幅 5 m、深さ 0.3 m の規模で、強いて規模を復元するならば半径 10m 強の規模となる。検出範囲が狭いことから不確実ではあるが、周溝内法で直径 20 m ほどの円墳が存在したようである。土層図を作成していないが、埋土には茶褐色土がほぼ一様に入っていた。

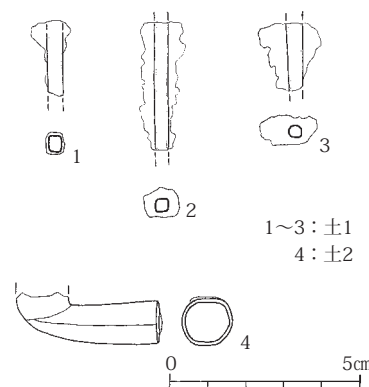
出土遺物（図版 18、第 7 図 7） 口頸部を欠くが、以下は完存する。胎土は精良であるが、焼成が甘く灰白色～黄白色に近く発色、器表も摩滅が進む。最大径部分から上方、肩付近では斜位の繊細な刷毛目状の痕跡があつて、その上を水平方向のカキ目が覆う。体部下半は篋削りの後でやや粗い目のカキ目を用いて底部までを仕上げている。



第7図 出土土器実測図1 (1/3)

3) 土 坑

標高の高い東側 2 筆では分散していくつかの土坑を検出した。特に南西側の調査区境付近では連続して集中する土坑群を確認したが、性格は不明と言わざるを得ない。



1 号土坑 (図版 3、第 9 図)

石積溝 (3 号溝状遺構) が東へ屈曲する付近にあり、北西隅付近は同溝状遺構の石列を露出する際に掘りすぎて壊してしまった。平面は隅丸長方形といってよく、長軸 1.2 m、短軸 0.8 m、深さ 0.1 m ほどの規模である。

第 8 図 土坑出土金属製品
実測図 (1/2)

埋土は締まりのない軟質の灰茶褐色土で、床面から鉄釘が出土している。墓の可能性を否定できないが、深さが非常に浅いことや、壁の傾斜が弱いことなどから疑問がある。

出土遺物 (第 8 図 1 ~ 3) 1 は鉄製釘で頭部と身部の先端が欠損している。残存長は 2.0 cm、身部断面は一辺約 0.4 cm の矩形である。2・3 は棒状の鉄製品だが、断面が一辺 0.3 cm の方形であることから鉄製釘の身部と推定される。

2 号土坑 (図版 3、第 9 図)

3 号土坑とともに後述する石敷き遺構に切られている。一辺長 1.5 m ほどの正方形に近い平面形で、深さは 0.5 m ほどとなる。埋土は中位付近以下に地山ブロック土がレンズ状に堆積するが、その上下はいずれも灰茶褐色の締まりのない土であった。

出土遺物 (第 8 図 4) 検出面から 0.1 m ほどの浅いところから鉄釘と煙管が出土している。4 は青銅製のキセルの雁首である。火皿の上部は欠損しており、現存直径は 1.3 cm である。脂反しの長さは 3.5 cm、小口の直径は 1.2 cm である。なお、羅宇や吸い口は出土しておらず不明である。鉄釘は混入したか、特定できずにいる。

3 号土坑 (図版 3、第 9 図)

後述する石敷遺構に一部が覆われる状況であった。検出した範囲では 1.3 × 1.3 m 以上の長方形プランで、深さは最大で 0.5 m ほどとなる。これも埋土は暗茶褐色の締まりのないものであった。

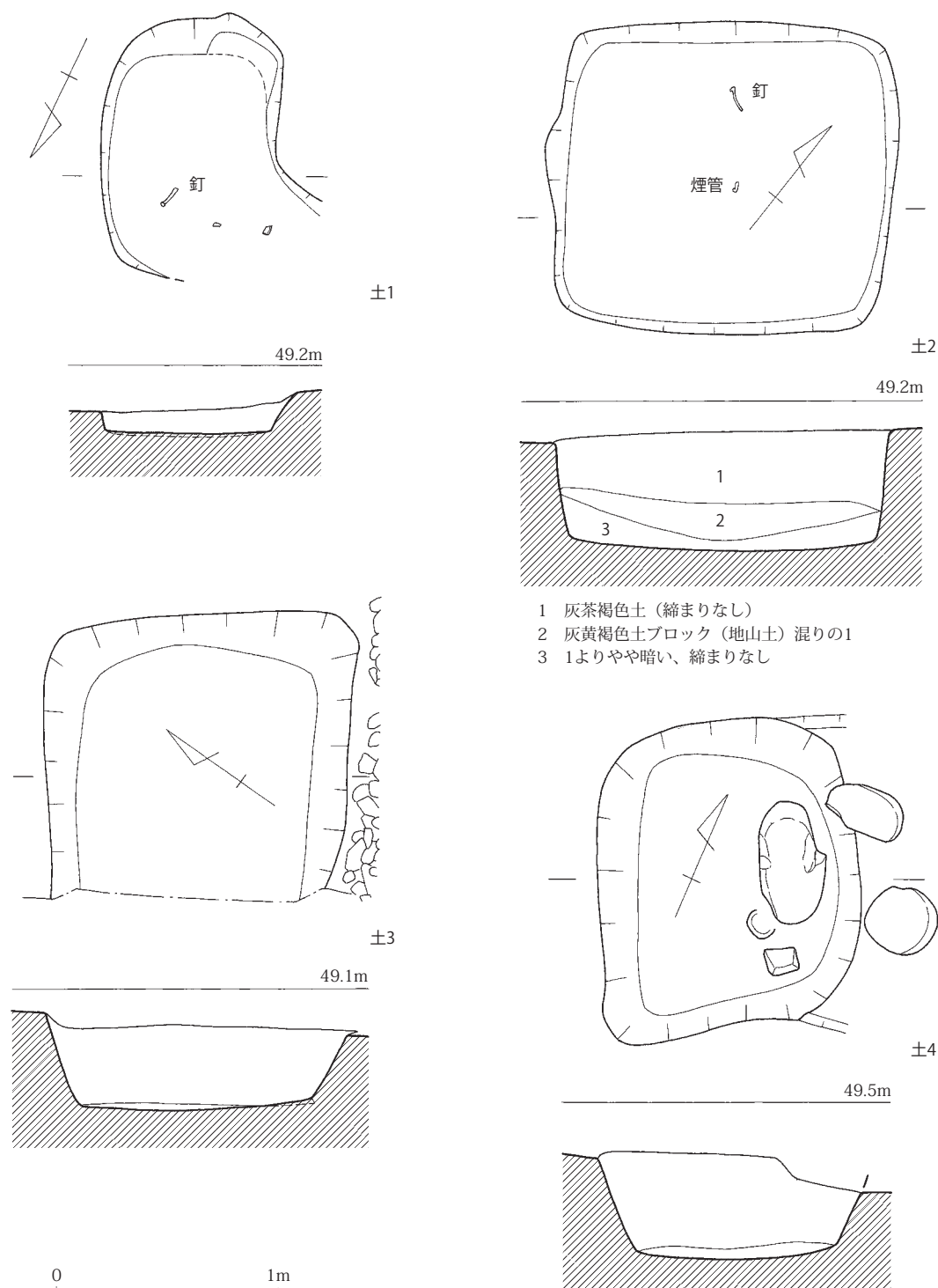
4 号土坑 (図版 4、第 10 図)

2 号土坑の東に位置する。一辺長 1.2 ~ 1.4 m ほどのやや歪な隅丸方形の平面形となり、深さは 0.5 m ほどである。東辺近くで川原石を検出したが、埋土中位に留まっていた。上に置いていたものであろうか。

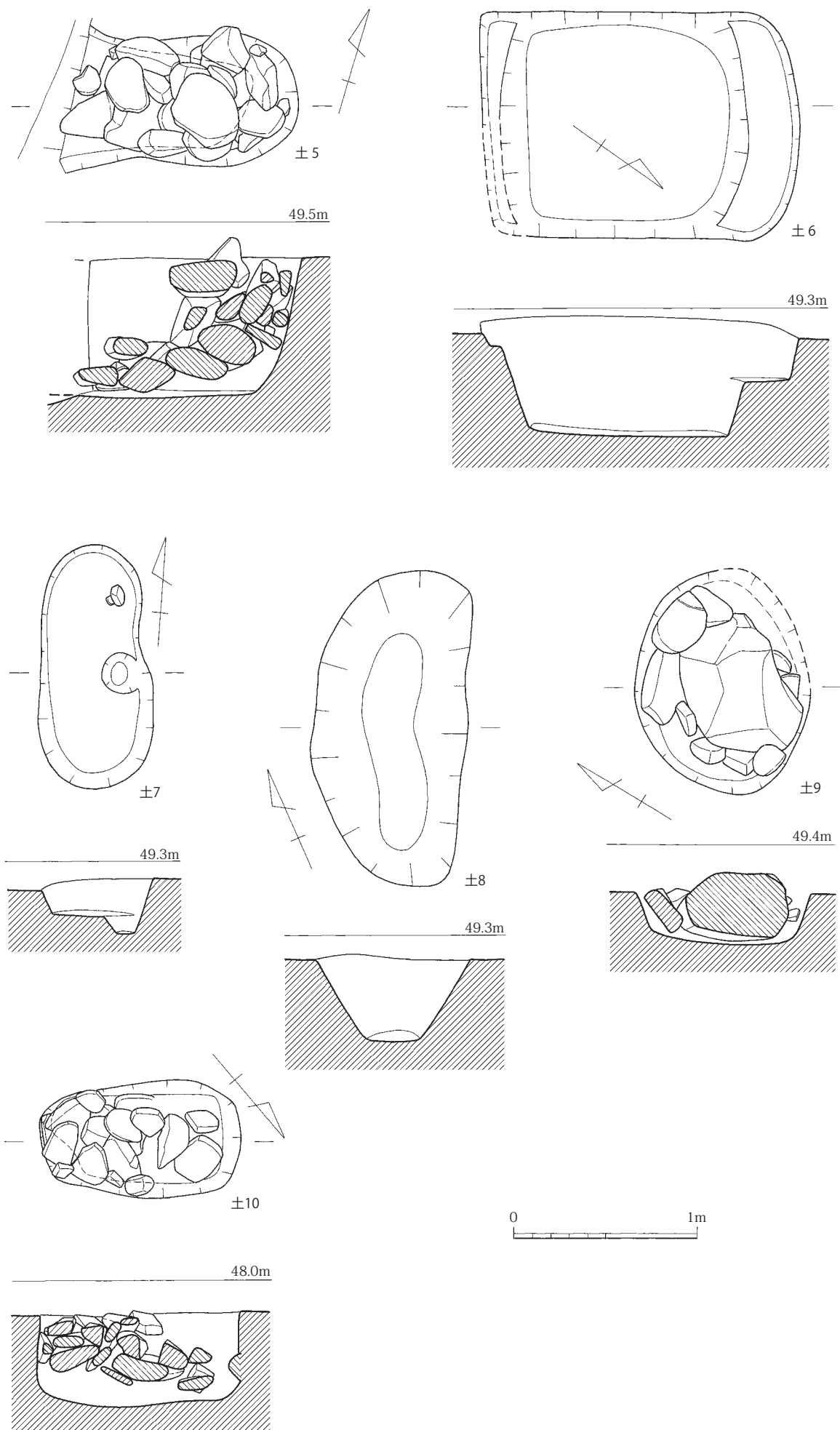
これら 1 ~ 4 号土坑は一辺長 1 ~ 1.5 m の隅丸 (長) 方形プランで、深さも 0.5 m に満たない。曾木家墓地の深さが 0.8 ~ 1.5 m を測ることから墓地の可能性は低いと思われるが、特に 2 ~ 4 号土坑は規模・形状が似ていて、かつ方位を揃えて近接しているという点で同じような性格を持つものと思われる。これらの方位は曾木家墓地を画する溝に一致する。

5号土坑（図版4、第10図）

後述する南西端土坑群から離れて検出したものだが、結果的に掘形が土坑群に連続するものとなり、先後関係は確認できなかった。長軸 1.5 m、短軸 0.8 m ほどの長円形平面を呈し、深さは約 0.8 m となる。内部には川原石が多く入っていたが、図で見るとその状況は東側で厚く、西側に向かって薄くなる。南西端土坑群との接点付近には攪乱などは認められないことから、この川



第9図 土坑実測図1（1/30）



第10図 土坑実測図2 (1/30)

原石のあり方は本来的なものであろう。

出土遺物（図版 18、第 7 図 10） 陶器播鉢片である。口縁部はだらりとした玉縁となり、外面では直下に甘い沈線 2 条を刻む。内面の播目は整って配置されている。器肉は灰赤褐色で緻密さを欠くように見える。内外の器表は鉄釉が掛けられて、灰赤紫色といった色となる。

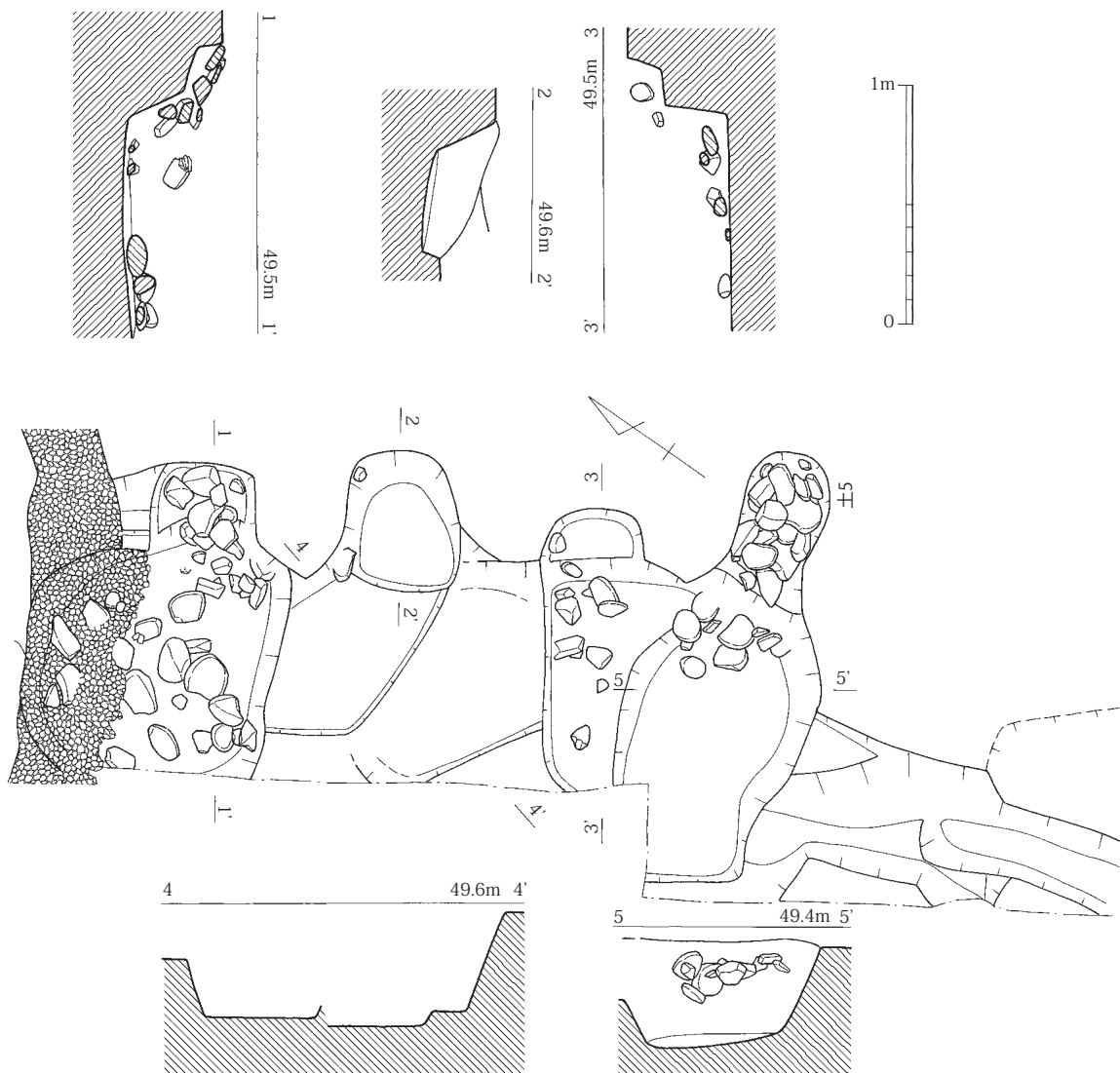
6 号土坑（図版 4、第 10 図）

6～8 号土坑は先の土坑群と異なって調査区北側に位置する。この 6 号土坑は平面形がほぼ長方形で、長さ 1.6 m、幅 1.2 m の規模をもつ。両小口部分には小さなテラスがあって、その内法で測った長さは 1.4 m となる。深さは最大で 0.6 m ほどであった。埋土は中位以上に薄い灰黒色土がレンズ状に入り、それ以下は灰茶褐色土となるが、これらも締まりのないものである。

この土坑は先の 2～4 号土坑と 10 m ほど離れているが、同じ方位をとり、同じような埋土である。

7 号土坑（図版 5、第 10 図）

6 号土坑の南に近接して位置する長円形の土坑で、長軸 1.3 m、短軸 0.6 m ほどのやや歪な形状となる。深さは約 0.2 m。埋土に顕著な特徴はない。



第 11 図 土坑実測図 3（南西端土坑群、1/30）

8号土坑（図版5、第10図）

7号土坑の東に近接して位置する。これも不整長円形土坑で、長さ1.7 m、幅0.8 m、深さは最大で0.5 mほどである。これも埋土に顕著なものはない。

9号土坑（図版5、第10図）

1号溝状遺構の肩に掘り込まれた土坑で、0.9～1.2 mほどの長円形プランとなる。深さは0.3 mである。内部は長軸0.8 mほどの比較的大きな石の周辺に小型の石を配したような形となるが、根固めといったような状況ではない。巨石の下には何もなく、単に邪魔になる大石を埋め込んだだけであるかも知れない。埋土は地山系のものであった。

10号土坑（図版6、第10図）

調査時に11号土坑としていたものを改める。東端の低い畑地で検出した唯一の土坑で、検出時は1 m弱の大きさと判断していたが、結果的に長軸1.1 m、幅0.6 mの比較的整った隅丸長方形平面の土坑となった。深さは最大で0.5 mを測る。内部には川原石が詰め込まれていたが、出土遺物はない。

南西端土坑群（図版6、第11図）

調査区の南西端で連続する土坑群を検出した。埋土の大部分は非常に柔らかい締まりのない土が堆積し、出土品も一見して近代以降と思われる陶磁器類や瓦が多く入っていたが、これは隣接する町営住宅のフェンス設置に伴う攪乱坑の可能性が高い。あるいは江戸後期から明治期に存在した曾木家の屋敷を解体した際の廃棄物であるかも知れない。攪乱坑から外れた部分では上半が赤色系の、床面付近では灰褐色の緻密な埋土となっていた。内部に拳大から小児頭大ほどの川原石が入るものが多いが、意識的に配列されたものはなく、埋土中に浮いたもの、床面に張り付いたものなどがあってその性格を推し量ることは困難である。緻密な埋土からの出土遺物はない。

4) 溝状遺構

1号溝状遺構は緒方3号墳の周溝を呼称したので、ここでは2～4号溝状遺構の説明を加える。

2号溝状遺構（図版7、第6・12図）

1号溝状遺構の南に位置し、南西部では並行して走るが、1号溝状遺構が途切れるところから北東へ屈曲するようである。ただ、3号溝状遺構とした石組溝の北西側では痕跡を辿れない。また、溝底の傾斜が一定しておらず、屈曲部付近が非常に浅くなってその付近で一旦途切れるが、北側にも南半と同様の石組みが一部に見られることから同一のものと判断した。深さは最大で0.5 m、溝断面は対称形とならず、西側の傾斜が緩くなっている。埋土は一様に茶褐色土が堆積していた。

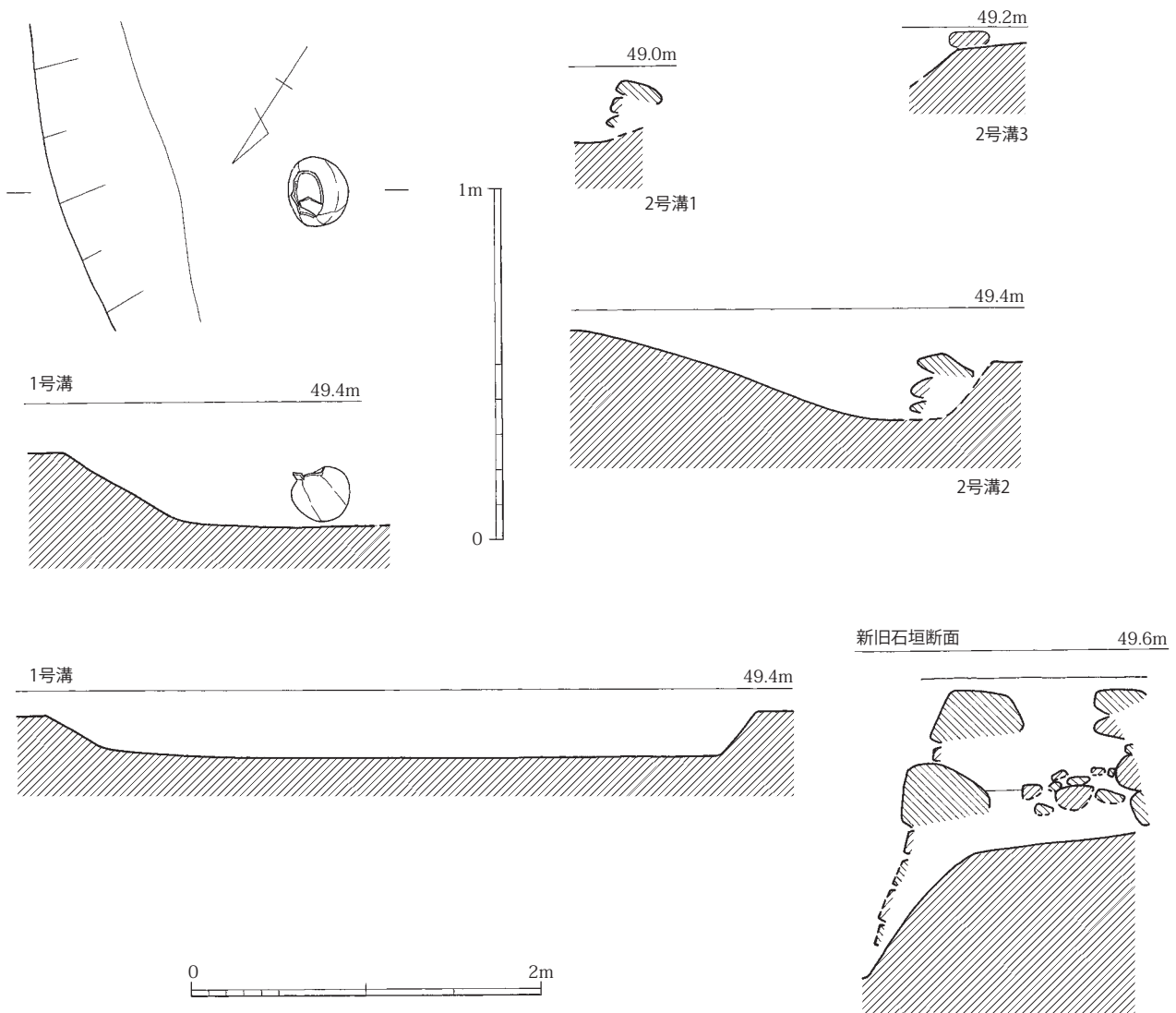
東辺のみに川原石を1～4段に積み上げた石列を伴い、その高さは最大で0.3 mほどである。検出時は溝内にも多くの川原石が散乱していたことから、本来はなお数段の高さがあったものと思われる。石の組み上げ方はいわゆる布積みを基調とするようで、後述する古い石垣の積み方に共通する。

出土遺物（図版 18、第 7 図 8・9） この緒方古墳群そして町道を挟んで東に位置する七ツ枝遺跡の調査では、姫島産黒曜石を主体とする多くの石製品・剥片が出土しているものの、該当する遺構や土器は全くわかっていなかった。今回の整理の中で、ようやく見つかったのが 8 に図示した土器である。逆 L 字形口縁となる甕で、1/8 ほどの破片である。器表は荒れて、調整痕は見えない。弥生中期前半のものである。8 は瓦質の鍋で、内外の器表は黒色化、器肉は灰白色となる。体部は浅くなるようで、長い頸部が外上方に伸び、拡張された口縁部が直立する。これも器表が非常に荒れているが、体部外面下半には平行叩きが見える。

3 号溝状遺構（図版 7～9、第 14 図）

曾木家墓地を画する石積みの溝である。仮に南西の直線部を 1 区、短く屈曲する部分を 2 区、再び屈曲して延びる部分を 3 区として説明を続ける。

1 区 6.2 m の長さを検出し、南西方向に調査区外へ伸びる。た。石積みは基本的に南東側のみで、北西側は地山を掘削したままである。ただ、2 区に近い 2.5 m ほどの間では石積みとは呼びがたい、大振りの川原石を平置きしただけの石列が見られ、これは墓地の基壇化粧に続く。南東側の石積



第 12 図 溝状遺構等実測図 (1/40)

みは小振りの川原石を4段ほど積み上げたもので、高さは約0.4 mを測り、反対側の地山の高さに相当する。積み方は雑で、2号溝状遺構のような規則性は見えない。

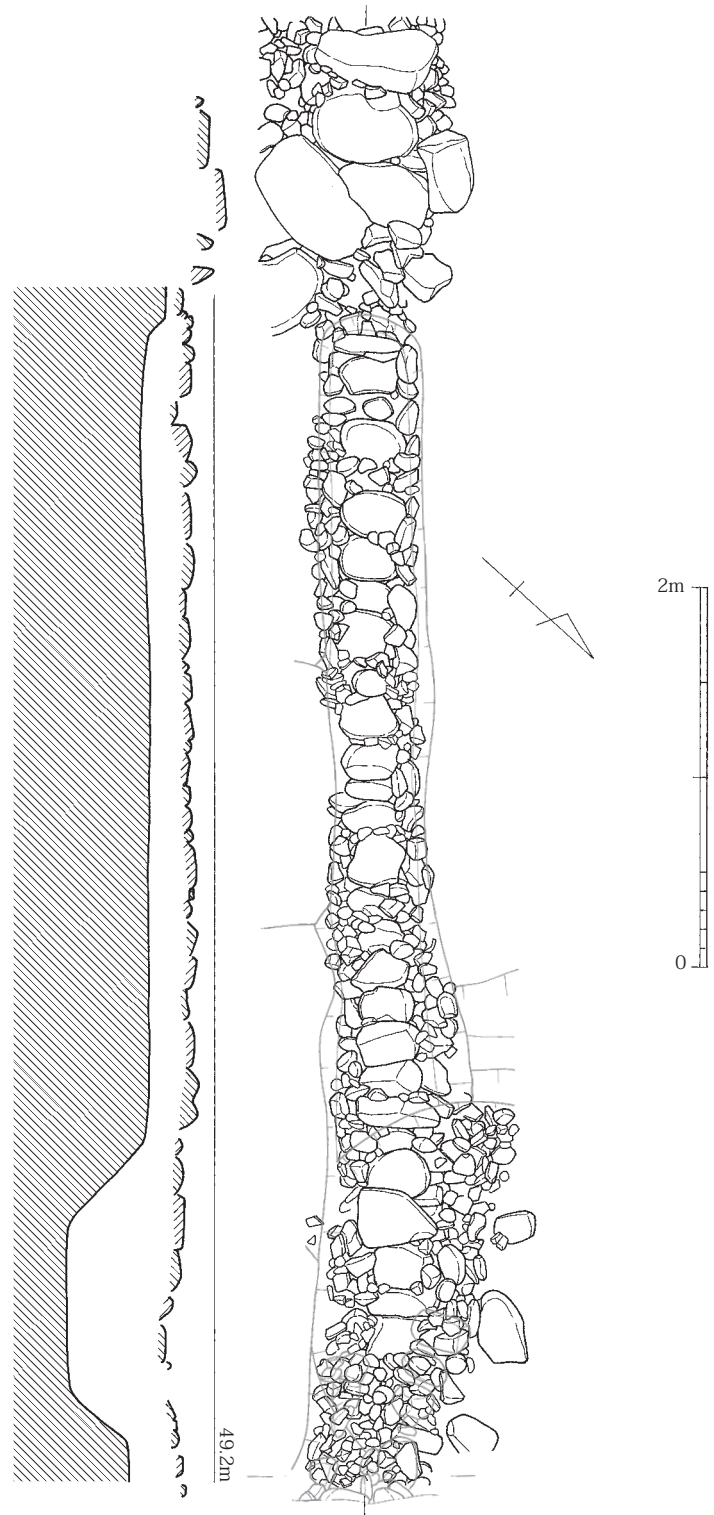
2区 1区から直角に折れて3 mの長さで延びて、再び直角に曲がって3区へ続く。ここから3区の南西半にかけては両側が石積みとなっていて、1区に比べてやや大振りの石材を使用するようである。石の積み方は1区と同様である。

2・3区の屈曲部には5個の大振りの川原石を並べて石橋とし、石橋の正面に5号墓が位置する。その間に集石があるが、連続せずかつ上面を揃えておらず、参道ではないようである。

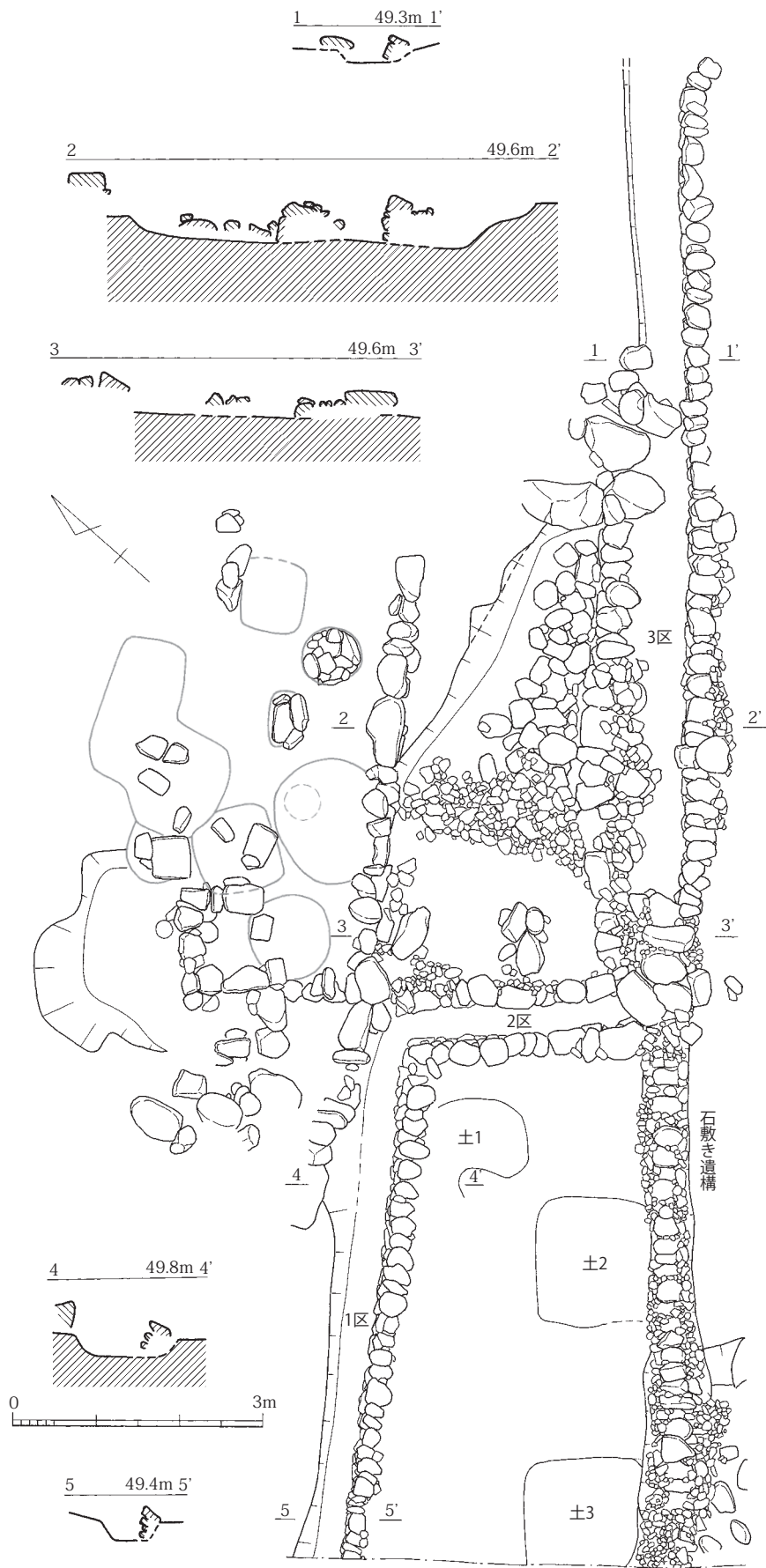
3区 石橋から11.5 mの長さまで直線的に延び、そこからは東南に折れて畑地を区画する石垣へ連続する。また、2区境のコーナーから7 mの地点までは両側に石積みがなされ、特にその間の中央付近ではより大型の石材を基底部に置いて、小型石材を多く使用するとともに、溝の内側よりも北西背面側に面を揃えているように見える。その背面は大小の川原石を敷き詰めたような状態となっていた。この石材が敷き詰められた範囲は平面形状が整わず、また石材の上面を揃えているわけでもなく、意味不明であるが、葬送の儀に利用されたものであろうか。

出土遺物(図版18、第18図1・2)

2点を図示したが、溝内ではなく3区西側の敷石状の礫群からの出土である。1は「石組溝石列間表土」とあって、出土地点がやや曖昧である。ぐい呑み様の小型椀で、直立する体部と底部間には弱い稜をもつ。灰味の強い青灰色をもって花文と花びらと思われる文様を3度繰り返す。灰味帯びる白濁釉が畳付をのぞく全面に施され



第13図 石敷き遺構等実測図(1/40)



第14図 曾木家墓地周辺遺構配置図 (1/80)

る。2は陶器質であるが、焼成不良のためであろう。これも高台畳付を除く全体に青みを帯びる白濁釉をかけている。施文は灰青色となる。

そのほかにも多くの土器類が出土しているが、一見してほとんどが非常に新しいものと判断して図示していない。旧土地所有者の初山潮見氏のご両親が健在の頃は、曾木家墓地の管理をされていたといい、大部分の出土品は「昭和」の終わり頃以降に埋没したものと思われる。

4号溝状遺構（図版9、第6図）

調査区南東端、水田として使用されていた部分の南西端で検出した。護岸壁の一部と思われる石列を認めたが、接近して現水路が位置することからその前身水路であろうと考えている。現水路からの湧水もあって、十分な調査ができていない。

5) 石敷き遺構（図版10、第13図）

3号溝の2・3区の屈曲部から南西に向かって幅0.3～0.4mほどの石列を検出した。3号溝3区の延長線上に配置されていることから、両者には関連性があるであろう。西南端土坑群や203号土坑の上に置かれていた。比較的大きな石材をほぼ水平に並べ、その両側・目地に小石を置いている。通路として使用するには、小石はかえって邪魔となるであろう。多くの部分では石を除去するとすぐに地山が現れたが、南西端付近ではより多くの小石が大石を覆った状態で現れ、またその付近では暗渠となっていた。ただ、石敷きの下に空洞を設けておらず、粗朶などといったものも全くみられなかった。

なお、この石敷き遺構は3号溝の石橋付近に取り付くが、吐水口は確認していない。ただ、石敷き遺構の堀形は石橋の手前で完結していることから3号溝へ直接排水していなかったものと思われる。

6) 曾木家墓地（図版11～15、第16図）

曾木墨荘について

まず、調査地南の町営住宅がある地に「豹隠亭」と号した屋敷を構えた曾木墨荘について簡単に説明を加える。曾木墨荘（号、名は亮、字は土功、通称仁六）は下毛郡曾木村（現大分県中津市耶馬溪町）大庄屋遠入円助の長男として安永元年（1772）に生まれ、中津・杵築・熊本で医学・漢学・弹琴などを学んだ後、大庄屋職を継がずにこの上毛郡緒方に居を構えた。遠入家と姻戚関係にある矢野家は古くは大村（現豊前市）手永大庄屋を務めていたが、貞享2年（1685）に小倉新田藩（小倉小笠原藩の支藩）領が編成替えされてからは新田藩領久路土（現豊前市）手永大庄屋職を代々継承してきた。緒方の地は佐井川を挟んで久路土手永領と面していて、墨荘がこの地に居を構えたことと矢野家の存在は無関係ではなかったと思われる。

遠入家と矢野家はともに鎌倉時代以降、豊前南部で勢力を誇った宇都宮一族野仲氏の家臣だったといい、墨荘の父円助の弟恒蔵が矢野家に養子に入って家督を継いでいる。恒蔵の娘けいは墨荘に嫁いだが早世した。文化8年（1811）、恒蔵の嫡男、けいの兄である久路土手永領大庄屋建吉も33歳で病没し、残された嫡子恒七が9歳と幼かったことから、墨荘が中継ぎとして大庄屋職を

務めることになった。その後、文政4年（1821）、20歳の恒七に庄屋職を譲ったが、文政9年には隣接する新田藩領の岸井手永大庄屋に抜擢され、天保9年（1838）に67歳で執務中に急逝した。農政課としての評価が高かったことが窺えるのであるが、文人としても活躍していたようである。田能村竹田とは熊本遊学時に生涯の友となっただけでなく、天保3年（1832）に竹田は墨荘の岸井役宅を訪ねて1月ほど逗留、「梅花書屋図」（重要文化財、出光美術館）を贈った。それより先の文政元年（1818）、下毛郡正行寺（現中津市）の末広雲華上人を訪ねた頼山陽を、地元文人たちとともに耶馬溪へ案内している。頼山陽は「耶馬溪」を命名し、その景観を「耶馬溪図巻記」で天下に紹介した人物である。

1956年刊行の『築上郡史』（福岡県豊前市築上郡教育振興会）には、墨荘の子彦蔵、孫富蔵は緒方にいたが、後に門司へ移ったと記してある。ちなみに、慶応2年（1866）に起こった八月一揆で焼失打ち崩しを被った中に「岸井八石成恒庄屋兼帶曾木富蔵」の名が記されている。

註

三浦尚司「手永大庄屋 曾木墨荘の生涯」（『海路』第5号、2007）その後、「手永庄屋曾木墨荘」と題して、ほぼ同じ内容を所収した『豊前幕末傑人列伝』2012が刊行されている。

橋本和寛「豊前で描かれた田能村竹田の名画」2008年12月13日豊前市総合福祉センターでの講演会資料

その後、福岡県文化財保護指導委員の尾座本雅光氏から「矢野家系譜」の写しをいただいたが、十分咀嚼し得なかった。謝意を表するとともに、お詫びしたい。

曾木家墓地について

『新吉富村誌』1990には、旧土地所有者であり墓地を守っておられた初山タミ氏の言が紹介されていて、それを引用する。

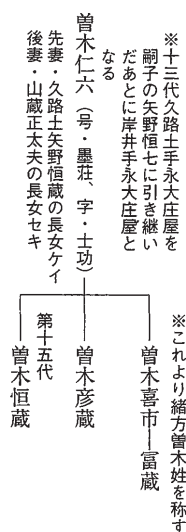
「あの人のことを近住の人は『八石さま』と呼んでいた。ずっと昔、庄屋さんをされていたそうじゃ。字や絵や詩がごうなお上手で、寺子屋もなさっていたそう。竹田や頼山陽も泊まったことがあるらしい。八石さまのお墓が屋敷の内にあったが、藪の中に埋まっていたので、このころ（昭和五十八年）・・・（以下略）」

近くの共同墓地に移したという。なお、共同墓地の墓碑には「昭和五十七年七月建之」とある。

また、この墓誌には年代の古い順に以下のように記されている

岸井彦蔵富蔵実父 明治四年六月十二日 五十四才
 ヨネ彦蔵妻 〃 卅一年五月二十四日
 エイ富蔵妻 〃 廿一年五月五日
 曾木富蔵 大正八年六月二日 （以下略）

この墓誌に曾木墨荘の名はなく、その子から始まっている。橋本和寛氏が主宰されていた「天随（墨荘の法名）忌」は、豊前市大村の矢野家墓地にある「釈天随」と流麗な文字が刻まれた墓碑前で行われていて、福岡県文化財保護指導委員の尾座本雅光氏からご教示を得た「矢野家系譜」には「大村に葬る」と記されている。大村の墓誌には「矢野家第五代より第十三代（＝墨荘）までの祖霊を、この應龍寺山に葬り廟宇とせり」と記されていて、やはり曾木墨荘は大



第15図
 曾木墨荘系図
 （三浦氏著作から一部改変）

村に葬られたようで、先の初山氏の言と食い違いがある。また、初山潮見氏によれば、「釈天随」の墓碑より数倍大きな墓石が、今回の調査地に2, 3基あったが、「昭和58年」の改装時に石材業者が持ち去ったということである。

さて、曾木家墓地は以下のような構成になっている。大きく墓域を画したと思われる3号溝状遺構、同溝1区北西の延長線上にやや大振りの川原石を横置きして画した簡略な基壇、基壇北西部の墓地群である。同溝3区と基壇の間にも石敷きが見られるが、形状不整と言ってよく、何を意図したものか不明である。

また、5号墓の北東、6号墓の南東に隣接して、直径1.5mの円形の範囲に余り硬化していないが赤変した焼土塊や小炭の混ざる深さ0.1mほどの浅い落ち込みがあった(4号墓、図版12参照)。この落ち込みの中、北に偏して直径0.4mの整った円形に灰の詰まった部分があって断ち割ったところ、灰の深さは0.1m足らずの浅いもので、下部には何ら遺構は認められなかった。

1号墓(図版11、第17図)

墓群の東端に位置する。墓壇上面は一辺 0.7×0.9 mの正方形に近い平面形となるが、床面はほぼ0.6mの方形となっている。深さは0.8mを測る。

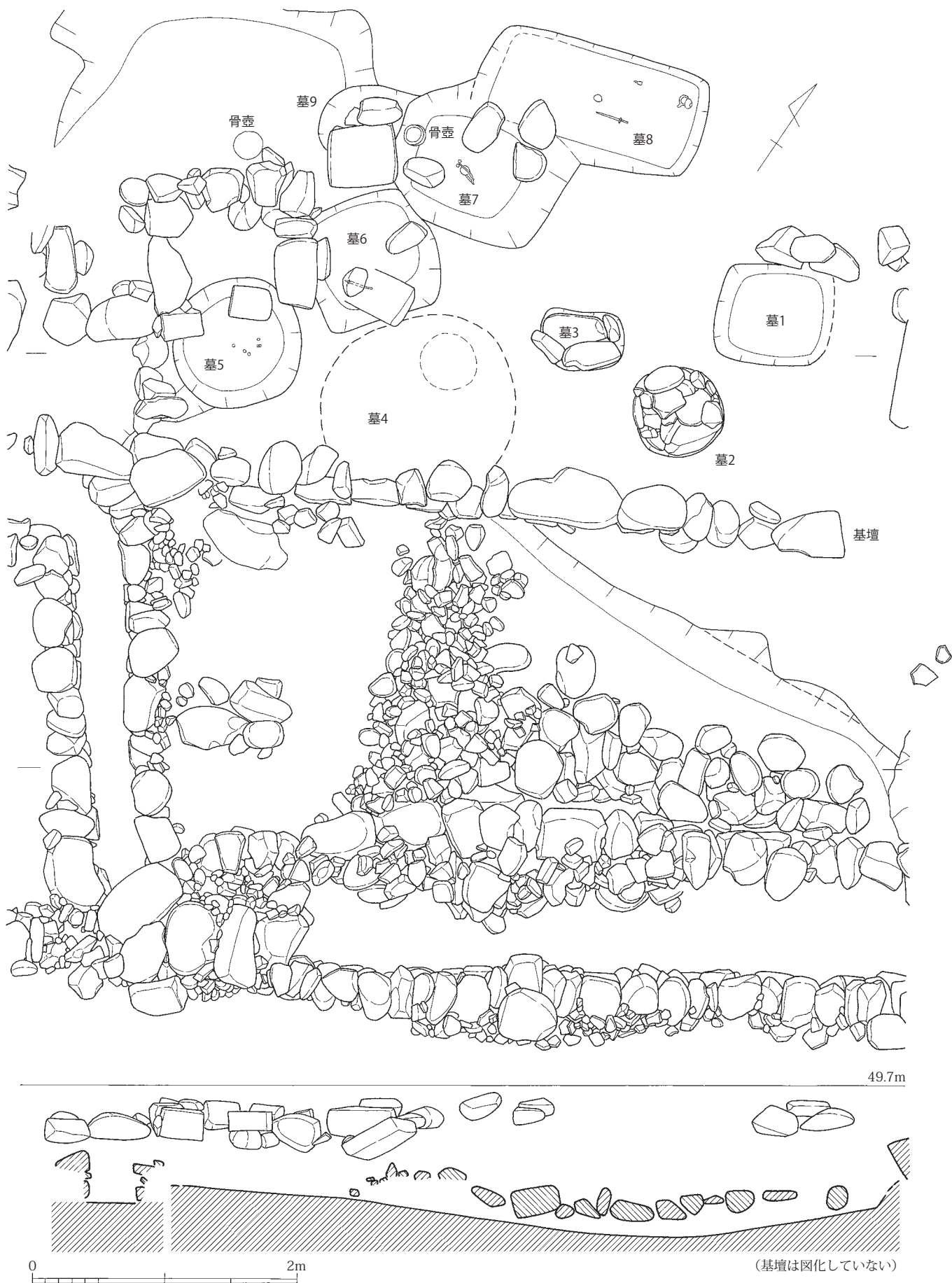
出土遺物(図版18、第19図) 床面から六道銭が出土した。5枚が錆着、判読できるものは寛永通宝であるが、鑄造が粗悪で穴が開いている。図示したものは鉄釘である。頭部の形状は見えず、身部断面が一辺0.3cmの矩形のものが多い。すべてに木質が付着しているが、1～4に関しては頭部と身部で木目の向きが異なっている。頭部の先端から木目の変換点までの長さが約1.5cmのものが多いことから、棺に用いられた木材の厚さもほぼ同じであると推定される。7・8号墓に比して非常に数が少ないので、棺の構造が違っていたのか、あるいは棺ではなく小さな木箱に使用したものであろうか。

2号墓(図版11・12、第17図)

1号墓の南に近接する。検出時は直径0.65mほどの円形土坑に礫が詰め込まれたような様であったが、礫を除去すると板石が現れ、さらにその下に甕が納められていた。深さは0.9mほどである。

出土遺物(図版18、第18図3・8～10) 3は無文白磁の杯で、口縁部の1/3を欠く。内面に小さな目跡が2箇所残るので、おそらく3点で支えたものであろう。ほかにも内面には小さな荒れが目立つ。釉は青みを帯びる半透明白濁のようである。この磁器の出土は記憶になく、後述する櫛などと共に甕内から出土した物でもないといい、帰属が不確かとなっている。8は甕棺として使用された完存する陶器である。口径30.2cm、器高46.2cmを測る。体部は張りが弱く、最大径部は上位にある。頸部は直立し、口縁部は内外に肥厚させるが、内側の張り出しの方が大きい。器肉は灰赤褐色、内外面は釉薬が掛けられて灰茶褐色といったような色となる。口縁部上面および外底面は露胎であるが、底部には熔着が見られる。外面はほぼ全体に格子叩きが見えるが、浅く、不連続である。体部下端付近は篋削りのようである。内面にも格子の当て具痕が残る。

9・10は甕の底に溜まっていた土の中から数点の歯とともに出土した。9は陶器製の印で、印面の大きさは1.4cm四方、つまみを含めた高さは1.5cmを測る。印面には朱が残る。印面以外はおおむね灰黄褐色であるが、つまみの下や側面の一部に光沢のある黄白色の釉が残っている。なお、文字は「香雪□印」と読めるが、1文字は判読不能。10は木製の櫛で、高さ2.5cm。見るからに



第16図 曾木家墓地遺構配置図 (1/40)

小児用である。部分的に緑青のようなものが付着するが、甕内部に金属製品はなかった。

3号墓（図版 11・12、第 17 図）

2号墓の西に位置する。これも2号墓と同様に礫が詰まった0.5～0.6mの長方形に近い土坑であったが、ここでは礫の下に何も検出できなかった。規模が小さいことから、埋葬施設ではない可能性もある。出土遺物もない。

5号墓（図版、第 17 図）

3号墓の南西に位置する。石橋の正面に位置すること、方形基壇が設置されていることなどから見てこの墓群の中心と思われる埋葬部であるが、方形の石組（基壇）とはずれている。

墓壇は上面で直径1m、床面で0.7mのやや歪な円形となるが、ほかの墓壇を参考にすれば本来は方形であったのであろう。深さは1.1mを測る。墓壇上位で礫が検出されたが、これは棺上に置かれたものが棺の腐朽によって落ち込んだものと思われる。

なお、5号墓の背面となる北西部、1m離れた位置で火葬骨の入った骨壺が埋め込まれていたが、表土中にあったもので、蔵骨器を見てもごく新しいものと判断された（図版 15 参照）。

出土遺物（図版 19） 床直上に六道銭があり、その下で木質・蕈状の繊維質が認められた。寛永通宝6枚を使用したもので、1枚には布片が付着する。

6号墓（図版 13・14、第 17 図）

5号墓の北に近接するが、一部が5号墓を囲む基壇石列に覆われている。また、検出時に墓石台座が半ば埋もれた状態で露出していた。なお、7号墓と切り合っているが、先後は確認できていない。

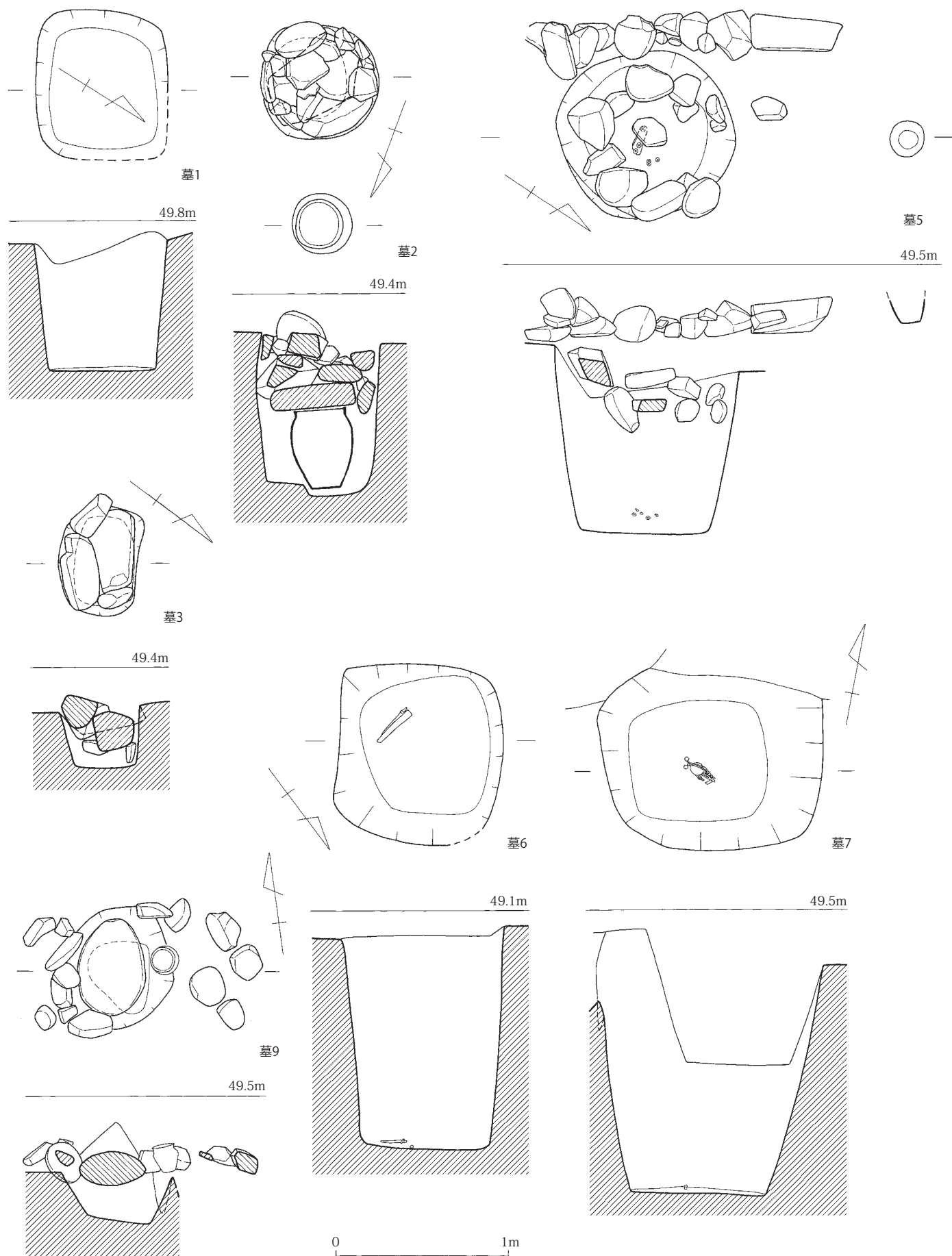
墓壇は上面で一辺0.9×1mほどの規模の方形平面となり、床面では0.8m弱のやや歪な方形となる。深さは1.2mほどである。

出土遺物（図版 19、第 19 図） 床面から六道銭・刀子・青銅製飾り金具がまとまって出土したほか、埋土中から鉄釘が多く出土した。

六道銭は6枚が重ねられて、糊殻に包まれていた。取り上げの際に離れて判明した1枚は寛永通宝である。

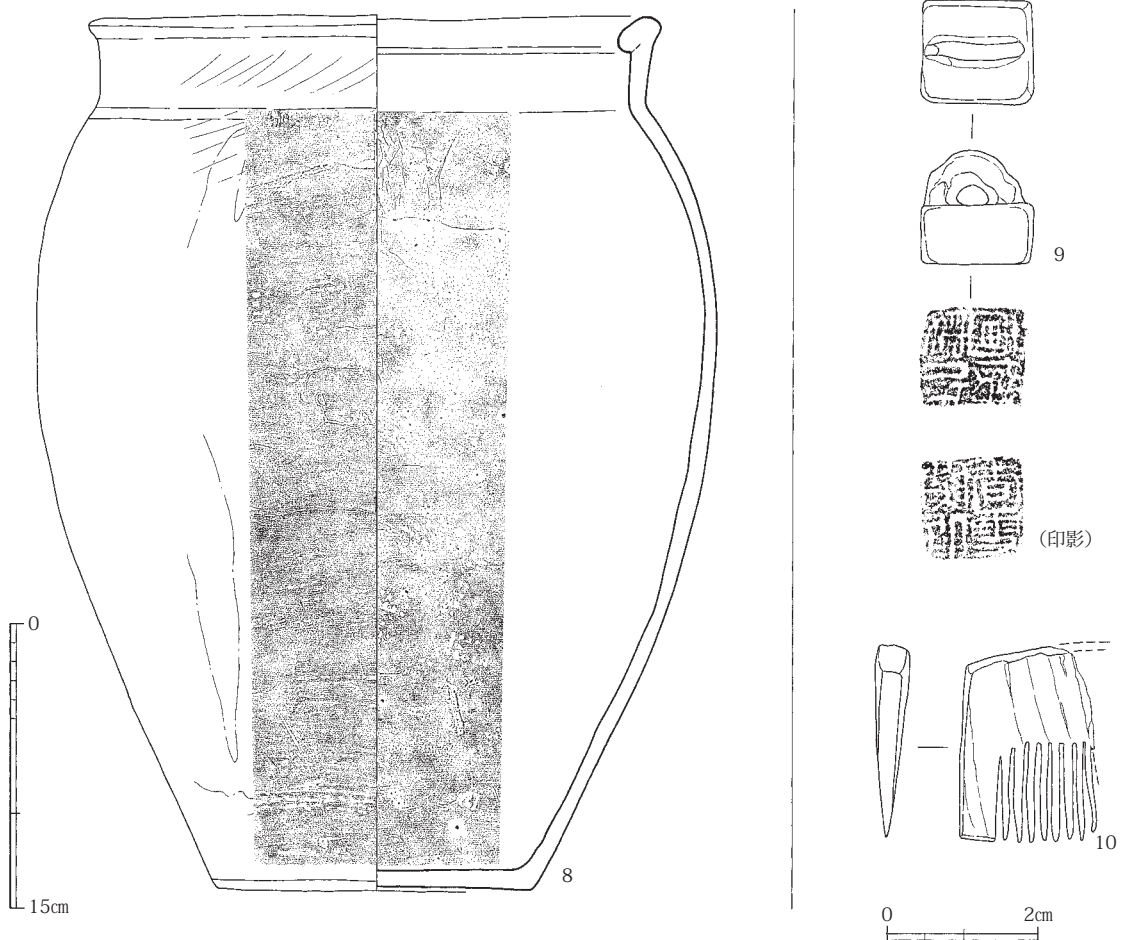
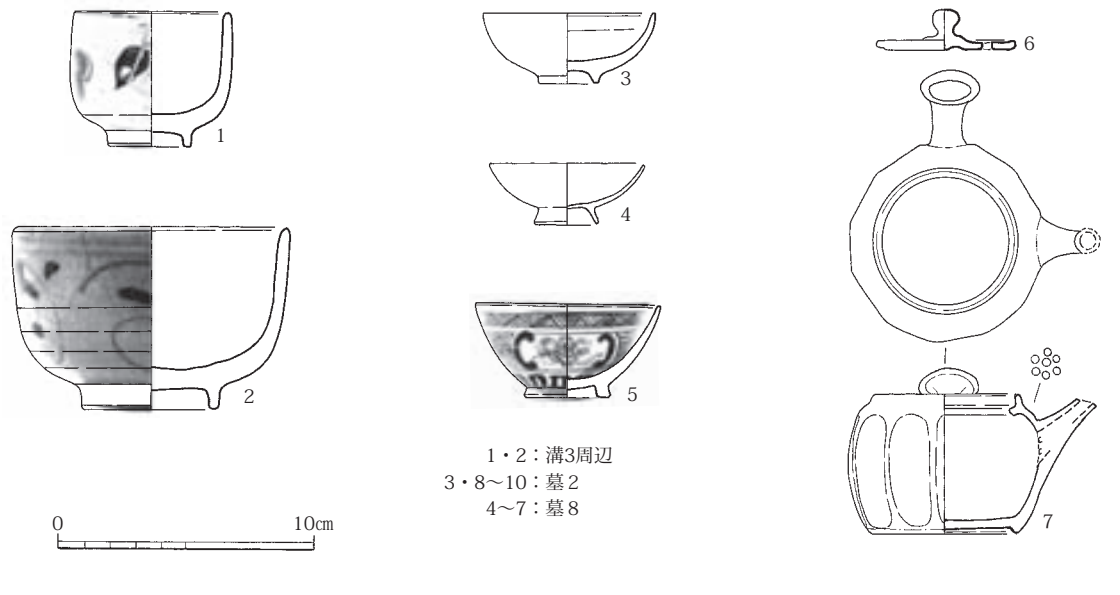
第 19 図 6 は青銅製の鞘尻である。長さ0.6cm、幅2.1cmで、両面の中央に直径0.2cmの孔が穿いている。また、鞘尻の中には鞘木が残存している。7は鉄製の刀子で、刀の先端は欠損している。刀身残存長は28.5cm、刀身最大幅は2.1cm、脊幅は0.3cmで、刀身上部には鞘木が残存している。鞘口には長さ1.0cm、幅2.7cmの青銅製装具が取り付けられており、その下には幅0.5cmの組紐が巻かれている。茎には木質が付着しており明確ではないが、長さ6.4cm、幅は1.7cm、厚さは0.3cmで、直径約1.5mmの目釘穴が1箇所穿けられている。なお、出土時は朱・黒漆塗の鞘が伴っていた。8は青銅製の飾りで、残存長3.7cm、最大幅1.6cm、厚さは0.5cmである。表面には幅0.3cmの組紐が付着しており、一部革とみられる有機質も付着している。9は8に似た飾りであるが、一部に金が残存していることから、本来は金銅張であったと推定される。残存長2.8cm、最大幅1.2cm、厚さ0.4cmである。なお、表面には革紐とみられる有機質が付着している。

10～43は鉄製の釘である。頭部は木質に埋もれていて形状が見えず、身部断面は一辺0.3cmの矩形のことが多い。10・11・35のように長さが6cmを超える大型の釘も出土している。木質が付

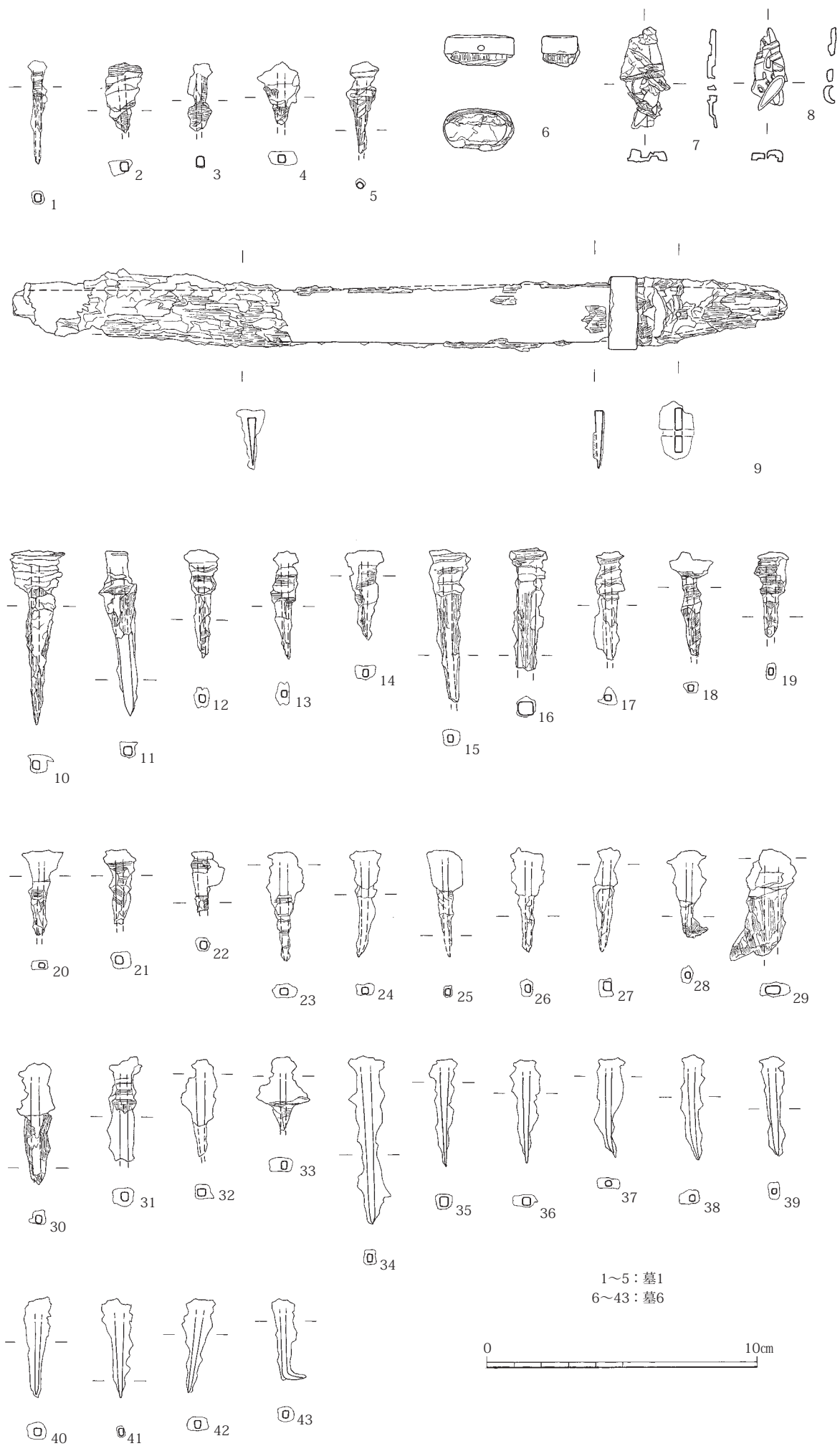


第 17 図 近世墓実測図 1 (1/30)

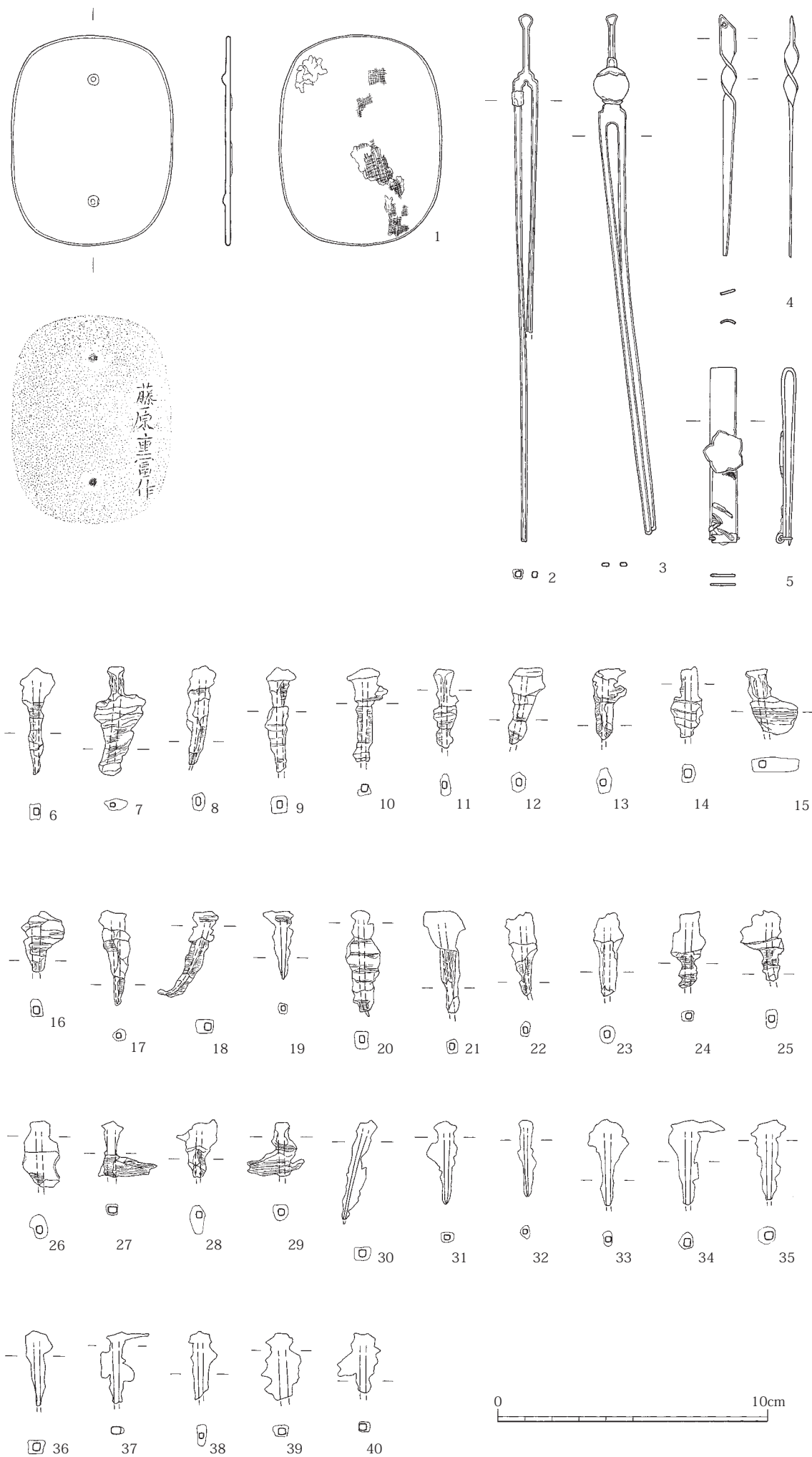
着しているものが多いが（10～33）、中でも10～23は頭部と身部で木目の向きが異なっている。
1号墓と同様に頭部の先端から木目の変換点までの長さが約1.5cmのものが多い。



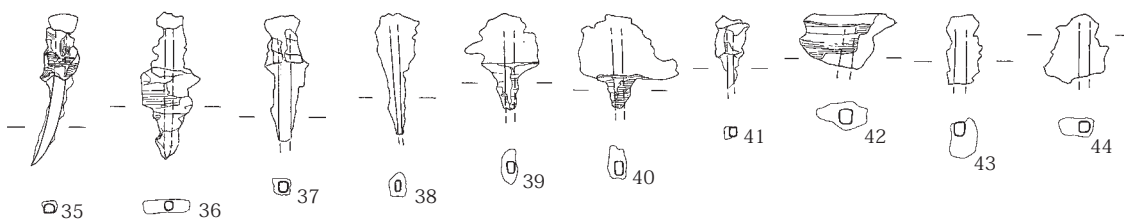
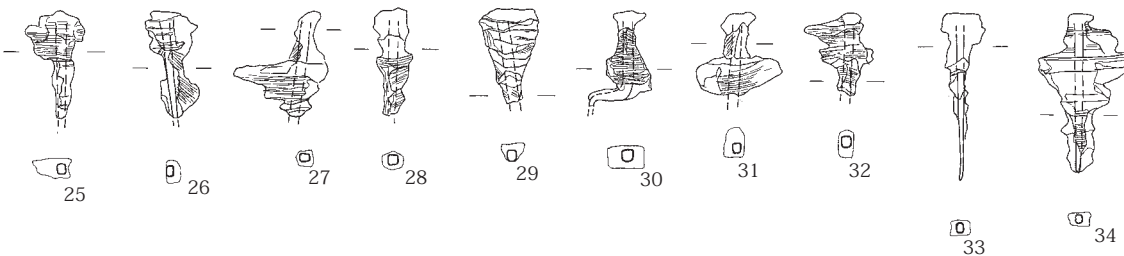
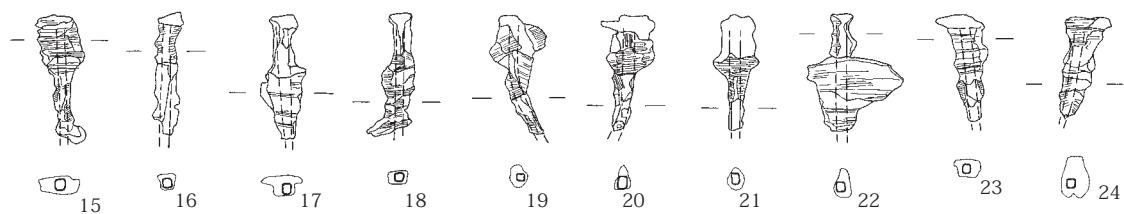
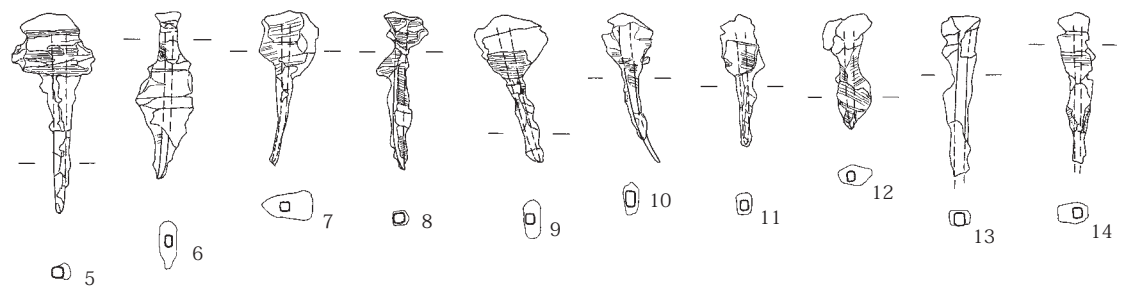
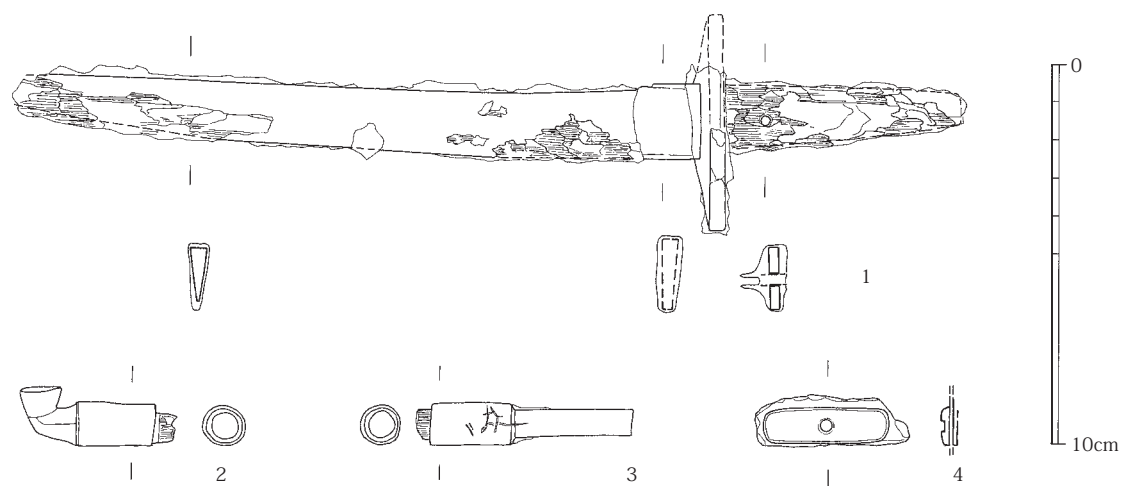
第18図 出土土器等実測図2 (1/3、1/4、1/1)



第19図 1・6墓出土遺物実測図1 (1/2)



第20図 7墓出土遺物実測図1 (1/2)



第21图 8号墓出土遺物実測図(1/2)

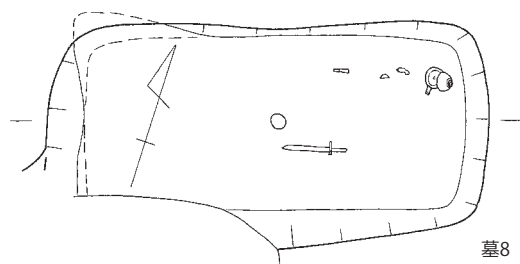
7号墓（図版 14、第 17 図）

墓壙は上面で一辺長 1.2 m ほどの方形平面となり、床面では 0.7 m 強の方形となる。深さは 1.5 m を測り、この墓群中で最も大きく深い墓壙を有する。なお、図化していないが埋土中位付近で壁に沿うようにかなりの礫群が出土したが、落ち込んだものにしては深すぎるように思う。しかし、棺台にしては床直上ではなくまた配列に規則性が見えない。棺を固定する裏込めであろうか。

出土遺物（図版 19、第 20 図） これも床面から六道銭や青銅製手鏡・髪飾りなどがまとまって出土した。六道銭は鉄銭 5 枚と寛永通宝 1 枚からなる。

1 は青銅製の鏡である。長さ 7.75cm、幅 5.95cm で楕円形を呈する。背面には縦方向に突起が 2 個付いており、紐を模した装飾かあるいは木柁などに嵌め込むためのものであったと考えられる。また、文様などの装飾は確認できず、右下に「藤原重富作」という銘が認められるのみである。なお、背面・鏡面ともに漆塗りの繊維片が付着している。2～4 は簪である。2 は全長 19.5cm の松葉脚簪で、右脚下半の一部を欠損している。先端は扁平で先端が内湾しており、耳かきとして使用できるようになっている。なお、右脚の上部には幅約 0.5cm の銅板（？）が巻きつけられており、左脚においてもその痕跡が確認できる。3 は全長 19.2cm の松葉脚玉簪である。2 と同様に先端は耳かきの形態をしている。この下に赤く塗られた玉が付いており、玉の上下には花形の装飾がみられる。4 は 2・3 と異なり、青銅板の上部を 2 回捻った形態をしている。青銅板の幅は約 0.6cm で、下端に向かうほど幅は狭くなっている。上端部は斜めに裁断されており、直径 0.1cm の孔が一箇所穿けられている。7 号墓では細い鎖など垂飾製品とみられる破片が出土していることから、本来はこの孔に何等かの垂飾品が付けられていたと推定される。5 は青銅製の毛抜きである。長さは 6.5cm、幅は 1.05cm である。青銅板を中半で折り曲げた形態で、両端には可動式の留具が付いている。留具は片面の端部を丸めることで固定されている。同面には花形飾りが付いており、布や紐の断片も付着している。

6～40 は鉄製の釘である。頭部はよく見えないが、身部断面が一辺 0.3cm の矩形のものが多い。また、木質が付着しているものの中で（6～29）、6～16 は頭部と身部で木目の向きが異なっている。頭部の先端から木目の変換点までの長さが約 1.3cm のものが多い。



49.7m

8号墓（図版 15、第 22 図）

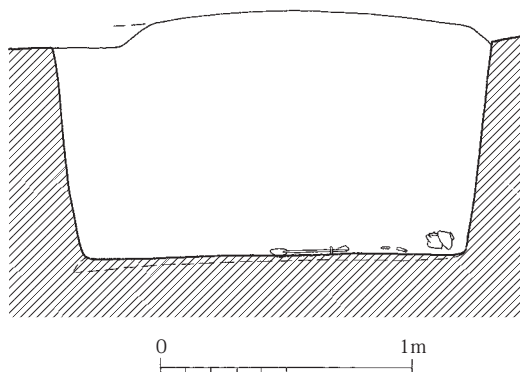
7 号墓の北にあって切り合うが、これも先後は確認できていない。

墓壙は床面で長さ 1.5 m、幅 0.7 m の長方形となり、唯一の寝棺が使用されている。

出土遺物 床面から煙管や急須、陶磁器などが出土した。

金属製品（図版 20、第 21 図）

1 は鉄製の刀子で、刀の先端や脊側は欠損する。残



第 22 図 近世墓実測図 2 (1/30)

存長は 25.4cm で、刀身上部には鞘木が残存する。鞘口には長さ 1.3cm、幅 2.0cm の青銅製装具と鐔が取り付けられている。黒色系の漆膜が伴う。

2 は青銅製の煙管の雁首である。火皿の直径は 1.2cm、脂反しの長さは 1.3cm、肩部の長さは 2.1cm、小口の直径は 1.1cm である。羅字として用いた竹が一部残存している。3 は青銅製の煙管の吸口である。肩部の長さは 2.2cm、小口の直径は 1.1cm、吸口部の長さは 3.1cm、口付の直径は 0.6cm である。2 と同様に羅字には竹を用いる。また、肩部の一部に紐とみられる有機質が付着している。4 は不明青銅製品である。2 枚の青銅板の間に革とみられる有機質が挟まれている。表面の青銅板は長さ 1.0cm、幅 3.3cm の楕円形で、中央には直径 0.3mm の孔が穿いている。裏面の青銅板は欠損が激しく、法量や形態などは不明である。

5 ～ 44 は鉄製の釘である。頭部は見えず、身部断面が一边 0.3cm の矩形のものが多い。また、木質が付着しているものの中で（5 ～ 37）、5 ～ 32 に関しては頭部と身部で木目の向きが異なる。頭部の先端から木目の変換点までの長さが約 1.3cm のものが多い。

陶磁器（図版 19、20、第 18 図 4 ～ 7）

4 は墓壇底中央付近で刀子のそばで正立して、5 は 6・7 の急須の上に伏せられた状態で墓壇内北西隅付近から出土した。いずれも大きく乱れていないことから本来の位置を保っていると思われる。棺内床面に置かれたものであろうか。

4 は白磁杯で、高台の 1/4 を欠く。器肉は薄く、内側に濃青色釉で竹の図と「聖賢」の文字が表される。濃く発色する部分がより盛り上がっていてプリントのようである。5 も磁器のようであるが重量感がある。高台置付けが露胎で、そこを見ると碍子のような感じである。ほかは全面に白濁釉を掛け、茶褐色に発色する文様を、おそらく手書きで描いたものであろう。

6・7 は小型の急須で、注口端を一部欠く。外面に松・桃・梅のような柄を描き、蓋にも同じようなモチーフを描いている。外底面外周に「明治二歳次己巳初□」と墨書し、中央付近に小さな字で「□□ヨサ□□」と添えている。

9 号墓（図版 15、第 22 図）

6 号墓の北西にあって、7 号墓と一部で切り合うがこれも先後は確認できていない。表土を除去した段階では墓石台座が落ち込んでいたが、その下に直径 0.6m ほどの不整円形の落ち込みがあって、長軸 0.5m ほどの川原石が据えられたような状態で出土した。

川原石の下は深さ 0.3m ほどの掘り込みが見られたが、平面形状はやはり不整で、床面も傾斜をもっていて墓との確信が持てないでいる。

7) 石 垣（図版 16、第 12 図）

調査区のうち、西側 2 筆と東の 1 筆は 1 m 以上の高低差があると記したが、その間には石垣が組まれて、現況ではそれは初山氏宅に近い部分で中央の筆（畑地）へ上る道が作られていて、その北西部の石垣はさらに延びて最終的には 3 号溝に連続していた（第 6 図参照）。

現石垣 この石垣の北半部を図版に掲載している。南半は排土で覆われているが、残存部を見るとこの地域で「矢ノ羽築」と呼ばれる川原石を斜めに積む方法を主として用いている。南西端では、基底部地山から頂部までの高さは 1.6 m を測る。

古石垣 表土を除去する段階で、現石垣の西側にほぼ並行して走る石列が現れた。両者の間はこの付近の地山土によく見られるクサリ礫を多く含む締まりのない土で埋められていた。現石垣を除去した後に現れた石垣は、基底部分が現石垣よりも0.8 mほど高い。古石垣の東側を地下げして、田面を拡大したものであろう。使用する石材は現石垣同様に扁平な川原石であるが、「ヌノ築」となっていて、2号溝のそれに近い。

8) その他の遺構と遺物

今回の調査では、黒曜石を主体とする石器等がかなり出土した。弥生時代の遺物は2号溝状遺構中の甕片、そして次に紹介する石斧があるが、それでも後述する七ツ枝遺跡と共に黒曜石の量が非常に多い。また、近世遺物が若干出土しているので、それらの紹介を行いたい。

表2 緒方古墳群出土石製品観察表

番号	出土位置	器種	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重量 g	石材
1	2号溝	石斧	(7.0)	(9.0)	(4.7)	313.3	玄武岩
2	4Tr	火打石	1.9	1.2		2.4	チャート
3	上段石列西側 表土下	火打石	(1.5)	(1.2)		0.9	玉髓
4	2Tr周辺表土	スクレイパー	3.7	2.9	0.8	7.7	黒曜石
5	石敷下土坑 赤褐色土	スクレイパー	5.4	2.5	0.9	6.4	黒曜石
6	1Tr表土	剥片	4.4	2.0	0.6	3.3	黒曜石
7	1Tr表土	剥片	4.6	1.7	0.5	2.6	黒曜石
8	2Tr周辺表土	剥片	3.1	4.1	0.9	7.2	黒曜石
9	4Tr	剥片	4.5	2.6	0.8	7.9	黒曜石
10	5号土坑	剥片	2.7	2.4	0.8	3.1	黒曜石
11	調査区西南端土坑群	剥片	3.9	1.9	0.7	4.1	黒曜石
12	7号土坑	剥片	4.4	2.6	1.1	9.1	黒曜石
13	7号土坑	剥片	3.7	2.9	0.9	7.8	黒曜石
14	2号溝	剥片	2.0	2.0	1.0	3.5	黒曜石
15	2号溝	剥片	2.7	3.1	0.6	2.5	黒曜石
16	下段南半の柱穴	剥片	4.4	2.4	0.7	5.4	黒曜石
17	下段南半の柱穴	剥片	2.3	2.4	1.0	5.1	黒曜石
18	下段南半の柱穴	剥片	2.0	1.2	0.5	1.1	黒曜石
19	下段南半の柱穴	剥片	2.1	1.2	0.5	1.1	黒曜石
20	下段南半の柱穴	剥片	1.7	1.1	0.4	0.6	黒曜石
21	5Tr 北半区表土	剥片	5.5	2.5	1.5	16.1	チャート
22	1Tr表土	石核	4.0	3.3	1.4	15.1	黒曜石
23	1号溝東半	石核	3.0	2.6	2.2	14.4	黒曜石
24	1Tr南表土	石核	3.5	3.8	2.8	25.8	黒曜石
25	4Tr	石核	3.5	3.0	1.5	9.6	黒曜石
26	7号土坑	石核	2.2	5.2	1.2	15.0	黒曜石
27	7号土坑	石核	2.8	3.0	2.2	16.2	黒曜石
28	2号溝	石核	3.3	2.8	1.4	9.2	黒曜石
29	2号溝	石核	2.5	2.1	1.7	7.7	黒曜石

石製品等（図版 20、第 23～25 図）

前にも触れたが、調査区内各所で黒曜石を主体とした石製品・剥片が出土している。表土掘削を手掘りで行ったということにもよろうがその点数はかなりのものである。それらの中から選別したものを報告する。

1 は 2 号溝状遺構出土の太型蛤刃石斧の刃部で、全体に（暗）灰色となり黒色系粒を多く含む。刃毀れは少なく、表面は非常によく磨かれている。3・4 は火打石。3 は太田井産チャート製。よく潰れていて鉄錆の付着がある。4 は玉髓製で、これも稜がよく潰れている。5・6 は姫島産黒曜石を用いたスクレイパー。5 は周縁部に加工を加えて刃部を形成する。6 は背面に自然面を残す縦長剥片を素材とし、右側縁部に加工を施して刃部を形成する。7～22 は剥片で、7～21 は姫島産黒曜石製。7・8・10・12～14・17・19・20 は縦長剥片を素材とし、9・16 は横長剥片を素材とする。9・16 は側縁に、10・11 は下端部に微細剥離を施す。19～21 はくさび状に剥離された剥片、22 は旧石器の可能性のある二次加工剥片で、これはチャート製。23～30 はいずれも姫島産黒曜石を用いた石核。23 は打面は剥離面であるが、背面は全面礫面である。27 は右側縁に微細剥離を有している。また、図示していないが石核の素材と考えられる礫も出土している。

埋 甕（図版 17、第 26 図 3）

調査区北東隅付近、町道に近い部分で埋め甕を検出した（第 6 図参照）。下半部のみの検出であり、出土状態は図化していない。

底部付近はほぼ完存するが、同一個体と思われる口縁部は小片があるのみである。形状は同図 2 に似ているが、これは内側へ屈曲させてそこに深い沈線を 2 条刻む。沈線間もその上下よりも沈

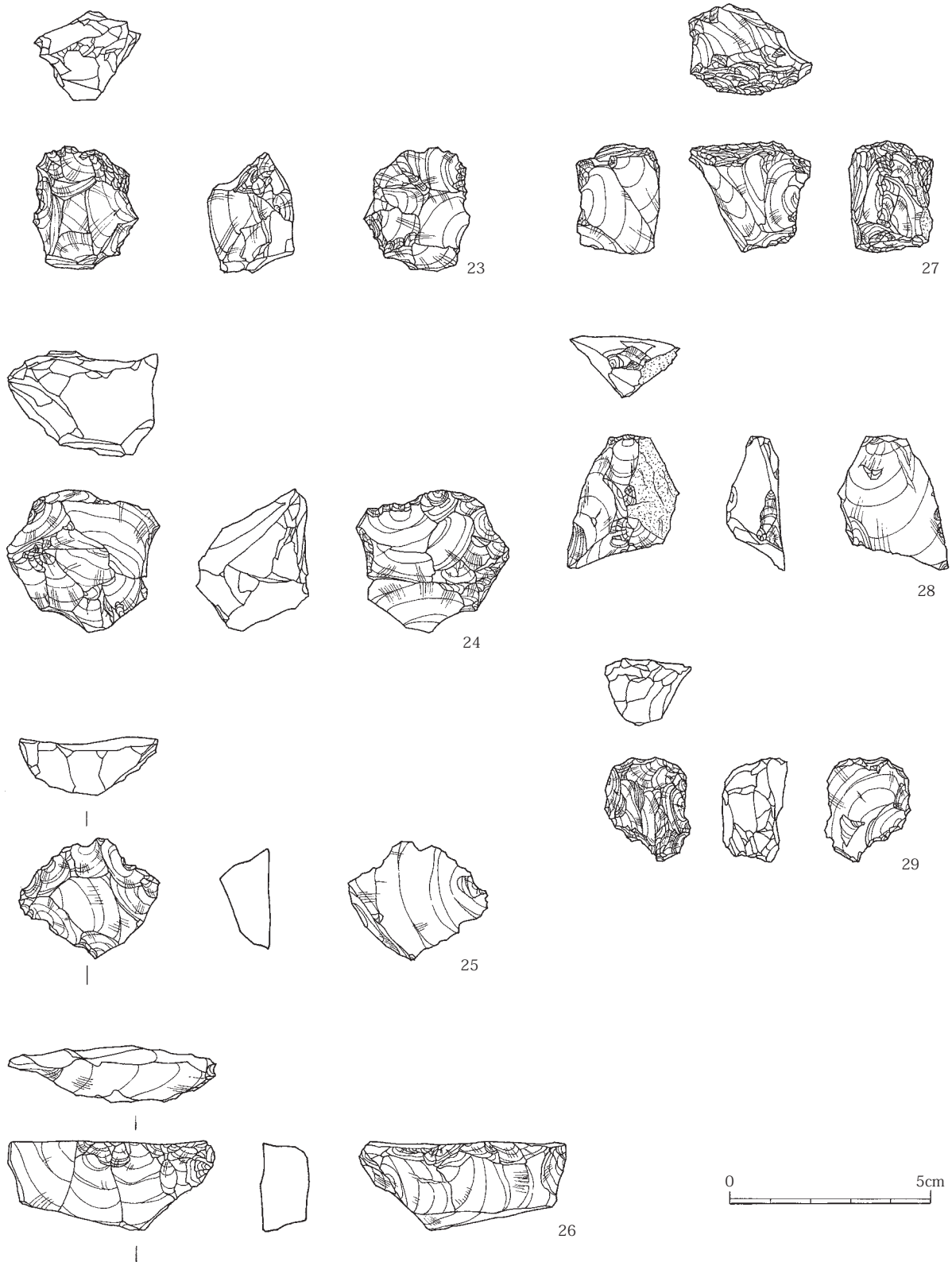


第 23 図 出土石製品実測図 1 (2/3)

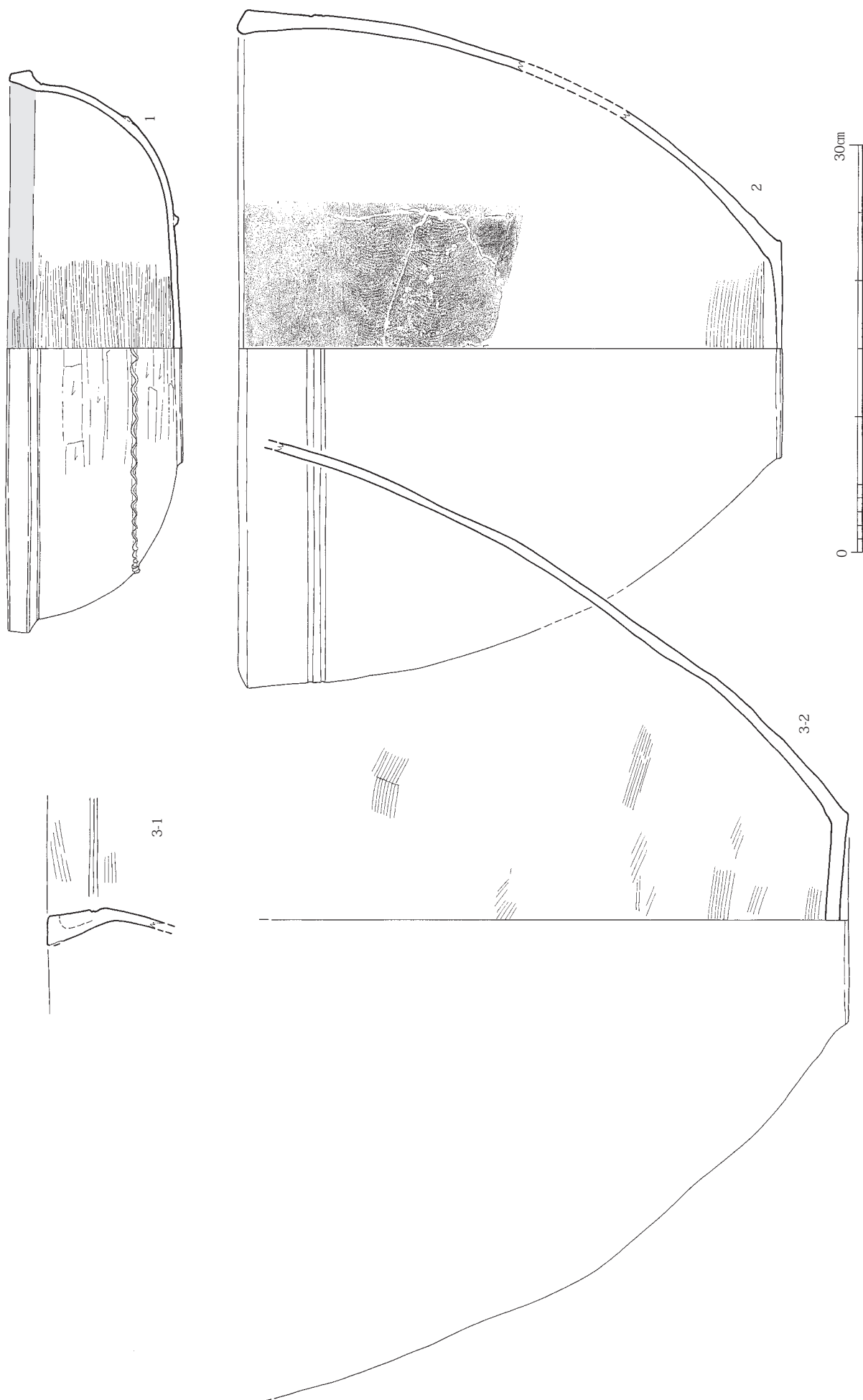


第24図 出土石製品実測図2 (2/3)

んでいるので、2条というよりは半截竹管を用いたものかも知れない。その周辺では粗い刷毛目が見える。胎土粗く、器肉が層状になっている。また、器表が黄白色～灰白色となるが、化粧土を用いているようである。



第 25 図 出土石製品実測図 3 (2/3)



第 26 図 出土土器実測図 3 (1/3)

近世の土器（図版 20、第 26 図）

1 は 5 トレンチ南東部の表土から出土した土師質の大鉢で、完形に復原できるほどの部位がある。口径 41cm、器高 13cm ほどの大きさである。口縁部は断面三角形に造作し、小さく開く。外面頸部下にはシャープな沈線を巡らせている。また、体部中位からやや下位に突帯を 1 条付して、上面を指で押さえて加飾する。底部には形状が整った高台を付すが、器形に比して非常に低い。体部外面はほとんどが丁寧な篋削りで仕上げるようである。内面は全面を篋磨きで仕上げていて、調整はとても丁寧である。なお、口端部から口縁部内面の屈曲部までが赤色塗彩されている。宇佐市高村焼^註である。

2 も 5 トレンチ南東部付近から出土した土師質の鉢あるいは甕で、図上復原した。復原図では口径 50cm、器高 40cm ほどとなる。口縁部は肥厚するものの、体部から連続して終わり、あまり変化を加えていない。口端部界に 2 条の甘い凹線を加えているが、特に下位のそれは浅くなっている。全体に赤みを帯びる黄褐色となり、胎土は粗い。外面は荒れた部位が多く、調整痕はよく分らないが丁寧に撫でているようである。内面では口縁部下位に浅い同心円文が見えるほか、体部下端付近では横方向の刷毛目が見える。

註 福岡県教育委員会「上唐原稲本屋敷遺跡」（『一級河川山国川築堤関係埋蔵文化財調査報告』1, 1997）で、小池史哲氏によってまとめられている。

9) 小 結

以上が緒方古墳群の調査結果である。以下で簡単にまとめてみたい。

今回の調査で得られた中で、もっとも時期が遡る遺物は 2 号溝状遺構出土の弥生中期前半の土器、そして大型蛤刃石斧であろう。姫島産黒曜石の一定量の出土は、後述する七ツ枝・龍毛遺跡では縄文後晩期に主体が求められているが、他の土器類が皆無の状態なので推測の域を出ない。

緒方 2 号墳は大破した古墳で、土器と無数の川原石以外に「古墳」の痕跡は確認できず、3 号墳も周溝のみであった。ただ、町教委によって調査された 1 号墳は紛れもない古墳であり、その南に近接する民家内にも石室の残骸と思われる石材が見られるなど、この佐井川右岸は広く後期古墳が営まれたようである。一方、佐井川左岸（豊前市域）では全く古墳が知られていない。

曾木家墓地では 8 基の墓などを調査した。長方形墓から「明治二歳」墨書の急須が出土していて、唯一の寝棺という形状から見てもこれが成人墓としてはもっとも後出するものであろう。その場合、方(円)形墓はいずれも江戸時代に遡るものと思われる。8 号墓の被葬者としては墓誌にある「岸井彦蔵富蔵実父 明治四年六月十二日 五十四才」が相応しいが、そうした場合には、先行する成人墓としては彦蔵の両親曾木墨莊夫妻がまず想定される。そこで問題となるのは「釈天随」と刻まれた豊前市大村の矢野家墓地の墓碑である。この地に大きく立派な墓石が数基あったという初山氏の証言を重視すれば、矢野家墓地にある曾木墨莊の墓石や系図と矛盾する。これについては、新たな資料の発見など今後の展開に期待したい。

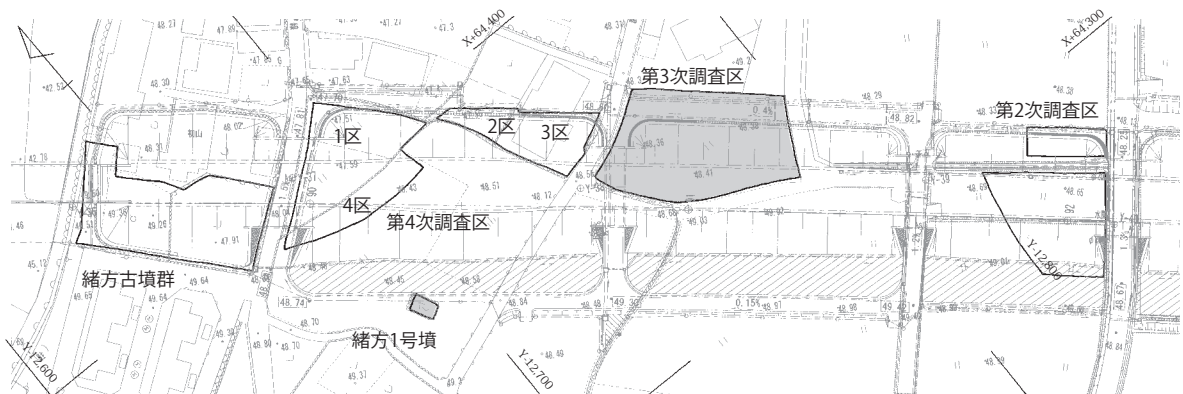
2. 七ツ枝遺跡

1) 概 要

平成 20 年 10 月、福岡県文化財保護課は、東九州自動車道建設に係る埋蔵文化財発掘調査の方法や体制について上毛町教育委員会に対して協議を行った。内容は平成 20 年 12 月に開会される町議会へ発掘調査事業予算を上程し、予算可決後速やかに県と委託契約を締結して発掘調査の実施を依頼したいということであった。しかし、町としては調査期間が年明け 1 月からの 3 ヶ月間であることに加え、当該期間が天候不順な時期であることから、あえて予算化したとしても十分な調査が期待できないということで予算化を見送った。その後、調査費用を予算化せず、調査担当職員 1 名を県文化財保護課の発掘調査事業に加えるという方法で調査を実施できないかという提案を再度行った。町教委は予算化せずに調査に対応できることから県の提案を受け入れ、平成 20 年 12 月 26 日付けで協定を締結し、平成 21 年 1 月 15 日から重機による表土剥ぎ・遺構検出を行い、同月 27 日から発掘作業員を投入して発掘作業に着手した。調査対象地は上毛町大字緒方 305 番地ほかで、調査面積は約 900m²である（第 2 次調査）。

21 年度からは西日本高速道路株式会社と関係市町が個別に契約を交わすことになったため、町教委はこの第 2 次調査区から順次西へ向かって調査を進めていった。21 年 12 月、緒方古墳群の調査に県文化財保護課が着手した。当時、町教委は隣接する緒方 1 号墳等の調査を実施していたが、両担当者の調整により、緒方 1 号墳のすぐ北側の調査を県が担当することとし、22 年 3 月には、一部の表土掘削を開始した（第 4 次調査）。本格的な第 4 次調査は同年 4 月 12 日から開始した。前年度末に地山まで掘削していた部分で壁面の土層の観察を行ったところ、水田と思われる複数の層を認めたことから、水田の確認を主とする調査を行った。また、調査を進める中で、試掘調査で調査対象地から除外していた部分まで遺跡が広がることが予想されたことから、西日本高速道路株式会社と協議の上、再度確認調査を実施して調査対象地を拡大した（4 区）。すべての調査が終了したのは 8 月 11 日である。この第 4 次調査は大字緒方 419-3 番地ほかを対象とし、調査面積は約 1,500m²であった。

なお、佐井川右岸の一部を緒方古墳群として報告したが、七ツ枝遺跡として報告する範囲は、200m を超える幅を持つ。東端は圃場整備事業が施工されて 1.5m の段差をもって落ち、その東に龍毛遺跡が展開する。今回の報告はその東西両端の調査区で、中央付近は上毛町教育委員会によって調査がなされたことを付記しておく。

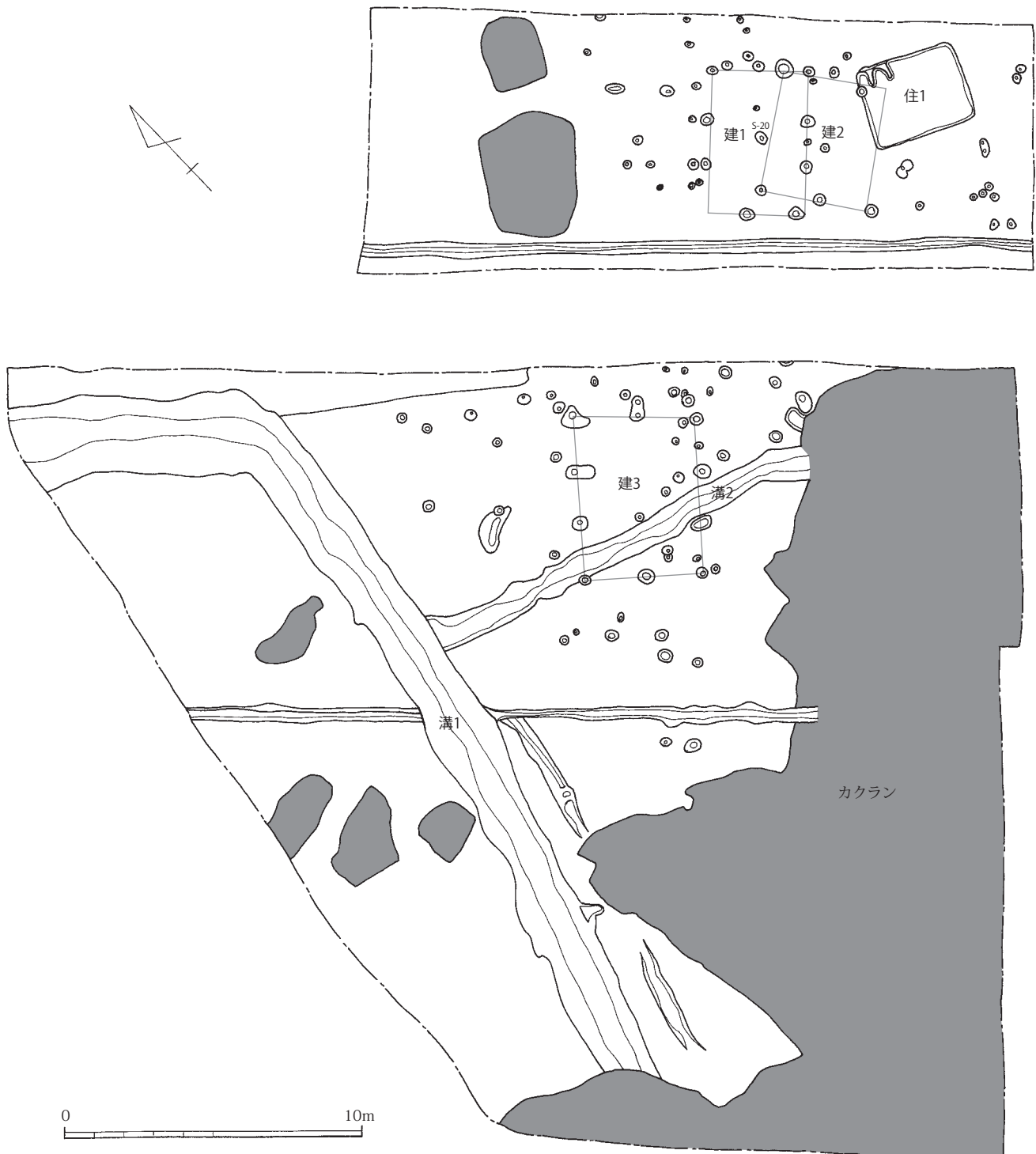


第 27 図 七ツ枝遺跡地区割図（1/2,000）

2) 第2次調査

竪穴住居跡（図版 22、第 29・30 図）

遺跡の東隅で 1 基の竪穴住居跡を検出した。3.4 m × 2.7 m の方形プランを有し、壁高は床面から約 0.3 m が残存する。床面の硬化がみられたが貼床は無く、床面から主柱穴は検出されなかった。

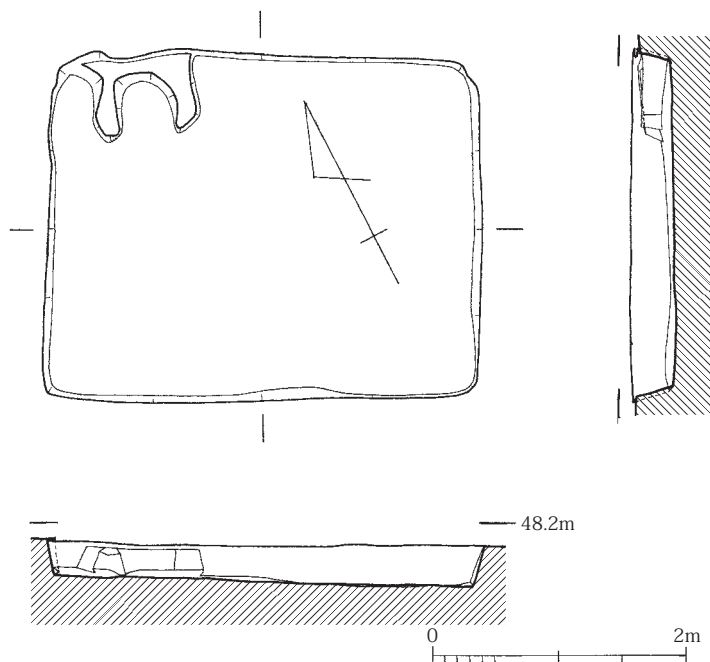


第 28 図 第 2 次調査区遺構配置図（1/200）

カマド 北壁の西端に両袖の作り付けのカマドが残存する。住居西壁とカマド西袖の間から杯が1点出土した。火床には灰が最厚部で6cm堆積し、火床及び袖部内側は被熱により赤橙色に変色、硬化していた。なお、支脚及びその痕跡は検出されなかった。

出土遺物（図版 23、第 37 図）

1 は甕で長胴気味の体部に口縁部は緩やかな「く」字状を呈する。内外面を横撫で調整を行う。胎土には石英・長石・角閃石等を含み、色調は赤褐色を呈する。復元口径 21.3cm。2・3 は杯である。2 は体部が直線的に開くもので復元口径 15.2cm。底部は篋切り後に撫で調整。胎土に石英・長石などを含み、灰色を呈する。3 はカマド西袖外側から出土したものである。小型のもので体部は直線的に立ち上がり、口縁部は内傾する。口径は 11.4cm。高台はやや内側に付き外へ張り出す。胎土には長石・角閃石と 1mm 程の砂粒を含み、色調は黄灰色を呈する。



第 29 図 1 号竪穴住居跡実測図（1/60）

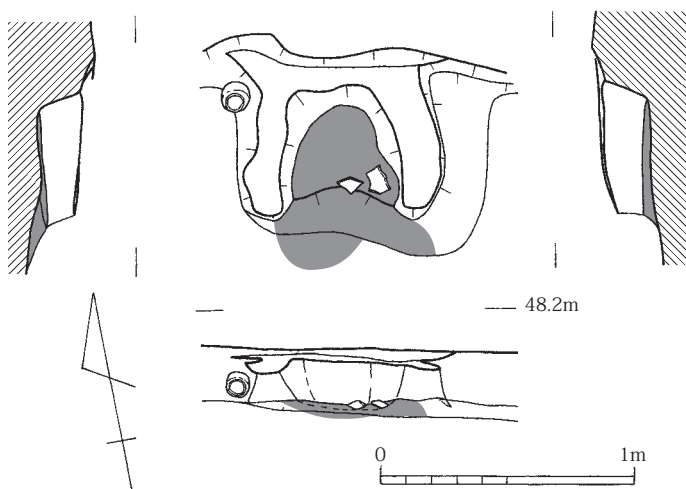
掘立柱建物跡

1 号掘立柱建物跡

（図版 22、第 31 図）

遺跡の北東に位置する。2 号掘立柱建物跡と切り合うが、先後関係は確認できていない。規模は 2 × 3 間で、梁行 3.2 m × 桁行 4.7 m を測る。主軸は磁北に対して N - 48° - E で、3 号掘立柱建物跡と主軸をほぼ同じくする。

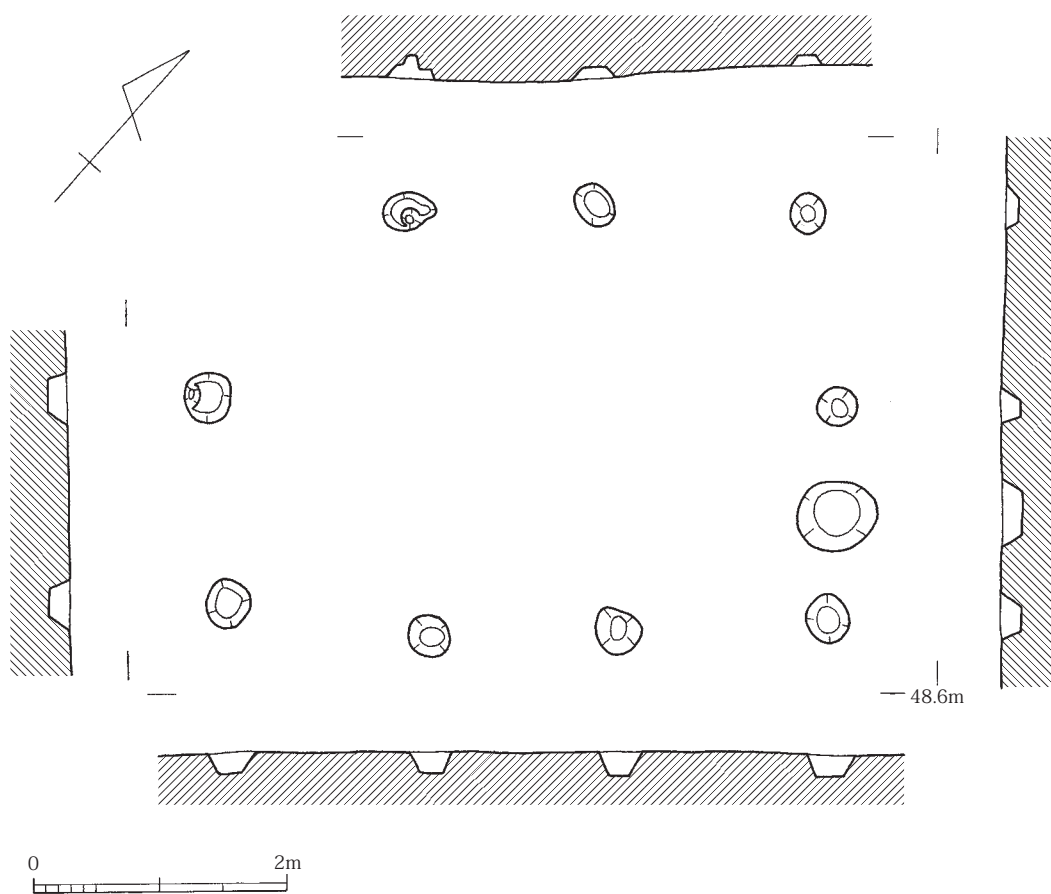
柱穴から遺物の出土はない。



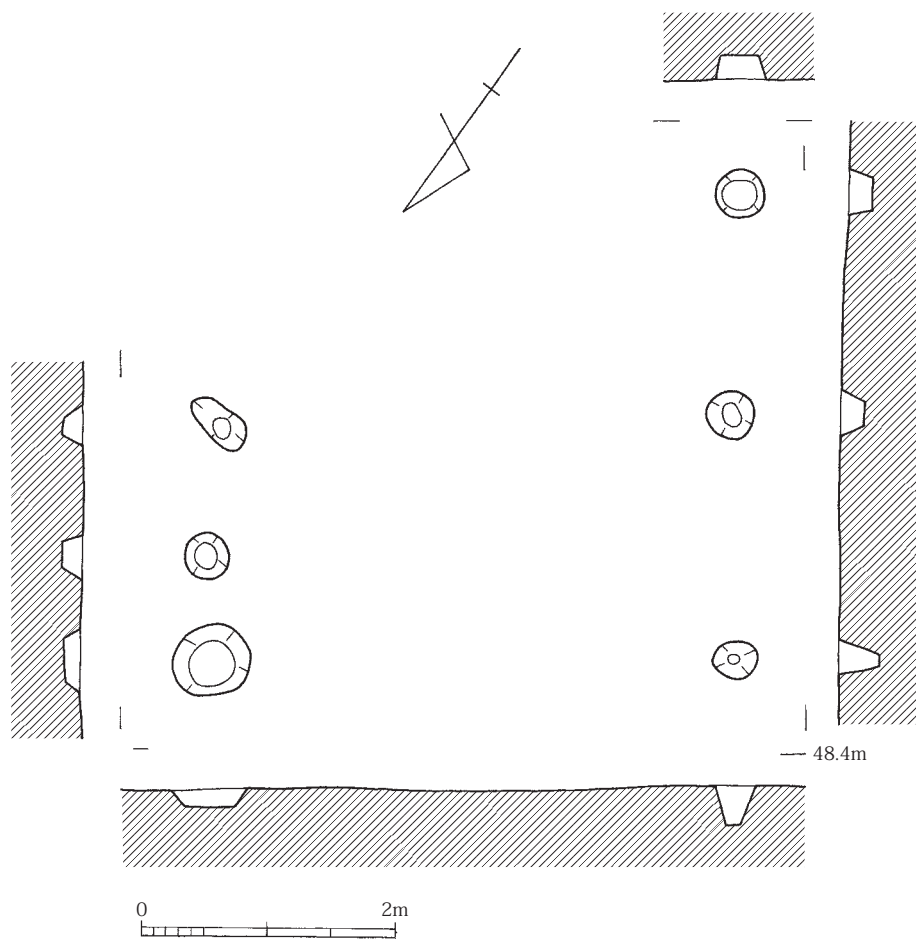
第 30 図 1 号竪穴住居跡カマド実測図（1/30）

2 号掘立柱建物跡（図版 22、第 32 図）

遺跡の北東に位置し、1 号掘立柱建物跡と重複する。また、建物の北東隅は 1 号竪穴住居跡に切られる。規模は 2 × 1 間で、梁行 3.8 m × 桁行 4.2 m を測る。主軸は磁北に対して N - 55° - E



第31図 1号掘立柱建物跡実測図 (1/60)



第32図 2号掘立柱建物跡実測図 (1/60)

である。

柱穴から遺物の出土はない。

3号掘立柱建物跡（図版 23、第 33 図）

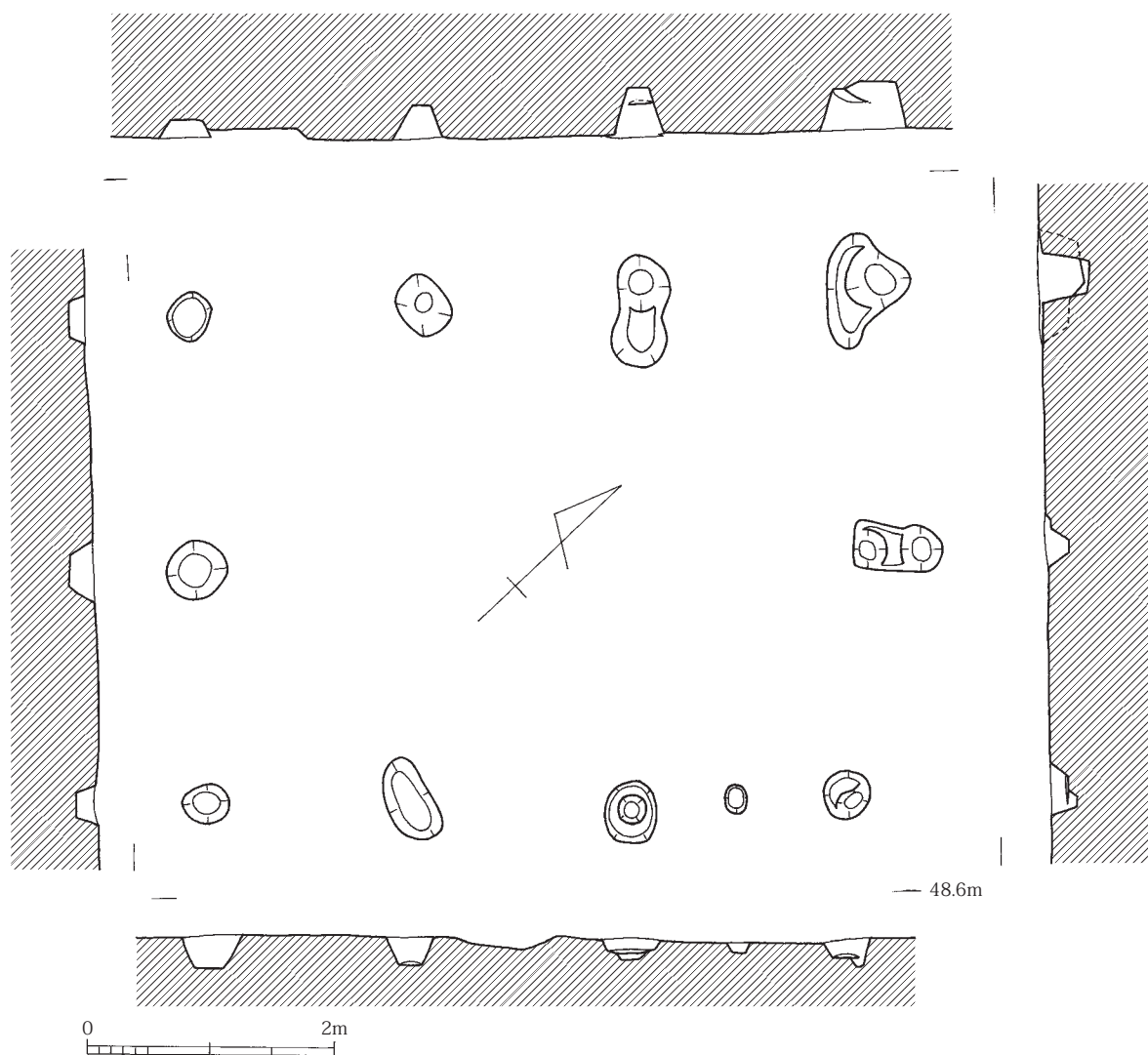
遺跡の中央に位置する。遺跡中央を東西に延びる 2 号溝状遺構を切って、建てられている。規模は 2 × 3 間で、梁行 4.0 m × 桁行 5.6 m を測る。主軸は磁北に対して $N - 42^\circ - E$ で、1 号掘立柱建物跡と主軸をほぼ同じくする。

柱穴から遺物の出土はない。

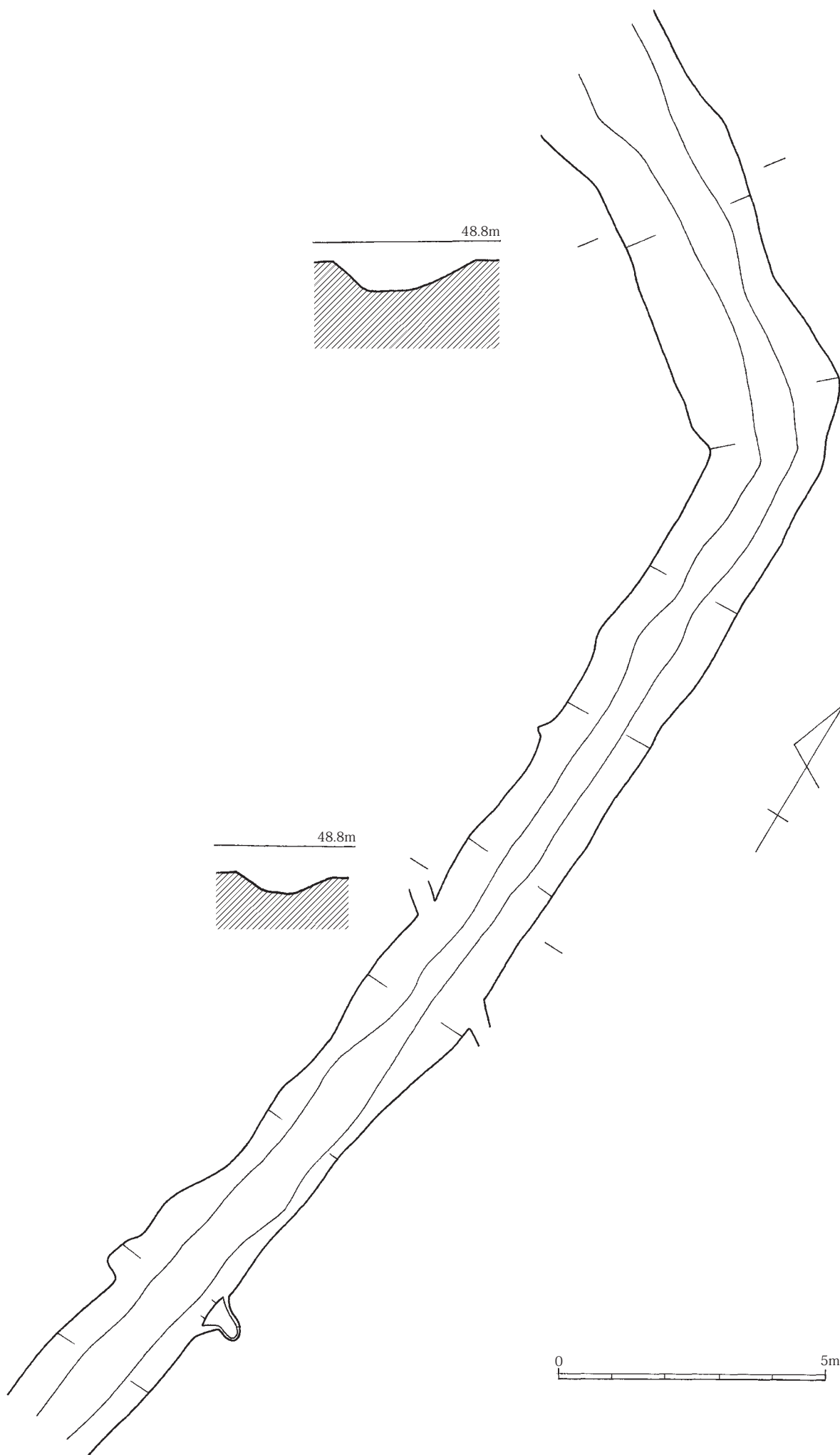
溝状遺構

1 号溝状遺構（図版 23、第 34 図）

遺跡の西に位置する。南北方向へ直線的に延びるが、北端では西へ屈曲する。東西方向へ延びる



第 33 図 3 号掘立柱建物跡実測図（1/60）



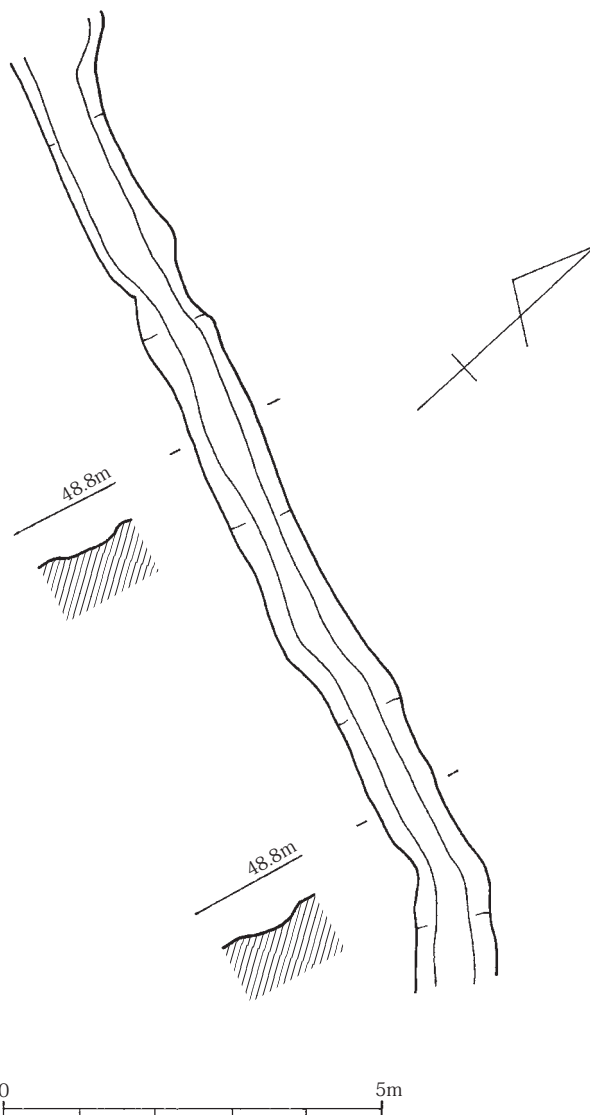
第34図 1号溝状遺構跡実測図 (1/1000)

2号溝状遺構と接するが、同時併存したものなのか、先後関係については確認できていない。検出した長さは約30m、南端は後世に行われた圃場整備事業の工事実施により失われ、西端は調査区外へとさらに延びる。

規模は幅2.0m前後であるが、北端の曲部以西は2.7m前後に拡幅する。検出面からの深さは南北部分が0.3～0.4m、北端の曲部以西は0.4～0.5mを測り、断面形状はともに逆台形状をなす。底部の標高は47.95m前後を測り、傾きに傾斜はなく平坦である。

出土遺物（図版28、第37図）

埋土から土錘が1点出土した。管状土錘で中程が膨らむタイプである。全面撫で調整。胎土には細砂粒を含み、色調は淡橙色を呈する。長さ4.6cm、最大径1.1cm、孔径0.4cmを測る。



第35図 2号溝状遺構実測図（1/100）

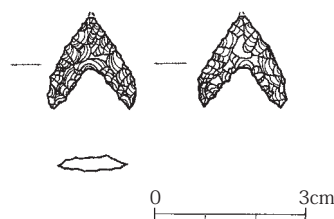
2号溝状遺構

（図版21、第35図）

遺跡の中央に位置し、3号掘立柱建物跡に切られる。西は1号溝状遺構に接し、東へと延びる。検出した長さは約13.6mを測る。東端は後世に行われた圃場整備事業の工事実施により失われている。

規模は幅0.9m前後、検出面からの深さは6～9cmを測り、断面形状は逆台形状をなす溝である。底部の標高は西端が48.3m、東端が48.2mを測り、緩やかに東へ下降する。

埋土から遺物が僅かに出土したが、図示できるものはない。

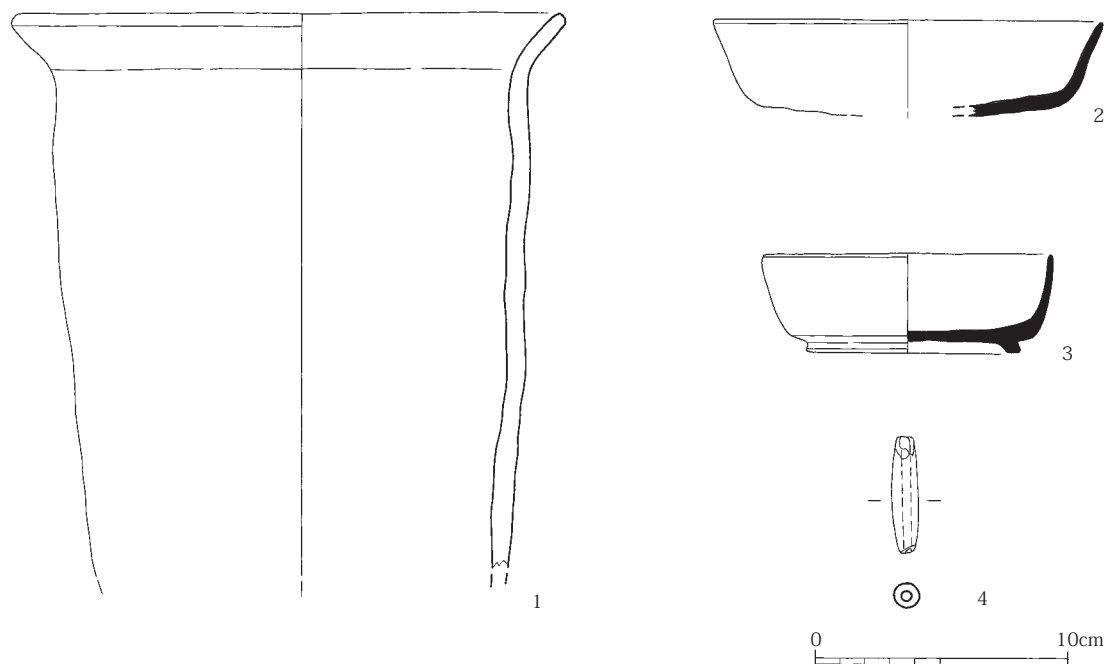


第36図 第2次調査区出土石製品実測図（2/3）

その他の出土遺物

石製品（図版28、第36図）

打製石鏃 ピット（S-20）から出土した。三角形鏃で先端部と基部の一部を欠失する。基部には深い挟りがある。残存長1.8cm、幅1.7cm、厚さ0.3cmを測る。姫島産黒曜石製。



第37図 第2次調査区出土遺物実測図（1/3）

3) 第4次調査

当初の調査対象地は大きく3筆に分かれていたので、1～3区と呼称して調査を行っていたが、先述したように1区の南を拡張して4区とした。したがって、1・4区は本来一連の調査区であるのだが、両者の間には石垣や素掘りの水路があるために、連続して調査を行えなかった。以下では、1～4区の順に説明を加える。

なお、調査担当者は原稿を残して平成23年にすでに退職している。改めて原稿を読んでいると、理解できない部分や疑義を抱く部分がある。ただ、担当者の見解を尊重せざるを得ないので、「畦畔」はそのままの表現で使用するが、原稿中に「畦畔」の詳細な説明は見られず、何をもって「畦畔」と判断したか判然としない。また、原稿では「畦畔」の位置的な説明に大部分を費やしているが、編集者は不要だと判断して多くを割愛している。

1区の調査（図版24、25、第38図）

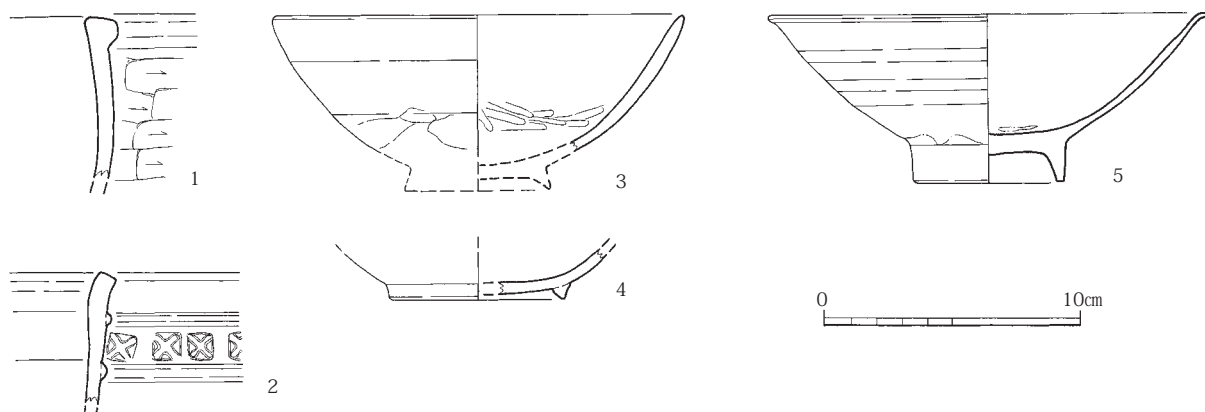
1区の西辺は前年度に一部の表土掘削を行っていたところであるが、新たに表土掘削を行う部分については近世（第1水田面）と思われる水田面までを重機で掘削し、それ以下の調査を行った。

第2水田面

複数の溝と「畦畔」を検出した。水田面は鉄分がやや多く、焼土を若干含んでいる。また締まりよく、粘性がある青灰色土である。対応する床土はマンガンや青灰色土ブロックを多く含み、中型礫を若干噛んでいて、これも非常に締まっている。



第38図 第4次調査区1・4区遺構配置図 (1/200)



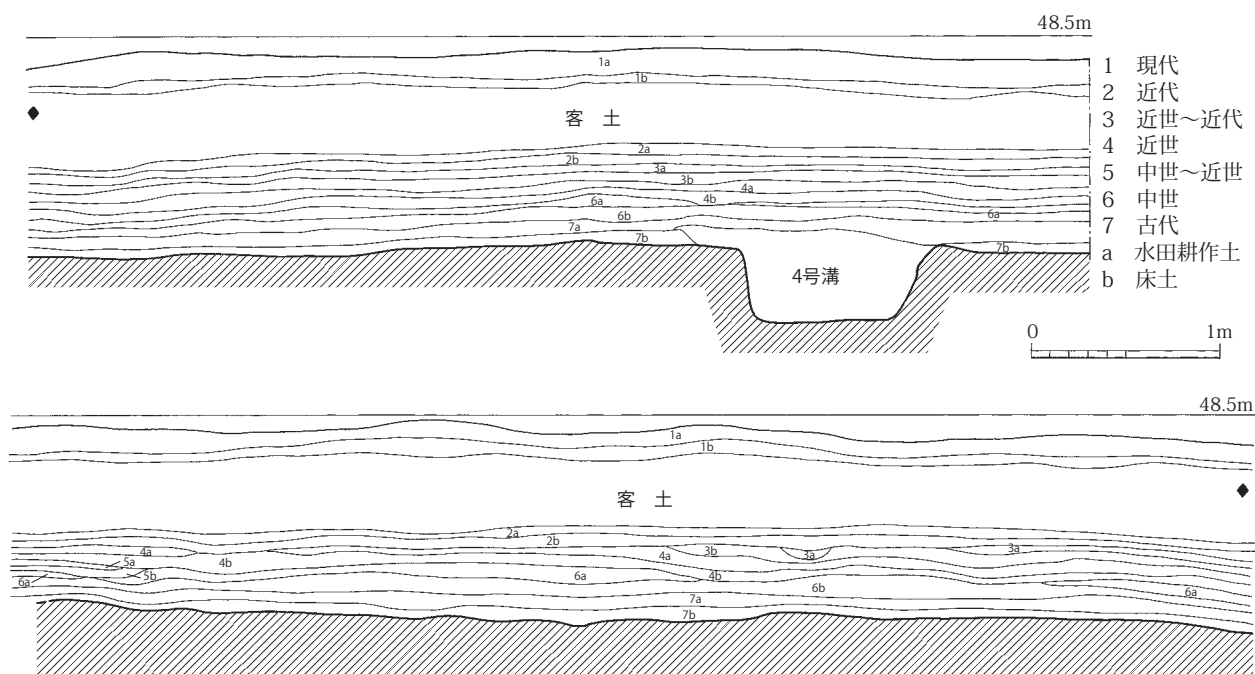
第39図 第2水田面出土遺物実測図(1/3)

「畦畔」の土質や色調について原稿に記述されていないが、幅 0.3 ～ 2.1 m と定まりなく、高さは 2 ～ 6cm に過ぎない。

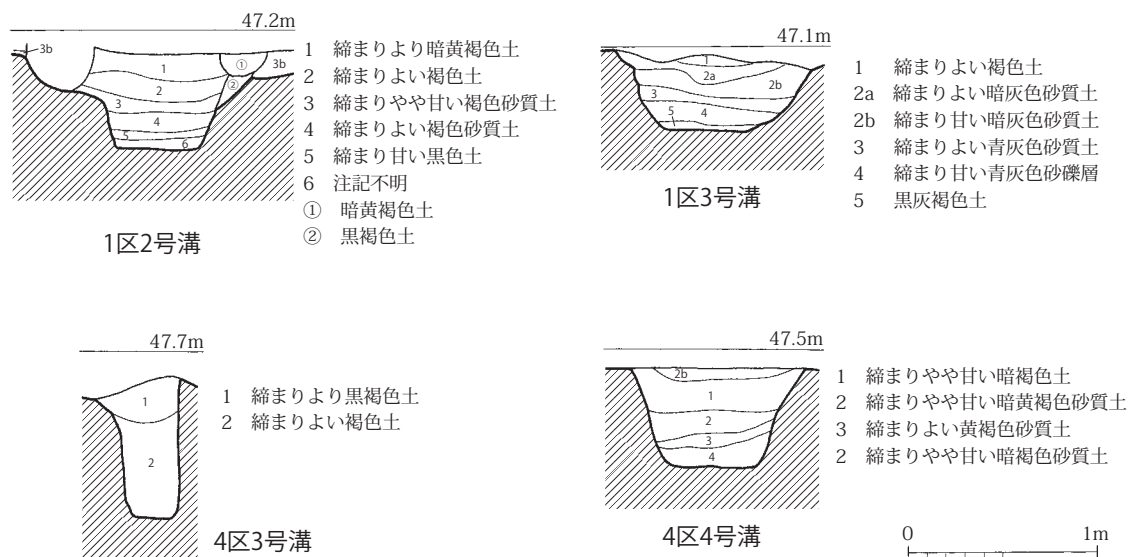
また、溝状遺構は、1号溝が幅 1.25 m、深さ 0.06 m に過ぎないもので、2・3号溝はそれぞれ幅 0.35・1.5 m、深さ 0.16・0.55 m の規模である。

出土遺物(第39図) 1・2は瓦質土器の火鉢である。1は口縁部片で、外面は篋削りで整形されている。2は口縁部片で、2条の貼り付け突帯の間に「X」字のスタンプ文が巡る。3・4は瓦器碗である。3は口縁から胴部にかけて 1/4 程度が残存。4は底部片。5は白磁碗で、口縁から底部にかけて 1/2 ほどが残存する。底部内面の一部と高台部分に釉がかかっておらず、底部外面には回転篋切り痕が認められる。なお、3～5は第3号溝状遺構からの出土である。

第3水田面



第40図 4区南壁土層実測図(1/40)



第41図 溝状遺構土層実測図 (1/40)

第2水田面の下位にあり、ここでも溝と数条の「畦畔」の変色域を認めた。

水田面はマンガンを多く、中礫を若干含み、締まりよく粘性があまりない暗褐色土である。床土は床土はマンガンを若干、中礫を多く含み、締まりよく粘性がほとんどない褐色土となる。

2号溝状遺構は最大幅 1.2 m、同深さ 0.5 m ほどの規模で、調査区内両端で 0.4 m の高低差がある。

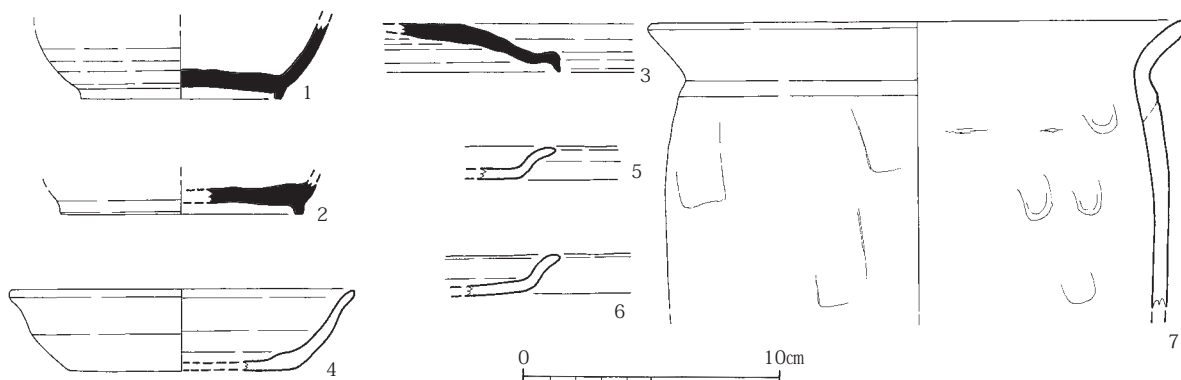
出土遺物 (第 42 図) 1～3 は須恵器。1 は体部下半から底部にかけて 1/2 ほどが残っており、底部外面に回転篋切り痕が認められる。2 は底部と高台のみ 3 割程度が残っており、外面に篋切り痕が認められる。3 は小片。4～7 は土師器。4 は口縁から底部にかけて 4 割程度が残存し、底部外面には回転篋切り痕が認められる。5 は小片。6 は口縁から底部にかけて 1/8 程度が残り、底部外面には回転篋切り痕が見られる。7 は甕で、口縁部から体部にかけての 1/3 程度が残存する。体部外面には板工具痕が、口縁屈曲部のやや下の内面に粘土接合痕が認められる。すべて 2 号溝で出土。

第3水田下面の遺構

第3水田面に伴う床土を除去した後に柱穴を検出したが、建物跡を構成するものは認められず、確実に伴う出土遺物もなかったので、時期は不明である。

2 区の調査 (図版 26、第 43 図)

本調査区は現況で畑として利用されており、耕作土を除去するとすぐに地山面が露出し、そこ



第42図 第3水田面出土遺物実測図 (1/3)

に削平を受けた近世の水田面と溝状遺構、それを破壊する形で3基の土坑が検出された。

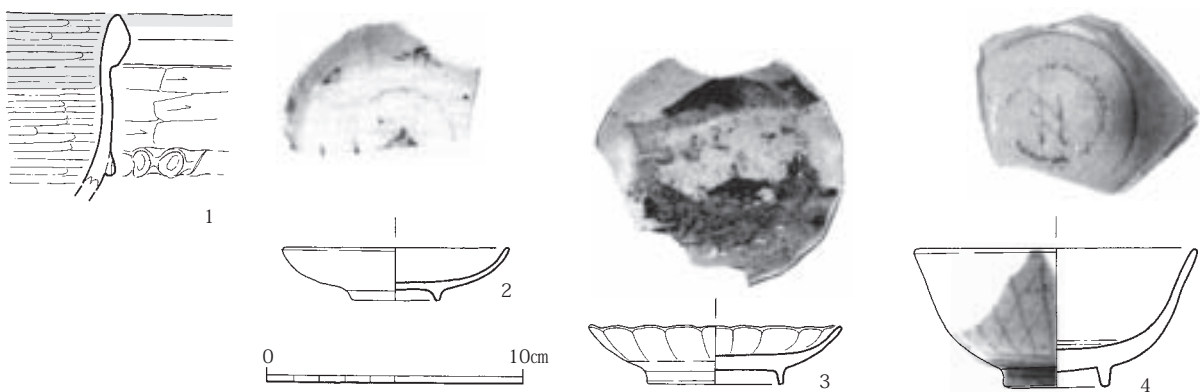
1号溝状遺構 調査区内で約14.6mを検出、最大幅約0.8m、最大深約0.12mの規模であった。

3号土坑 調査区南東端近くに位置し、内部には大量の拳大の礫と磁器類が入っていた。一辺約2.3mの正方形に近い形状を呈し、深さ約0.25mを測る。

出土遺物(第44図) いずれも3号土坑からの出土。1は土師器鉢で、底部を欠く。玉縁口縁をもち、体部中位に1条の刻目突帯文が巡る。口縁部内面のやや下位から外面の一部まで赤色顔料が施される。2～4は磁器である。2は白磁の皿で、半ばほどが残り染付けが施されている。3は白磁の椀で、底部付近のみが残る。内・外面に染付けで斜め格子文や円弧文が施されている。底部内面は円弧状に、底部外面は丸く釉がない箇所が認められる。4は白磁の菊花形皿で、口縁部の半ばほどを欠く。内面には染付けで、山・鳥・木・小屋などが描かれている。



第43図 2・3区遺構配置図(1/200)



第44図 2・3区出土遺物実測図(1/3)

3区の調査(第43図)

宅地として利用されていた土地で、ここも0.2mほど剥ぐと地山が現れた。柱穴が散見されたが、建物跡を構成するものはなく、柱穴から時期を示すような出土遺物もなかった。

4区の調査(図版27、第38図)

ここでは1区第3水田面の広がりを確認する調査を行った。

1区2号溝状遺構の延長部(4号溝)、それと斜交するように掘削された3号溝状遺構そして1区でも見られた畦畔状の変色域が認められた。

3号溝状遺構は幅0.3mほどであるが、深さは0.7～1mほどの深いものである。西端は徐々に浅くなるのではなく、急に落ち込んでいて、通常の溝状遺構とは異なる。

その他の出土遺物(図版28、第45図)

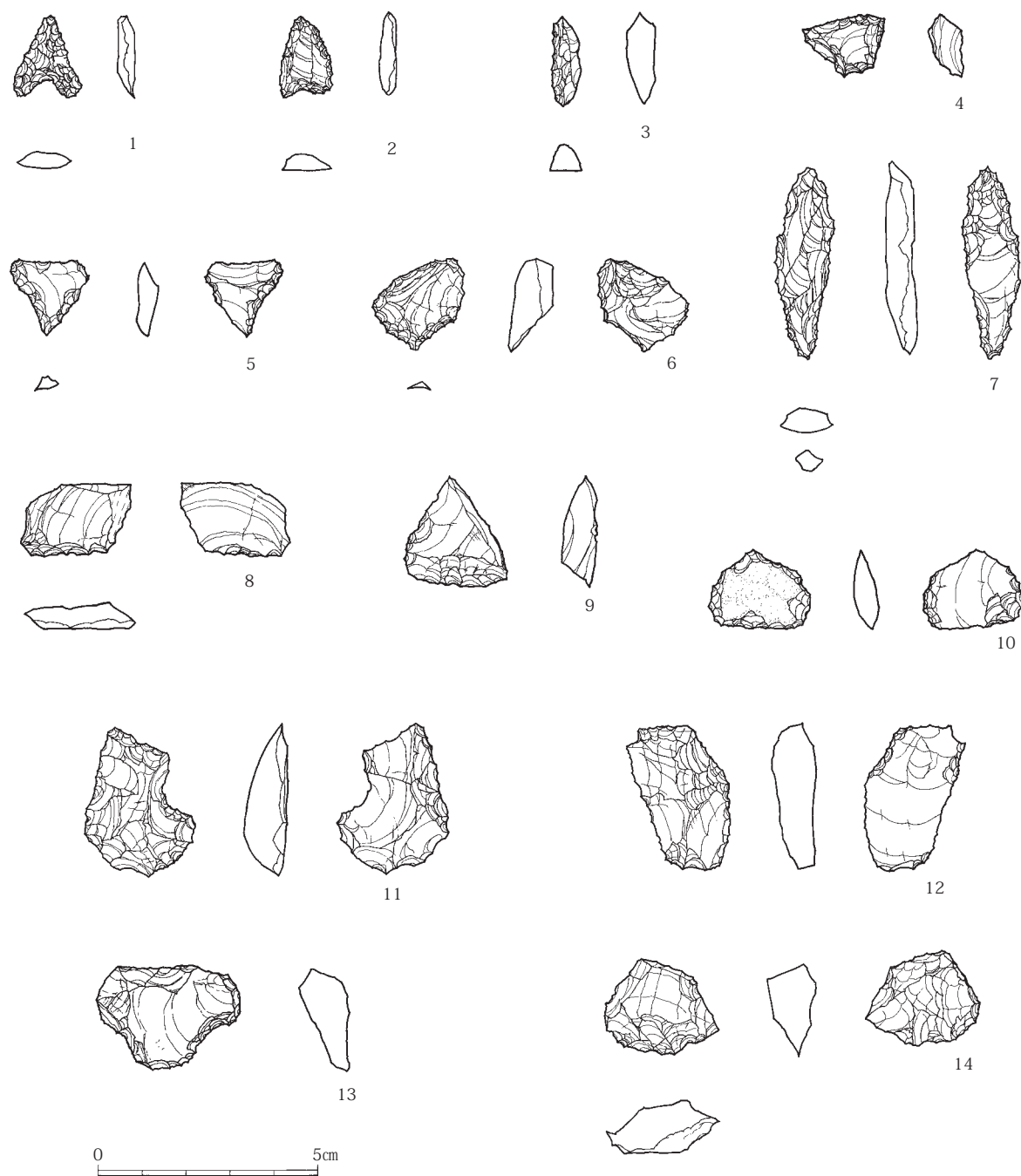
今回の調査では111点を数える石製品等が出土したが、その殆どが1・4区の水田の耕作土・床土や溝状遺構から出土している。

1・2は石鏃である。1は姫島産黒曜石製で、表・裏面の中央まで押圧剥離が及んでいるが、表面は中央部がやや盛り上がり、裏面は平坦に近い形状を呈する。また、基部にはやや浅い抉りが認められる。使用により先端と左脚部を若干欠損している。2は腰岳系黒曜石製で、連続的に剥離された小型の縦長剥片を素材とし、表・裏面の周縁部に平坦な加工を施して、素材の打面部に先端を、末端に浅い抉りを形成しているが、余り形態は上手ではない。西北九州で後・晩期によく見られる剥片鏃に類するものだと考えられる。

3～7は石錐で、7以外は姫島産黒曜石を用いる。3は碎片状の分厚い幅広剥片を素材とし、主に左側縁に裏面から微細な二次加工を施して先端部を形成している。上端はガジリにより、先端部は使用により若干欠損している。4は幅広剥片を横位に用い、末端に左右から細かい二次加工を施して先端部を形成している。先端部は使用のため若干欠損している。5も幅広剥片を素材とする。左側縁には裏面から、右側縁には表・裏面から二次加工を施して先端部を形成している。左側縁上端付近には手擦れ状の痕跡が見られ、先端部は使用により若干欠損している。6は裏面を作業面とする薄平化した石核を素材とし、裏面から左・右側縁下半に二次加工を施して先端部を形成し

ている。裏面左側縁に使用痕が顕著に認められ、尖端を若干欠損している。また、裏面右側縁上半に手擦れ状の痕跡が観察される。7は腰岳系黒曜石製で、やや分厚い縦長剥片を素材とする。周縁に刃潰しに近い二次加工を施し、末端左側縁に節理面が形成されたが、何とか尖端部を形成したようである。尖端部は使用により若干欠損している。また、上端部に近い部位にもバルブを主体に加工が多く施されている。尖端部は錐として利用された後に、欠損した可能性が高い。

8・9は姫島産黒曜石製の削器である。8は背面に若干節理面が認められる幅広剥片を素材とし、素材打面部に裏面から二次加工を施して刃部を形成している。刃部に使用痕が顕著に観察される。9は右側縁が大きく欠損した幅広剥片を素材とし、腹面の端部に二次加工を施して刃部を形成している。刃部に若干の使用痕が認められる。



第45図 第4次調査区出土石製品等実測図(2/3)

10～13は搔器で、13を除いて姫島産黒曜石。10は背面全面に自然面が残る幅広剥片を素材とし、主に裏面からほぼ全周に急斜度の二次加工を施している。上端はやや尖頭状となっており、錐としても併用された可能性が高い。11は削器も兼ねる。裏面を作業面とする残核を素材とし、左側縁には裏面から浅い二次加工を施して削器の刃部を、末端には裏面から急斜度の加工を施して搔器の刃部を形成している。両刃部ともに使用痕が観察される。右側縁の挟入状の剥離は石核時のものか二次加工か判然としないが、そこに微細な加工が認められ、挟入削器として用いられた可能性も高い。12は分厚い縦長剥片を素材とし、素材の末端に急斜度の二次加工を施して刃部を形成する。刃部には使用痕が顕著に観察され、また上端には装着痕ないしは手擦れ状の痕跡が残る。13は腰岳系黒曜石製で、表面を主要剥離面とするやや分厚い剥片を素材とし、下端に急斜度の二次加工を施して刃部を形成している。刃部からその裏面に使用痕が顕著に認められる。

14はチャート製の石核削器。裏面を作業面として剥片剥離を行なった後、表面の末端に急斜度の二次加工を施し、搔器状に仕上げている。刃部表裏面に使用痕が観察される。

4) 小 結

七ツ枝遺跡について

第2次調査では、8世紀後半頃（小田氏編年Ⅶ期）に位置付けられる1基の竪穴住居跡と時期不明の3軒の掘立柱建物跡、2条の溝を確認した。

第4次調査区では顕著な遺構はないが、水田面と思われる堆積層と溝状遺構の調査を行った。ただ、編者としては水田耕作土の上に、洪水層などの間層をおかずに床土・耕作土が重なるということが、にわかに信じがたく、不掲載の図も含めて残された土層図には多数検出されたという「畦畔」が明示されていないことも不安な点である。ここでは水田の可能性があるということで留め置き、将来の周辺部の調査での再確認を期待したい。ただ、石製品や古代・中世の土器類が出土していることから、周辺に該期の遺跡が存在するのは間違いないことである。

本遺跡周辺の現在の地形は、標高50mを測る佐井川右岸の最高所として、1kmほど東を蛇行して北流する黒川へ向かいなだらかに下降しているが、圃場整備施工前には小規模な低丘陵が存在していた。平成13（2001）年から15年にかけて実施された圃場整備事業によって、削平を受ける範囲に所在した数多くの遺跡が発見・調査されたが、諸般の理由からほとんどが未報告である。今回の東九州自動車道建設に伴う調査は当時削平されなかった、相対的に低い位置を対象に実施することとなった。未報告の遺跡の内容と総合することによって、この地域の歴史がかなり明らかになると思われる。今後の報告に期待したい。

4次調査区出土石器について

石製品等の時期 石鏃・石錐・打製石斧などが主体となることから、縄文時代～弥生時代が想定されるが、大陸系の磨製石器類が認められないことから縄文時代の可能性が高い。その中でも、緑色片岩製を主体とする扁平打製石斧が11点あることから縄文晩期に帰属する可能性が高い。また、龍毛遺跡第2次調査の報告で、縄文時代後・晩期に石錐が多く出土することを述べたが、本遺跡で15点の石錐が検出されたこと、そして、第45図2の腰岳系黒曜石製の縦長剥片を素材とし、周辺部のみへの二次加工によって仕上げた剥片鏃に類するものも縄文時代後・晩期に出現する型

石材 器種	姫島産 黒曜石	腰岳系 黒曜石	チャート	サヌカ イト	安山岩	鉄石英	石 英	緑泥 片岩	結晶 片岩	天草石	合計
石 鏃	7	3									10
石 錐	11	3		1							15
削 器	12	1									13
搔 器	4	1									5
石核削器			1								1
背付石器	3										3
扁平打製石斧					1			10			11
礫 器					1						1
砥 石										1	1
使用痕剥片	22	1				1					24
剥・碎片	9			1	2		2	3	1		18
石 核	9										9
合 計	77	9	1	2	4	1	2	13	1	1	111

表3 セツ枝遺跡 4 次調査出土石製品機種別・石材別組成表

式であり、これら大半が当該時期のものである可能性を強くしている。

ただし、安山岩製の礫器や天草石製の砥石については、製作時期が異なると考えられる。即ち、前者は少なくとも九州地方内では縄文時代早期に多く製作される器種であり、一方、後者の直方体に近い形状に製作される天草石製の砥石については、弥生時代以降にしか認められない現状においては、弥生時代以降の遺物の紛れ込みとするしかないだろう。

器種組成（表3） 石器の器種については、多産されているものは石鏃・石錐・削器・扁平打製石斧の4種ということになる。石鏃では腰岳系黒曜石製の縦長剥片を素材とし、周縁のみに二次加工を施した剥片鏃が1点出土している。

石錐は小型の幅広剥片の末端に簡易な加工を入れて先端部を形成したものが多く、しかも先端部が欠損した場合は、別の箇所加工を入れて作り直すことが多い安易なものが多く認められる。

扁平打製石斧はその石材の多くが緑泥片岩製であり、近接の龍毛遺跡第2次調査と同様の様相を示している。削器については特徴的なものが認められないので、ここでは割愛する。

石材組成 礫器・砥石を除いた109点の石材のうち、最も多いのは77点の姫島産黒曜石で、13点の緑泥片岩、9点の腰岳系黒曜石などが続く。

全体の70.7%を占める姫島産黒曜石のみが石核を組成しており、石核―剥片―製品と揃っている。石核削器・打製石斧を除く他の製品が製作されており、本調査区では最もよく利用された石材と言える。

腰岳系黒曜石は6.5%を占めるが、全てが製品か使用痕を有する剥片で、製品ないしは素材単位で搬入されたと考えられる。しかし、背付石器・打製石斧を除く器種の製品が認められ、依存度は低くない。

最後に緑泥片岩であるが、11点中10点の扁平打製石斧の石材となっており、器種と石材の結び付きが最も強い。また、緑泥片岩製の他の遺物が、全て打製石斧の製作で出たと考えられる剥片であることから、本調査区に近い産地から原石単位で持ち込まれ、製作されたものと推測される。

3. 龍毛遺跡

1) 概 要

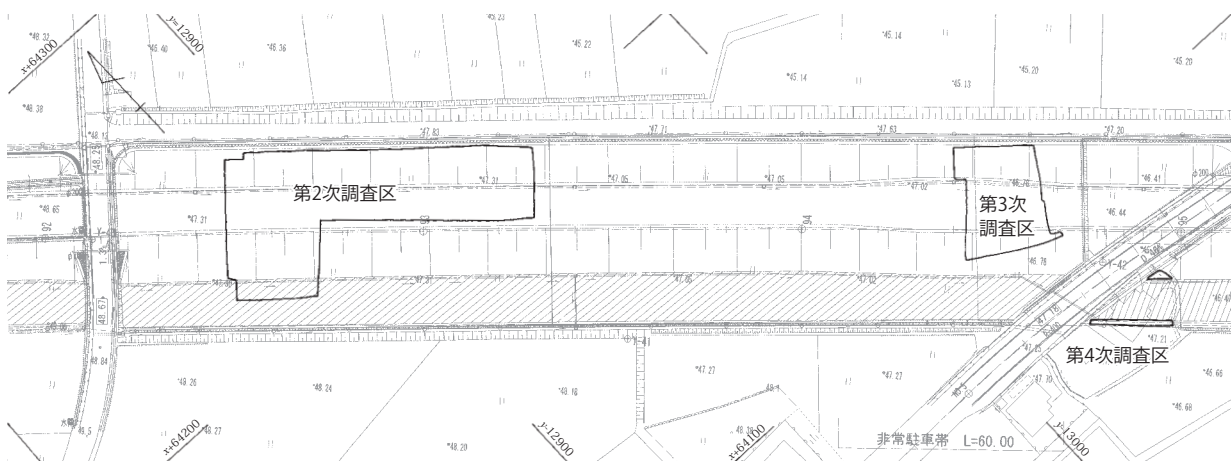
事前の確認調査の結果では長さ 80m、約 4,000㎡が第 2 次調査の対象地として設定された。調査の効率化を図って、センター杭を境に略南北に分け、北（正確には北東）側を先行して調査を行った。この結果、地山は西高東低で傾斜し、東半部分は低湿地となっていて遺構はないものと判断されたので、南側は西半のみを調査することとした。その後、古墳時代の水田の延長が期待される南西側を拡張した。この第 2 次調査は平成 21 年 9 月 9 日から翌 22 年 2 月 12 日までの間に実施した。

第 3 次調査対象地の確認調査は、平成 24 年 3 月 9 日に実施した。この第 3 次調査区は第 1 次調査区（旧新吉富村教委調査分）の東側に接する。地形的には南側の丘陵から北に向けて延びる尾根上に立地し、西側の龍毛遺跡第 2 次調査区とは小さな谷を挟んで対峙している。この周辺の地形は後世の削平が及んでいる箇所が多く、調査対象地も現状では平坦地となっていたが、かろうじて削平を免れた遺構が存在することが確認調査によって確認されたため、その結果をもとに平成 24 年 5 月 15 日から重機による表土掘削を開始した。

ところで、当該調査区はコガノ元遺跡第 2 次調査として発掘を行ったが、調査完了後に上毛町により周知の埋蔵文化財包蔵地の名称変更がなされたため、それに従い龍毛遺跡（第 3 次調査）として報告する。なお、当遺跡の北東に接するコガノ元遺跡（平成 14 年に新吉富村教委が圃場整備事業に伴って調査を実施）についても、今回の遺跡名称の変更で「龍毛遺跡」となっている。

当遺跡の現状の平坦面は後世に削平された後、河原石を多量に含む粘性土で一気に埋め立てられていたため、平バケットの重機による表土掘削に手間取ったが、5 月 24 日からは作業員を投入して調査に着手した。調査は発掘区中央部の攪乱の掘削からはじめ、続いて遺構面がもっとも高い西側部分から遺構検出を開始した。6 月半ばまでに遺構の掘削を終え、6 月 14 日にラジコンヘリコプターによる空中写真撮影を行い、翌 15 日から遺構実測を開始。梅雨に入っていたため思うように作業が進捗しなかったが、着工が迫っている豊前市鳥越下屋敷遺跡（中津 19 地点）の重機による表土除去作業と併行しつつ、7 月 10 日に実測作業がようやく終了し、13 日までに発掘器材と建機の撤収を行って発掘調査を完了した。

第 4 次調査区は県道に挟まれた宅地跡である。東側の宅地跡や水田はすでに確認調査が終了していて、遺跡は確認されなかった。第 4 次調査区となる宅地は、大部分が限定協議の対象として、



第 46 図 龍毛遺跡地区割図 (1/2,000)

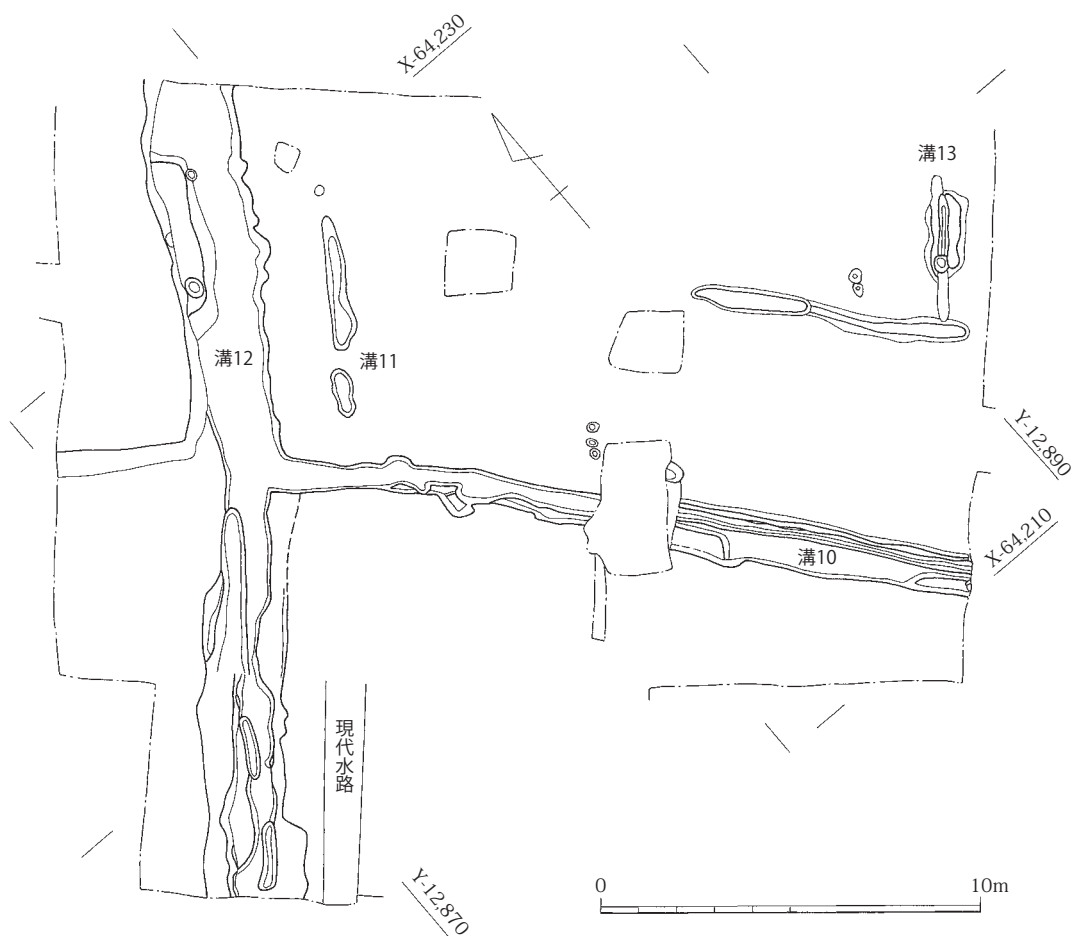
協議で使用する図面ではハッチングされていて、見過ごしていた地点である。平成24年11月16日、この宅地跡に水路を埋設するために立ち会いを求められて、工事関係者から提供された重機で用地内を試掘したところ、竪穴住居状の遺構が表土下0.2mほどの浅い部分で見えた。竪穴住居跡であれば、たとえ工事範囲が2mに満たない水路工事範囲でも調査の必要があるということで、西日本高速道路株式会社および工事業者と協議して、しばらくの猶予を許された。発掘調査は翌週月・火曜日（19・20日）に急遽実施、無事に終了することができた。

2) 第2次調査

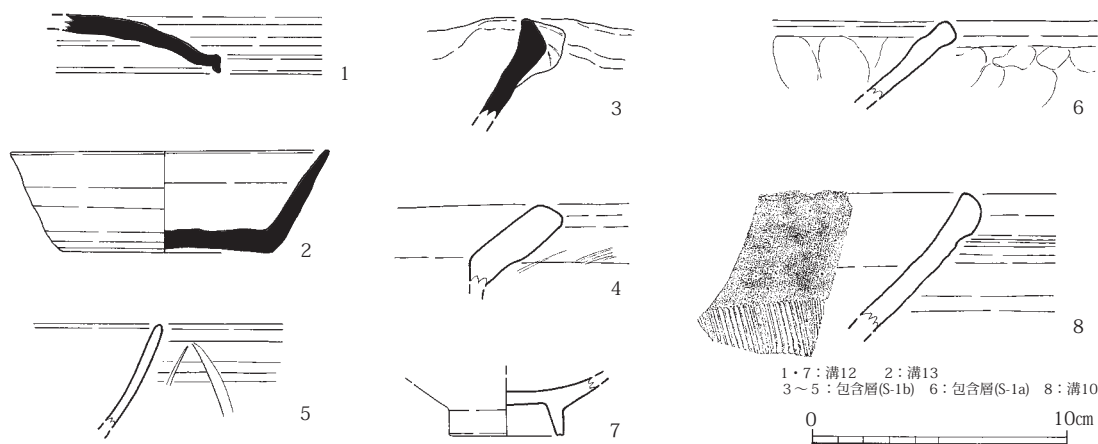
試掘の成果からは水田の存在が予想できなかったが、表土掘削後の調査区北壁の土層観察によって水田遺構の存在が判明した。

南西部ではその成果に基づき、圃場整備時の埋土を除去し、第1水田面上までを表土を掘削した。第1水田面によって、第4水田面の全てと第2水田面の殆どが削平されていたが、南東部の南端で部分的ながら第3水田面下の第5水田面を検出した。

以下では第1～5水田面と水田開発以前の6枚の遺構面に分けて記述する。



第47図 第1水田面遺構配置図 (1/200)



第 48 図 第 1 水田面出土遺物実測図 (1/3))

第 1 水田面 (図版 30、第 47 図)

最上位の水田で、検出したのは調査区南西端付近のみである。この水田面に伴う主要な遺構は南北に近い方位をとる 12 号溝とそれにほぼ直角方向に配された 10 号溝状遺構である。

10 号溝状遺構は最大幅 1.15m、同深さ 0.25m の規模で、溝底のレベルから見て 12 号溝へ向かって流れたようである。溝に沿って畦畔状の高まりが部分的に見られたが、高さは最大で 0.02m ほどであった。埋土は大部分が青灰色土である。

12 号溝状遺構は最大幅 1.5m、同深さ 0.45m の規模で、検出範囲の両端床面で 0.3m ほどのレベル差があって、北流していたものと思われる。これも青灰色土が堆積していた。

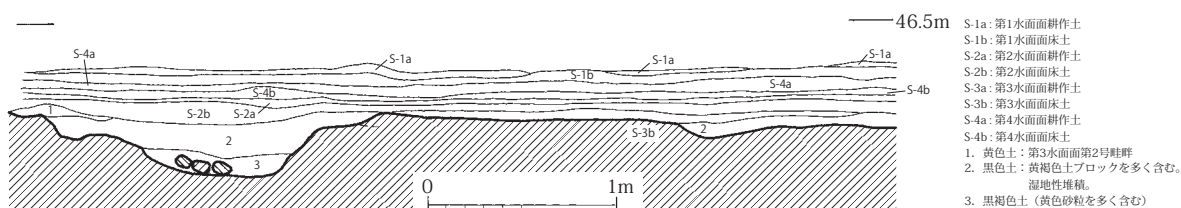
出土遺物 (図版 33、第 48 図) 水田の耕作土や床土、そして溝状遺構から近世の遺物を中心に縄文時代～中世の遺物も出土している。縄文時代の石器については後述する。

1 は須恵器杯蓋小片。2 は杯身で大部分が残存する。体部が急な角度をもって直線的に立ち上がる。3 は東播系須恵器摺鉢の小片で、口端部の拡張はあまり進んでいない。4 は土師器甕の小片。5 は龍泉窯系青磁碗で、片切り彫りで蓮弁文を刻み、灰味帯びる青色に発色する。6 は瓦質の鍋であろう。口縁部内面を受け口状に弱く造作する。内外面は灰黒色で、器肉は灰褐色。

7 は近世陶器。高台畳付を除いて全面に灰褐色となる釉をかける。高台は高く、形状もしっかりしている。8 は陶器摺鉢で、暗灰赤褐色～暗褐色といった色となるが無釉で、摺目はシャープで深い。口縁部はわずかに肥厚させ、外面下位に沈線を刻むだけの単純な形態である。備前焼か。

第 2 水田面 (第 50 図)

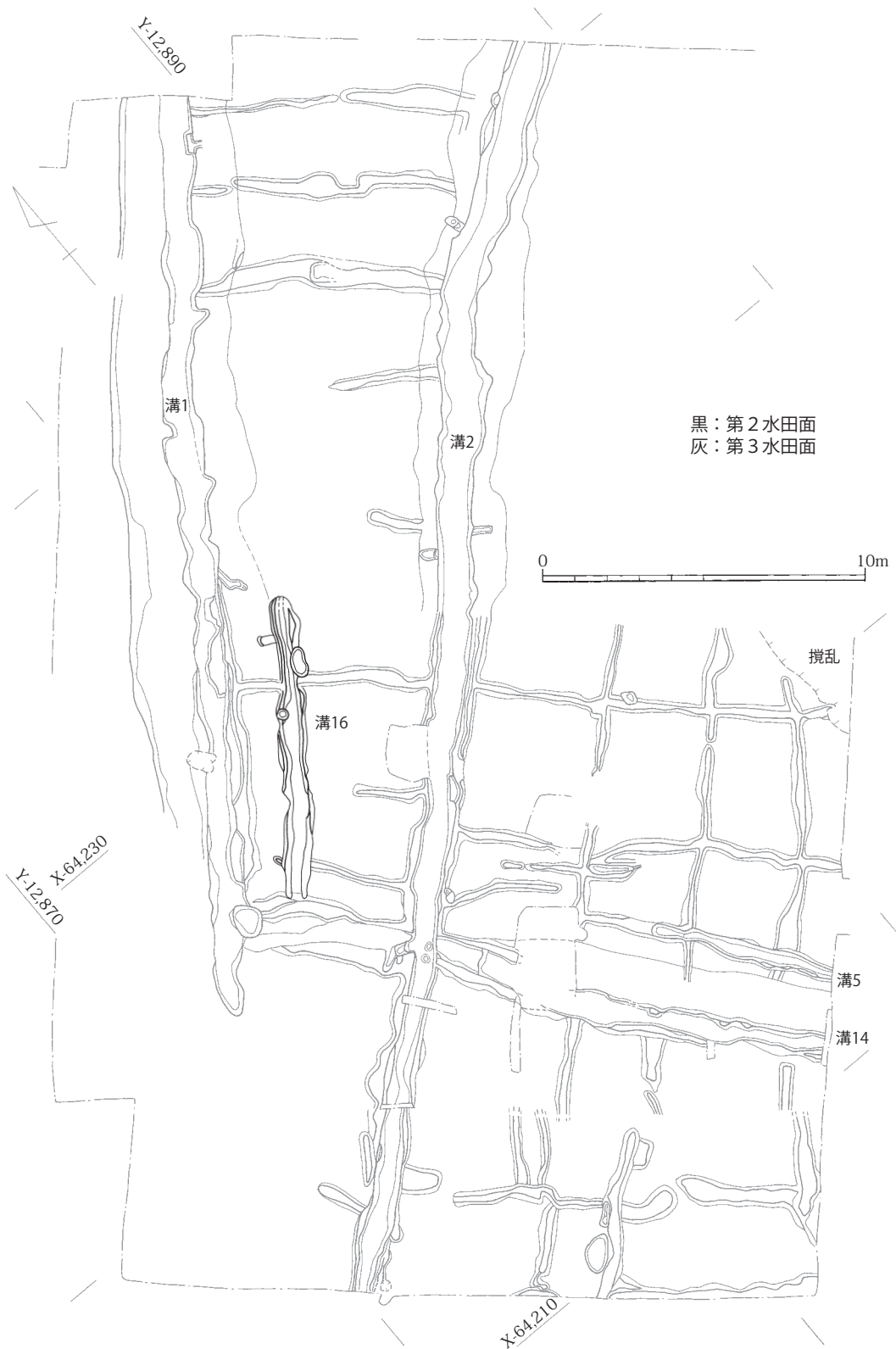
残された原稿ではその位置付けの根拠がわからないが、第 1 水田面と第 3 水田面の間にあって、



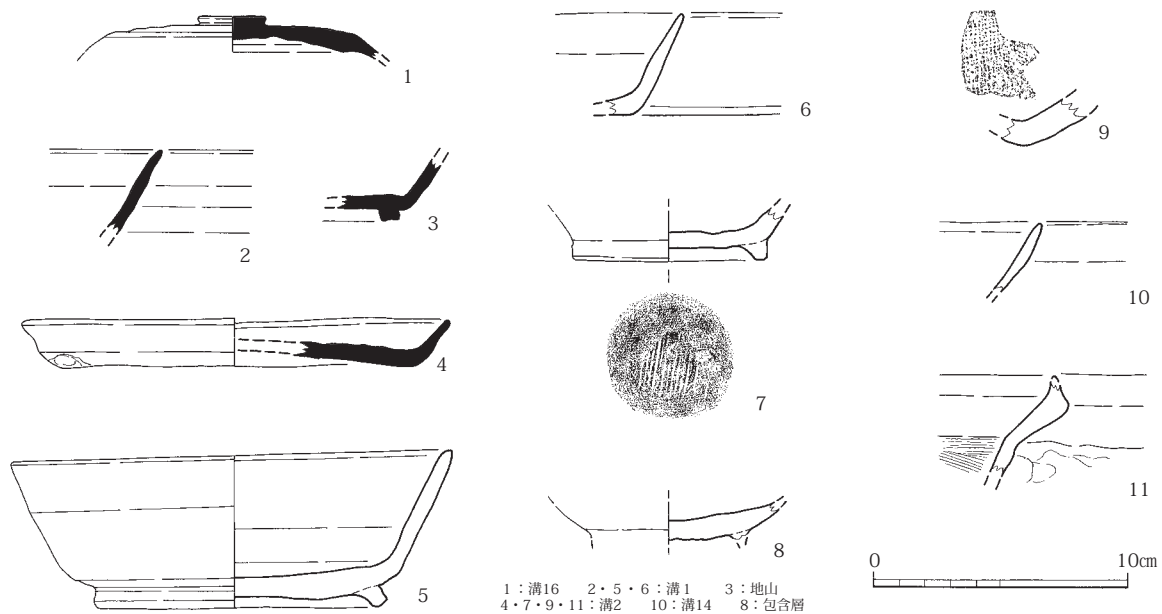
第 49 図 2 号溝状遺構付近土層実測図 (1/40)

一部のみが確認できたという。

この水田面に伴う 16 号溝状遺構は最大幅 0.7m、同深さ 0.09m の規模で、両端の床面のレベル差は 0.06m で北側が低くなっている。両側に最大幅 0.3～0.5m、同高さ 0.05m の「畦畔」が付属する。第 1 水田面に混入した土器から中世に属するものと判断されている。



第 50 図 第 2・3 水田面遺構配置図 (1/200)



第 51 図 第 3 水田面出土遺物実測図 (1/3)

第 3 水田面 (図版 30・31、第 50 図)

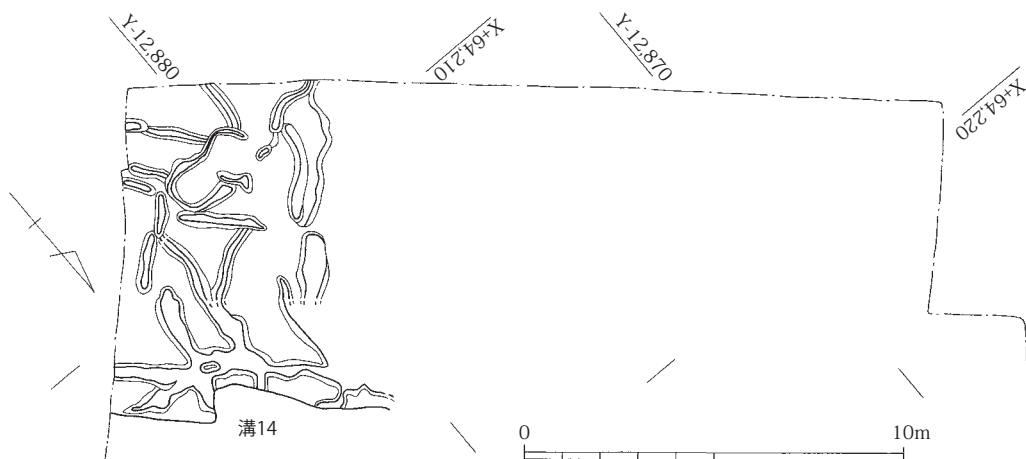
最も広がりをもつ水田面で、主として 3 条の直線的な溝状遺構と無数の「畦畔」が認められた。

1 号溝状遺構は南西端が削平されている。最大幅 1.3 m、同深さ 0.5 m 余で、両端の床面レベル差は 0.4 m ほどとなる。地形に沿って南西から北東へ流れていたようである。青灰色土を埋土とする第 1 水田面 12 号溝状遺構と重複するが、この溝状遺構は黒色系の埋土であり、明らかに異なっている。

2 号溝状遺構は 1 号溝状遺構とやや方位を変えているが、近い方位を以て掘削されている。最大幅 1.6 m、同深さ 0.85 m の規模で、北東端の床面レベルは 45.7 m ほどである。これも黒色系の埋土をもつ。

14 号溝状遺構は先の 2 条と交わる方位をもつが、1 号溝状遺構との関係は「南東から北西向きに水が流れ、最終的に 1 号溝に流れ込む構造」と併存が想定されているようで、2 号溝状遺構との関係には記述がない。

「畦畔」とするものはいずれも数 cm の高さのもので、田面の区画は最大で 4×4 m、最小で 2.5



第 52 図 第 5 水田面遺構配置図 (1/200)

× 2.5 mとなる。

「畦畔」が途切れる取排水口と見られる部分もあるようである。

出土遺物（図版 33、第 51 図）

1～4 は須恵器。1 は用をなさないほど潰れたつまみをもつ。2 は器表が非常に荒れた杯身。3 は小片。4 は 1/2 ほどが残る。焼け歪みが大きく、内面は灰被りがひどい。外面にも自然釉の溜まりが付着する。また、回転篋削り痕が残る底部には熔着が見られる。

5～9 は土師器。5 は 3/4 ほどが残存する杯。形状は須恵器のそれと同じであるが、器肉が厚く、全体が灰赤色といった色に均質に焼かれていて、焼き損じではないようである。高台は貼り付けていて、その内側は回転篋削りの痕が見えるが、中心付近は未調整のようである。全体に横撫で丁寧仕上げられるようである。6 は杯身で、これも 5 と同様に器肉が厚く色調も同様である。7 はしっかりした断面方形となる高台がつく碗で、高台内にスダレ状の圧痕が残る。器表は赤味を帯びた黄白色だが、器肉は灰褐色となる。8 は高台が断面三角形となる碗で、これは器表が非常に荒れている。全体に黄白色となる。9 はいわゆる塩壺の小片。

10 は黒色土器碗の小片で、内面と口縁部付近の外面が黒色化するが、それ以外の外面・器肉は黄白色～灰白色となる。11 は瓦質土器鍋で、体部外面には指頭痕が残る。また、全体が淡灰色となり、ススの付着も見られない、



第 53 図 水田下面遺構配置図 (1/400)

第4水田面（第49図）

原稿では「直上の2号水田面（本報告で第2水田面としたもの）によって削平を受けている」とあるが、土層図ではここである第1水田面と第2水田面の間にあるように図示されている。いずれにしても、面的な確認ができず、土層観察で設定したものであるという。

第5水田面（第52図）

第3水田面14号溝状遺構の南の狭い範囲で検出されたもので、第3水田面の直下となる。出土した土器から見て古墳時代後期に属するものとされる。「畦畔」の高さは0.07～0.07mである。

水田下面の遺構（図版31、第54図）

柱穴やいわゆる風倒木痕などが検出されたが、建物跡を構成する柱穴は認められず、プライマリーな状態で遺物を出土する遺構もない。

ただ、調査区南西端付近で、連続する不整形の落ち込みが無数あったのでこれについて土層図・写真を示しておく。原稿では「倒木痕」として以下のように記されている。

「隣り合うものとの取り留めのない絡み合いをしていることから、遺構ではなく倒木痕であることは間違いないが、調査区北東半の風倒木痕群とは、密集していることだけでなく、埋土の状況も全く異なる。即ち、倒木痕同士の境目には地山起源と考えられる黄褐色土が盛り上がっているが、大半は湿地層起源と考えられる黒褐色土もしくは暗褐色土に覆われている。これは、黄褐色土に関しては樹木が倒れた時に地山が持ち上がったものと考えられ、自然的である。しかし、湿地層に関しては、第2号溝状遺構の北東側の標高の低い窪地にしか確認されておらず、人為的な搬入が推測される。出土した遺物から古墳時代中期の所産と考えられる。」

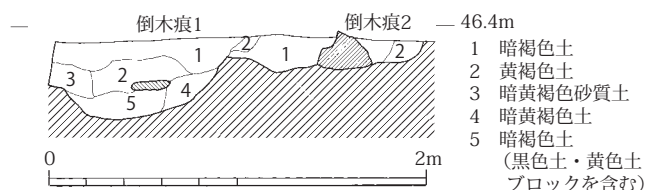
その他の出土遺物

今回の調査の中で各所から石器等が出土している。もちろんプライマリーなものではなく、水田面などに混入した状況であるため、ここでまとめて紹介する。また縄文土器と思われる土器片も数点あるが、無文粗製土器の小片であり略する。

石製品（図版33、第55・56図） 1・2は二等辺三角形に近い形状を呈する、姫島産黒曜石製の石鏃である。1は基部にやや深い抉りが入る。裏面は割合平坦だが、表面はやや盛り上がっている。表・裏面ともに内奥まで押圧剥離が及び、左脚部は大きく、右脚部は若干、尖端は僅かに欠損している。2は基部には直線状のやや深い抉りが入る。表・裏面ともに押圧剥離が内奥まで及んでいる。尖端・右脚部を僅かに、左脚部を大きく欠損している。

3・6・9・10は姫島産黒曜石製の削器である。3はやや分厚い幅広剥片を素材とし、周縁部に表・裏面からの押圧状の加工を施して、撥形に整形している。その後、下端に同様の加工によって切

截用と考えられる刃部を形成している。裏面は上半にやや内奥に及ぶ平坦な加工が認められる。また、刃部付近に使用による微細な剥離痕が見られる。6はやや分厚い幅広剥片を素材とし、素材の打面部に表・裏面から二次加工を



第54図 土坑土層実測図（1/40）

施して刃部を形成している。使用痕が若干認められる。9は石錐の機能を併せ持つ削器である。分割された厚手の剥片を素材とし、左側縁に裏面から加工を施して、下端に先端を、左側縁に搔器状の刃部を形成している。使用によって、先端には槌状の剥離が、左側縁裏面には細い剥落が生じている。10は分割された厚手の剥片を素材とし、下端左側縁に裏面から二次加工を施して刃部を形成している。使用による微細剥離痕が観察される。

4は針尾島系黒曜石製の搔器である。反りが強く、背面に全面礫面を残す幅広剥片を素材とし、末端部に急斜度の調整を施して刃部を形成している。ただし、打面部や左側縁に残る剥離面の方が刃部形成の二次加工による剥離面の風化よりかなり古く、二重パティナとなっている。

5は姫島産黒曜石製の二次加工を有する剥片である。節理面が残る分厚い幅広剥片を素材とし、右側縁に腹面から、打面付近に背面から二次加工を施しており、打面付近に使用による微細な剥離痕が認められる。

11は姫島産黒曜石製の背付石器である。剥片素材石核の残核を素材とし、左側縁に刃潰し加工を施し、上端を刃部に設定している。右側縁に装着ないしは手擦れと考えられる微細な剥離痕が、使用による刃毀れが刃部に観察される。

12は緑色片岩製の扁平打製石斧である。表・裏面に平坦加工を施した後、周縁に急斜度な加工を施して整形している。左側縁・刃部側の下半を裏面からの折れによって喪失している。

13は緑色片岩製の打製石庖丁。表・裏面への大まかな平坦加工と周縁部への急斜度な調整によって扇形に近い形状に整形した後、下端への浅い加工によって刃部を形成している。また、右側縁には垂直に近い調整と、左側縁には間接ハンマー的な道具によって穿孔に近い深い抉りを施しており、紐状の装着具が想定される。上端及び刃部に使用によると考えられる微細な剥離痕が観察される。そして、左側縁の抉りの部分にも若干の欠損が認められる。

14～27は石錐である。14は腰岳系黒曜石製で、幅広剥片を素材とし、打面を折り取った後、左右側縁に裏面から急斜度の加工を施して素材の末端に先端部を形成し、折断面付近に平坦な加工を行なって基部を作っている。使用により先端部が若干欠損し、基部には微細な剥離痕が生じている。15は姫島産黒曜石製で、上半を欠損ないしは折断された幅広剥片を素材とし、下端の左側縁には表・裏面から、右側縁には裏面のみから二次加工を施して先端部を作り出すが、使用により若干欠損している。16は姫島産黒曜石製で、幅広剥片を素材とし、打面側を折断した後、下端に腹面から急斜度の二次加工を施して先端部を形成している。使用による微細な剥離痕が認められる。また上端右側縁にも二次加工があり、左側縁は欠損しているため、上端にも先端部が形成されていた可能性が高い。17はチャート製で、上端と左側縁に自然面を残す幅広剥片を素材とし、先細りする素材の末端付近に裏面から急斜度の、表面から浅い角度の加工を施して先端部を形成している。使用によって先端部が欠損するとともに表面・左右側面、上端の稜が潰れている。18は腰岳系黒曜石製で、左右側縁を最終作業面とする石核を素材とし、左右側縁の下半に表・裏面から急斜度の加工を施して先端部を形成するが、使用によって若干欠損している。19は姫島産黒曜石製で、小型の幅広剥片を素材とし、打面を除去した後、腹背面から急斜度な加工を施し、左上と下端に錐部を形成している。両錐部ともに使用による微細な剥離痕・欠損が認められる。20は姫島産黒曜石製で、やや縦に長い幅広剥片を素材とし、素材の末端と打面除去後の上端の、両側縁に主に腹面からブランディング状の二次加工を施して先端部を形成している。両錐部ともに使用によって若干欠損している。21はチャート製で、分厚く小形の幅広剥片を素材とし、下端付近

の左右側縁に腹面から二次加工を施して尖端部を形成している。尖端付近に微細な潰れ痕が認められる。22は姫島産黒曜石製で、やや縦に長く、先細りの幅広剥片を素材とし、打面除去後に上端は背面から、左側縁は腹・背面から調整を施して左上と末端に錐部を作りだしている。両錐部に使用による微細な欠損が認められる。23は姫島産黒曜石製で、幅広剥片を素材とし、下端・左側縁中央に表・裏面からの急斜度な加工によって尖端部を形成している。錐部は使用により若干欠損するとともに剥落なども認められる。上端には使用によると考えられる微細な剥離痕が観察される。24は姫島産黒曜石製で、やや厚めの幅広剥片を素材とし、左側縁中央と下端に表・裏面から急斜度の加工を施して、尖端部を形成している。両錐部ともに微細な剥離痕と欠損が認められる。



第55図 第2次調査出土石製品等実測図1 (2/3)

25 は姫島産黒曜石製で、幅広剥片を素材とし、素材の打面を除去した後、末端に表・裏面から急斜度の加工を施して先端部を形成している。末端左側縁及び上端に使用による微細な剥離痕が観察される。26 は姫島産黒曜石製で、幅広剥片を素材とし、素材の背面から腹面へ二次加工を施し、下端と左側縁中央—素材の打面に先端部を形成している。使用による剥落痕が両先端部ともに観察される。27 は姫島産黒曜石製で、小型の幅広剥片を素材とし、下端付近の両側縁に表面から二次加工を施して先端部を形成している。使用によって先端部付近に槌状剥離が生じている。また、



第 56 図 第 2 次調査出土石製品等実測図 2 (2/3)

上端付近の左側縁にも表面から二次加工が認められ、右側縁は欠損しており、錐の尖端を形成していたと考えられる。

土錘（第 56 図） 26 は上半を欠損しており、下端の口も若干欠けている。また、上端の口付近に紐ずれと考えられる痕が認められる。長さは 2.15cm が残存しており、径は 1.05cm、孔径は上端が 0.35cm、下端は 0.40cm、重さは 2.9g を測る。27 も上半を欠損しているが、下端は僅かな欠けが認められる程度である。長さは 3.00cm が残存しており、径は 1.40cm、孔径は上端が 0.35cm、下端が 0.40cm、重さは 5.0g を測る。両者ともに時期は不明である。

3) 第 3 次調査

第 3 次調査では溝 1 条、土坑 4 基のほかピット多数を検出したものの、確実に掘立柱建物と判断できるものはない。遺構は疎らで、かつ遺物の量も僅少で須恵器片や瓦器碗が出土したにとどまる。

本遺跡の基本層序は、表土下に暗黄褐色で径 50 ～ 60cm ほどの河原石が多量に含まれる厚さ 60cm の粘性の強い粘質土層が、その下部は径 30cm 前後の円礫が多量に含まれる黄褐色の粘質土層となる。両者は一連の近年の埋め土で、その下層の暗黄灰～黄灰色粘土層が遺構面となる。ほぼ調査区全体にわたってこのような層序を示し、ほとんどの部分が削平を受けているが、北西隅部の一画では厚さ 2 ～ 3cm ほどの黒灰色土の広がり確認され、この層を除去後にピット等の遺構が確認された。黒灰色土層から遺物の出土はなく、この層が形成された時期は不明。また、調査区の南東隅部には段落ちが存在し、灰褐色粘土層が 40cm ほどの厚さで堆積している。遺構面は標高 46.1 ～ 46.4 m を測り、北東部に向かって緩く傾斜する。

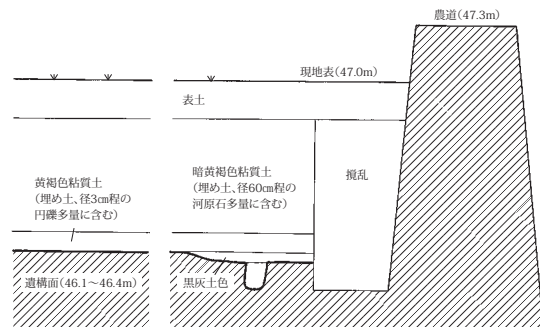
溝状遺構（図版 36, 第 58 図）

発掘区の南東隅部で検出した。灰褐色粘土層から切り込んでいる。東側は削平され、西側は発掘区外に延びる。長さ 9.5 m 分検出した。上端幅 0.6 ～ 1.5 m、下端幅 0.5 m、深さ 0.3 ～ 0.4 m を測る。溝の断面形状は底面がフラット気味の略 U 字形を呈する。埋土は黒茶色斑粒を含む黄灰色粘土に灰色粘土がブロック状に混じっており、レンズ状堆積を示す。鉄器が 1 点出土した。

土 坑（図版 35、第 59 図）

4 基を土坑として報告するが、1 号土坑以外は明確な遺構として捉えることが難しい。

1 号土坑 発掘区の北部で検出した。平面形状は楕円形に近い。長さ 1.5 m、幅 0.9 m、深さ 0.3 m を測る。埋土には 10 ～ 30cm と径 5cm 前後の円礫が充填されており、中央部に比較的大きめの石を並べた後、周囲に小さな円礫を配している傾向があるものの、配置に規則性があるとはみられない。埋土は黒色土で黄褐色粘土がブロック状に混じる。埋土中から須恵器の破片が 1 点出土した。



第 57 図 第 3 次調査土層模式図

2号土坑 発掘区の北部、1号土坑の南側で検出した。平面形は長方形の短辺にピットがついた不整形。長さ2.8 m、幅0.9 m、深さ0.4 mを測る。埋土は茶灰色粘質土。

3号土坑 発掘区の北部、2号土坑の西側で検出した。平面形状は不整形。長さ3.1 m、幅1.2～1.3 m、深さ0.7 mを測る。底面はフラットだが、壁には複数のテラスやピットを有しながら緩やかに立ち上がる。埋土は茶灰色粘質土。

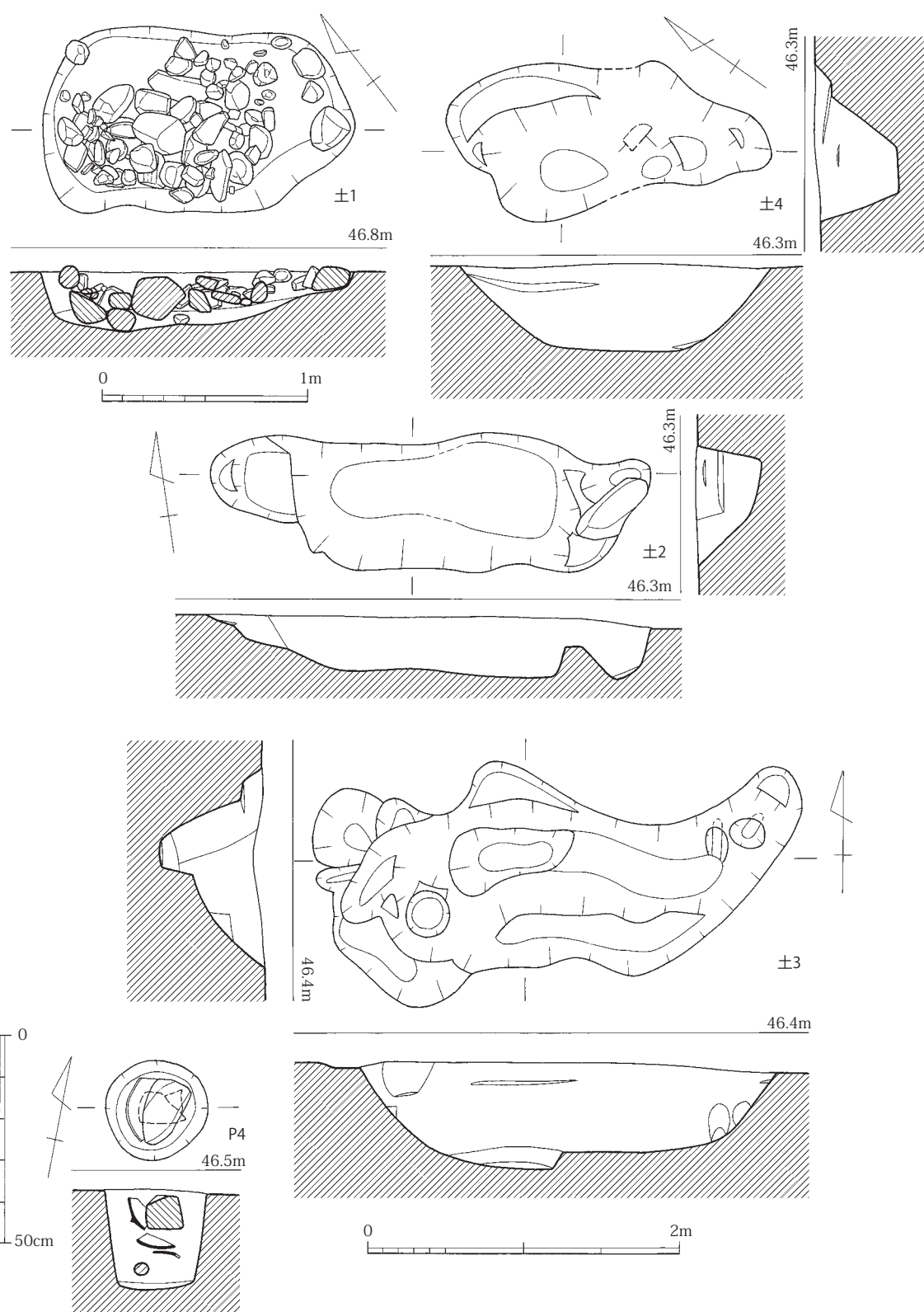
4号土坑 発掘区の西部で検出した。平面形状は不整形。長さ2.1 m、幅1.0 m、深さ0.5 mを測る。底部はフラットで、壁はいくつかのテラスを有しながら緩やかに立ち上がる。埋土は茶灰色粘質土。

柱 穴 (図版 36、第 59 図)

発掘区の東部で検出した。径24cm、深さ24cmを測る。1個体分の割れた瓦器碗が埋土中から



第 58 図 第 3 次調査遺構配置図 (1/200)

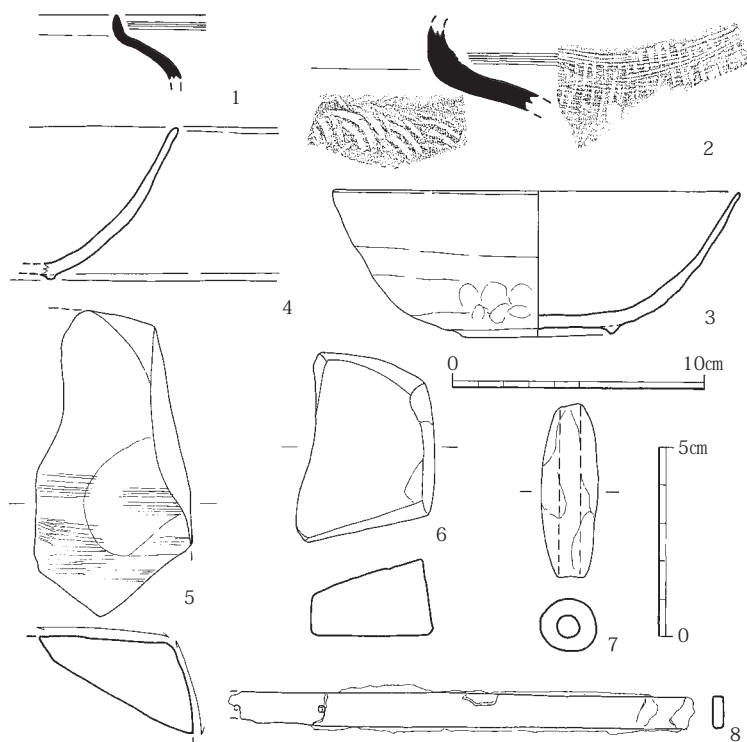


第 59 図 土坑・柱穴実測図 (1/30, 1/40, 1/15)

出土し、その上部に長さ 16cm、幅 9cm の角礫が据え置かれていた。地鎮などに関する遺構である可能性も否定できない。

出土遺物（図版 37、第 60 図）

土器 1・2 は須恵器。1 は短頸壺の口縁部。内傾して立ち上がる。口縁部外面にカキ目を施す。調整は内外面とも横撫で。色調は青灰色。攪乱から出土。2 は甕の頸部の破片。調整は外面が格子叩き、内面には同心円の当て具痕が残る。色調は灰色。1 号土坑出土。3・4 は瓦器碗。3 は体部を 3 分の 1 ほど欠く。体部は丸みを帯び、口縁部はわずかに外反する。高台の断面形状は畳付の幅が狭く三角形に近いが、全周の 4 分の



第 60 図 出土遺物実測図（1/3、1/2）

1 ほどは台形となる。調整は口縁部外面が横撫で、体部下半に指押さえ痕が残る。全体的に磨耗が著しく内面の調整は不明。口径 16.0cm、高台径 6.0cm、器高 5.7cm を測る。色調は淡黄灰色から淡黒灰色。4 号土坑出土。4 は口縁部から高台部分にかけての破片。端部を丸く収める。調整は摩滅が著しいため不明。色調は黄白色から淡灰色を呈する。ピット 3 出土。

石器 5 は砥石の破片で上面は使用によりくぼんでいる。残存長 8.0cm。砂岩製。6 は完形品で全面が磨られている。左側の側縁部は弧状に窪む。粗くもろい砂岩製。5 は遺構検出時に、6 は攪乱穴から出土。

土製品 7 は土錘。長さ 4.5cm、最大幅 1.5cm、孔径 0.5cm を測る。色調は黄褐色。調整は摩滅が著しく不明。

鉄器 8 は扁平な棒状の鉄製品で両端部を欠失する。2箇所 に径 2mm の孔がつけられる。現存長 12.3cm、幅 1.0cm、厚さ 0.3cm。溝から出土。

4) 第 4 次調査

先述したような慌ただしい調査となった。表土は客土・旧耕作土を含めて 0.2 ～ 0.3m ほどの厚さであったが、その下位、灰赤褐色の地山との間には鉄分などの沈着した非常に堅い層が薄くかんでいて、水路部分の表土掘削はそれを指標として止めていた。調査の初日はその硬化層を剥ぐことから始めた。2 日目は本線部分の表土掘削を行うとともに、水路部分から順次作業員を移動、大型の遺構がなかったことも幸いして、2 日で調査を終えることができた。

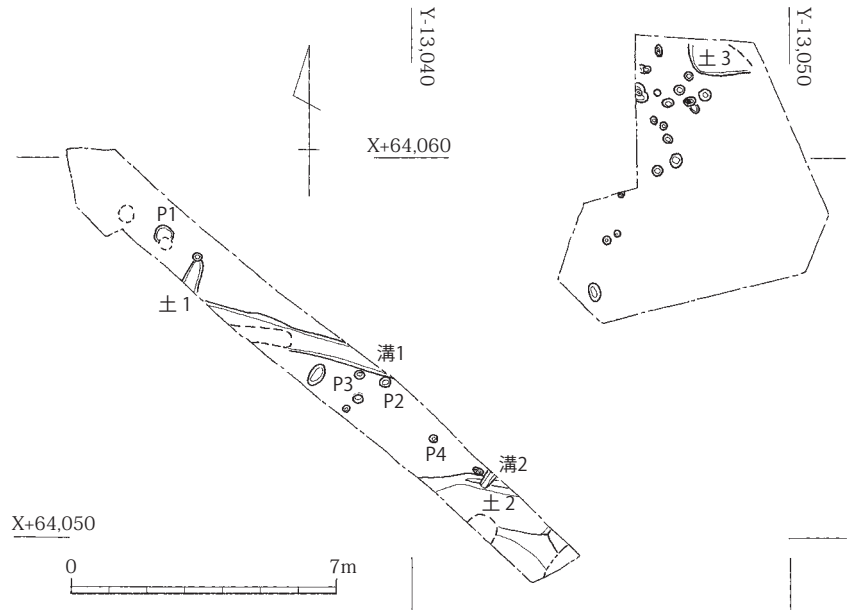
土 坑（図版 38・39、第 62 図）

水路部分西端近くの幅 0.4m、長さ 0.8m 以上、深さ 0.05m ほどの浅い遺構を 1 号土坑、同東端の大きな落ち込みを 2 号土坑、本線部分の北東端で一部を検出したものを 3 号土坑とした。

1 号土坑 西区北端付近で検出したもので、幅 0.4m 長さは 0.8m を検出したが調査区外へ伸びる。深さはわずか 0.05m ほどで、出土遺物はない。

2 号土坑 南北長 3m 以上、東西長 1.5m 以上、深さは最大で 0.4m ほどの規模で、中程にコンクリートや礫の入った円形素掘りの落ち込み（井戸跡？）がある。また、南東端は段落ちとなって失われる。井戸跡から東にのびる上端のラインを図示したが、これは実際には非常に弱いもので、床面はほぼ平坦であった。堆積状況を見ると、北西辺では床面付近に灰黒色の砂質土が薄く溜まり、その上に暗青灰色土、最上層は暗茶褐色土が全体を覆う。

3 号土坑 調査区境で一部を調査した。東西長 1.5m 以上、南北長 0.8m 以上の規模で、平面は隅丸長方形となるのであろう。なお、北東隅は壊されている。深さは 0.2m ほどで、床面はほぼ平坦、暗茶褐色土がほぼ一様に堆積していた。出土遺物はない。



第 61 図 第 4 次調査区遺構配置図 (1/200)

溝状遺構（図版 38、第 61・62 図）

水路部分の西寄りで検出したものを 1 号溝状遺構、同東端の 2 号土坑と重複する幅 0.2 m 強、深さ 0.2m ほどの小規模なものを 2 号溝状遺構とした。

1 号溝状遺構 幅 0.5 ～ 0.8m ほど、深さは 0.1m に満たない浅いものである。埋土は床土と思われる灰黄褐色砂質土が一様に入り、西側では 0.4m の幅で栗石の詰まった布掘り基礎と思われるものが重複している。出土遺物はない。

2 号溝状遺構 幅 0.2 m 強、深さ 0.17m ほどの小規模な溝。土坑を掘り下げて現れたもので、先後関係も不明である。出土遺物はない。

柱 穴（図版 39、第 62 図）

良好な状態で土器を出土した柱穴 2 基を紹介する。

P1 1 号溝と同様の灰黄褐色の埋土をもつ新しい穴に切られるが、直径 0.5m 弱のやや歪な円形を呈する。深さは 0.1m と浅い。

ほぼ検出面で瓦器碗が出土した。下位のほぼ 1/2 は横位に立っていて、上半は割れて伏せたような形であった。

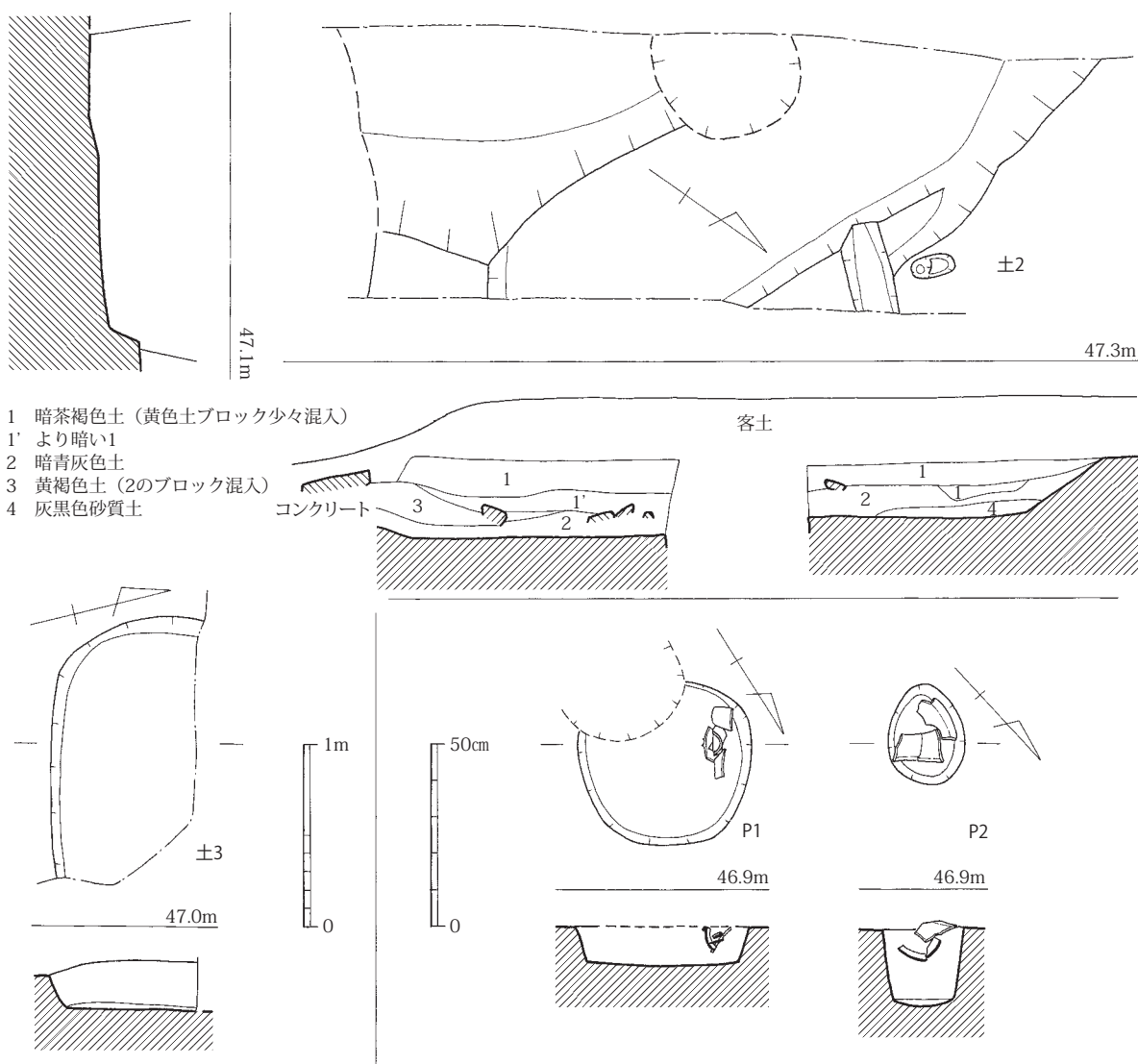
P2 1号溝の東端付近にあり、直径0.2～0.3mのやはり歪な平面となる。深さは0.2mである。土師器鍋の1/2ほどが出土。

出土遺物（図版40、第63図）

土器 1～3は2号土坑出土。1は底径9cmほどの土師器皿で、二次的に焼けたようで、全体が赤あるいは褐色に変色する。2・3は瓦器碗。2は底部の大部分が残存するが、高台は低くかつ形状が不整で、断面三角形の部分と台形になる部分があって幅も整わない。器表が非常に荒れているが、高台内に回転糸切り痕が見える。残存部はすべて黒色化する。3は図示部の1/2が残存。これも高台は小さいが、形状は整う。器表が荒れているが、体部外面下半に指頭痕が著しい。図上端付近の内外面が灰白色、それ以外の部分は黒色化する。

4は柱穴P2出土の土師質鍋で、1/2が残存。口縁部は短く外反させて端面をもつ。内面は灰黄褐色で、底部付近は二次的被熱によって暗褐色となる。外面は暗茶褐色だが、全体的に煤ける。内面は器表が荒れているが、外面では指頭痕がよく残る。

5は柱穴P1出土の瓦器碗で、1/2ほどが復元された。高台は断面三角形となる小振りのもので、

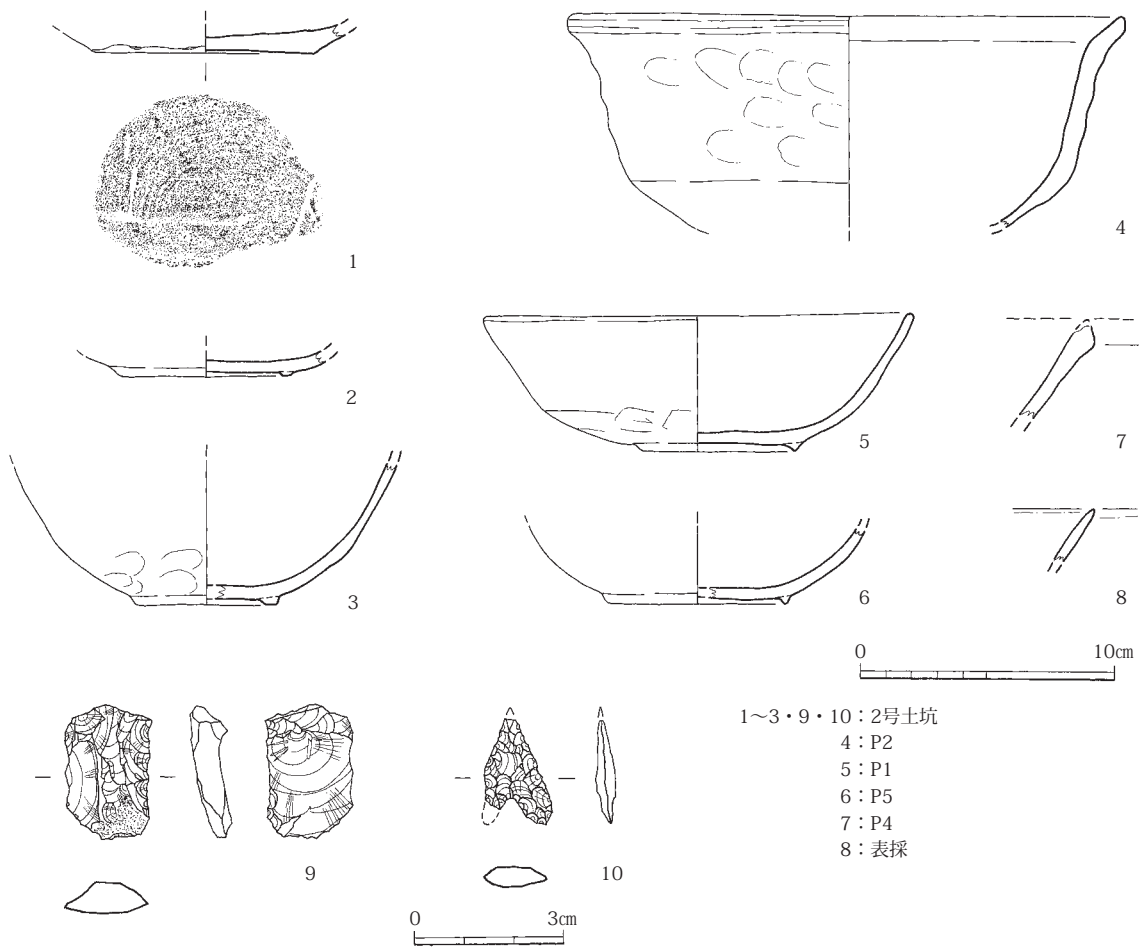


第62図 土坑・柱穴実測図（1/40、1/20）

体部下半は内彎して立ち上がる。これも器表が荒れているが、外面下半では部分的に篋削りの痕跡が見える。口縁部下位付近が内外とも灰白色となるが、外面のほうがより下方まで白色化すると共に、口端部付近が灰黒色となる。6は柱穴P5出土の瓦器碗で、どういうわけか脱色している。形状は他と同様である。

7は柱穴P4出土の東播系須恵器摺鉢の口縁部小片で、端部を欠く。8は踏査時に現在の畦畔上で採集した白磁口禿皿の小片。

石製品 1は黒曜石製の石鏃。先端および左基端を欠損する。2は側縁部に二次加工剥片を施す剥片である。黒曜石製。



第63図 第4次調査区出土遺物実測図 (1/3、2/3)

5) 自然科学的分析

株式会社 古環境研究所

i. 自然科学分析の概要

龍毛遺跡第2次調査の発掘調査では、古代や古墳時代など複数の層準で水田跡とみられる遺構が検出された。そこで、これらの水田跡の確認および当時の周囲の植生や環境を把握する目的で、プラント・オパール分析と花粉分析を行った。

ii. プラント・オパール分析

1. はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内にガラスの主成分である珪酸（ SiO_2 ）が蓄積したものであり、植物が枯れたあとも微化石（プラント・オパール）となって土壤中に半永久的に残っている。プラント・オパール分析は、この微化石を遺跡土壌などから検出して同定・定量する方法であり、イネの消長を検討することで水田跡（稲作跡）の検証や探査が可能である（藤原・杉山, 1984, 杉山, 2000）。

2. 試料

分析試料は、A地点（調査区北東部、SD-2）、A'地点（A地点の北西3m）、B地点（調査区南部、SD-14付近）、C地点（調査区南西部、SD-17）の4地点から採取された計17点である。試料採取箇所を分析結果図に示す。

3. 分析法

プラント・オパール分析は、ガラスビーズ法（藤原, 1976）を用いて、次の手順で行った。

- 1) 試料を105℃で24時間乾燥（絶乾）
- 2) 試料約1gに対し直径約40 μm のガラスビーズを約0.02g添加（電子分析天秤により0.1mgの精度で秤量）
- 3) 電気炉灰化法（550℃・6時間）による脱有機物処理
- 4) 超音波水中照射（300W・42KHz・10分間）による分散
- 5) 沈底法による20 μm 以下の微粒子除去
- 6) 封入剤（オイキット）中に分散してプレパラート作成
- 7) 検鏡・計数

同定は、400倍の偏光顕微鏡下で、おもにイネ科植物の機動細胞に由来するプラント・オパールを対象として行った。計数は、ガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。試料1gあたりのガラスビーズ個数に、計数されたプラント・オパールとガラスビーズ個数の比率をかけて、試料1g中のプラント・オパール個数を求めた。

また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体1

個あたりの植物体乾重、単位：10－5g)をかけて、単位面積で層厚1cmあたりの植物体生産量を算出した。これにより、各植物の繁茂状況や植物間の占有割合などを具体的にとらえることができる(杉山, 2000)。

4. 分析結果

プラント・オパール分析では、イネ、ムギ類(穎の表皮細胞)、ヒエ属型、ヨシ属、ススキ属型、タケ亜科の主要な6分類群について同定・定量を行っている。分析結果を表1および図1に示し、主要な分類群の顕微鏡写真を写真図版に示す。

5. 考察

(1) 水田跡(稲作跡)の検討

水田跡(稲作跡)の検証や探査を行う場合、一般にイネのプラント・オパールが試料1gあたり5,000個以上と高い密度で検出された場合に、そこで稲作が行われていた可能性が高いと判断している(杉山, 2000)。ただし、密度が3,000個/g程度でも水田遺構が検出される事例があることから、ここでは判断の基準を3,000個/gとして検討を行った。

1) A地点

1a層(試料1)から4b層(試料6)までの層準、およびSD-2溝埋土(試料7～9)について分析を行った。その結果、SD-2溝の底部(試料9)を除く各試料からイネが検出された。このうち、1a層(試料1)～2b層(試料4)では密度が5,100～7,500個/gと高い値であり、4a層(試料5)でも4,800個/gと比較的高い値である。したがって、これらの層準では稲作が行われていた可能性が高いと考えられる。

4b層(試料6)とSD-2溝埋土(試料7、8)では、密度が700～1,500個/gと比較的低い値である。イネの密度が低い原因としては、稲作が行われていた期間が短かったこと、土層の堆積速度が速かったこと、採取地点が畦畔や溝など耕作面以外であったこと、および上層や他所からの混入などが考えられる。

2) A'地点

3a層(試料10)と3b層(試料11)について分析を行った。その結果、3a層(試料10)からイネが検出されたが、密度は600個/gと低い値である。イネの密度が低い原因としては、前述のようなことが考えられる。

3) B地点

1b層(試料1)から5b層(試料4)までの層準、およびSD-14溝埋土(試料5)について分析を行った。その結果、1b層(試料1)、5a層(試料3)、SD-14溝埋土(試料5)からイネが検出されたが、密度は600～1,500個/gと低い値である。イネの密度が低い原因としては、前述のようなことが考えられる。

4) C地点

SD-17溝埋土（試料1）について分析を行った。その結果、イネが検出されたが、密度は700個/gと低い値である。イネの密度が低い原因としては、前述のようなことが考えられる。

（2）イネ科栽培植物の検討

プラント・オパール分析で同定される分類群のうち栽培植物が含まれるものには、イネ以外にもムギ類、ヒエ属型（ヒエが含まれる）などがある。このうち、本遺跡の試料からはムギ類が検出された。

ムギ類（穎の表皮細胞）は、A地点の1a層（試料1）から検出された。密度は600個/gと低い値であるが、穎（籾殻）が栽培地に残される確率は低いことから、少量が検出された場合でもかなり過大に評価する必要がある。したがって、同層準の時期に調査地点もしくはその近辺でムギ類が栽培されていた可能性が考えられる。

（3）堆積環境の推定

ヨシ属は湿地的なところに生育し、ススキ属やタケ亜科は比較的乾いたところに生育している。このことから、これらの植物の出現状況を検討することによって、堆積当時の環境（乾燥・湿潤）を推定することができる。イネ以外の分類群では、全体的にタケ亜科（おもにネザサ節型）が多量に検出され、ヨシ属やススキ属型は少量である。おもな分類群の推定生産量によると、おおむねタケ亜科が優勢であり、とくに3a層より下位で多くなっている。

以上のことから、各層準の堆積当時は、ネザサ節などの竹笹類を主体としてススキ属なども生育する比較的乾燥した環境であったと考えられ、部分的にヨシ属が生育するような湿地的なところも見られたと推定される。また、SD-2溝、SD-14溝、SD-17溝の埋土でも竹笹類が主体であり、ヨシ属がほとんど見られないことから、これらの溝は常時滞水するような状況ではなかった可能性が考えられる。

6. まとめ

プラント・オパール分析の結果、近世とされる1a層と1b層、古代とされる2a層、2b層、4a層では、イネが多量に検出され、稲作が行われていた可能性が高いと判断された。また、古代とされる3a層、SD-2溝埋土、SD-14溝埋土、および古墳時代とされる5a層とSD-17溝の埋土でもイネが検出され、調査地点もしくはその周辺で稲作が行われていた可能性が認められた。さらに、1a層ではムギ類が栽培されていた可能性も認められた。

各層準の堆積当時は、ネザサ節などの竹笹類を主体としてススキ属なども生育する比較的乾燥した環境であったと考えられ、部分的にヨシ属が生育するような湿地的なところも見られたと推定される。

文献

杉山真二（2000）植物珪酸体（プラント・オパール）．考古学と植物学．同成社，p.189-213．

藤原宏志（1976）プラント・オパール分析法の基礎的研究（1）—数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法—．考古学と自然科学，9，p.15-29．

藤原宏志・杉山真二（1984）プラント・オパール分析法の基礎的研究（5）—プラント・オパール

分析による水田址の探査－ 考古学と自然科学, 17, p.73-85.

iii. 花粉分析

1. はじめに

花粉分析は、一般に低湿地の堆積物を対象とした比較的広域な植生・環境の復原に応用されており、遺跡調査においては遺構内の堆積物などを対象とした局地的な植生の推定も試みられている。花粉などの植物遺体は、水成堆積物では保存状況が良好であるが、乾燥的な環境下の堆積物では分解されて残存していない場合もある。

2. 試料

分析試料は、A地点（調査区北東部、SD- 2）、B地点（調査区南部、SD-14）、C地点（調査区南西部、SD-17）の3地点から採取された計5点である。試料採取箇所を分析結果図に示す。

3. 方法

花粉の分離抽出は、中村（1967）の方法をもとに、以下の手順で行った。

- 1) 試料から1 cm³ を秤量
- 2) 0.5%リン酸三ナトリウム（12 水）溶液を加えて15 分間湯煎
- 3) 水洗処理の後、0.5mm の篩で礫などの大きな粒子を取り除き、沈澱法で砂粒を除去
- 4) 25%フッ化水素酸溶液を加えて30 分放置
- 5) 水洗処理の後、氷酢酸によって脱水し、アセトリシス処理（無水酢酸9：濃硫酸1 のエルドマン氏液を加え1 分間湯煎）を施す
- 6) 再び氷酢酸を加えて水洗処理
- 7) 沈渣に石炭酸フクシンを加えて染色し、グリセリンゼリーで封入してプレパラート作成
- 8) 検鏡・計数

検鏡は、生物顕微鏡によって300～1000 倍で行った。花粉の同定は、島倉（1973）および中村（1980）をアトラスとして、所有の現生標本との対比で行った。結果は同定レベルによって、科、亜科、属、亜属、節および種の階級で分類し、複数の分類群にまたがるものはハイフン（－）で結んで示した。イネ属については、中村（1974, 1977）を参考にして、現生標本の表面模様・大きさ・孔・表層断面の特徴と対比して同定しているが、個体変化や類似種もあることからイネ属型とした。

4. 結果

（1）分類群

出現した分類群は、樹木花粉3、草本花粉8、シダ植物孢子2 形態の計13 である。分析結果を表2 および図2 に示し、主要な分類群について顕微鏡写真を示す。以下に出現した分類群を記載する。

〔樹木花粉〕

ツガ属、シイ属－マテバシイ属、コナラ属コナラ亜属

〔草本花粉〕

イネ科、カヤツリグサ科、チドメグサ亜科、セリ亜科、シソ科、タンポポ亜科、キク亜科、ヨモギ属

〔シダ植物孢子〕

単条溝孢子、三条溝孢子

(2) 花粉群集の特徴

1) A地点

SD- 2 溝の埋土（試料 7～試料 9）では、草本花粉のヨモギ属、イネ科、カヤツリグサ科、セリ亜科、タンポポ亜科、樹木花粉のコナラ属コナラ亜属、およびシダ植物孢子などが検出されたが、いずれも少量である。

2) B地点

SD14 溝埋土（試料 5）では、草本花粉のヨモギ属、イネ科、チドメグサ亜科、シソ科、樹木花粉のシイ属ーマテバシイ属、およびシダ植物孢子などが検出されたが、いずれも少量である。

3) C地点

SD17 溝埋土（試料 1）では、草本花粉のヨモギ属、イネ科、セリ亜科、樹木花粉のコナラ属コナラ亜属、およびシダ植物孢子などが検出されたが、いずれも少量である。

5. 花粉分析から推定される植生と環境

古代とされる SD- 2 溝と SD-14 溝および古墳時代とされる SD-17 溝については、花粉があまり検出されないことから植生や環境の詳細な推定は困難であるが、当時は溝の周辺にヨモギ属、イネ科、シダ類などの草本類が生育しており、遺跡周辺にはナラ類（コナラ属コナラ亜属）やシイ類（シイ属ーマテバシイ属）などの樹木が分布していたと考えられる。

花粉があまり検出されない原因としては、乾燥もしくは乾湿を繰り返す堆積環境下で花粉などの有機質遺体が分解されたことが想定されることから、これらの溝は常時滞水するような状況ではなかった可能性が考えられる。

文献

金原正明（1993）花粉分析法による古環境復原．新版古代の日本第 10 巻古代資料研究の方法，角川書店，p.248-262.

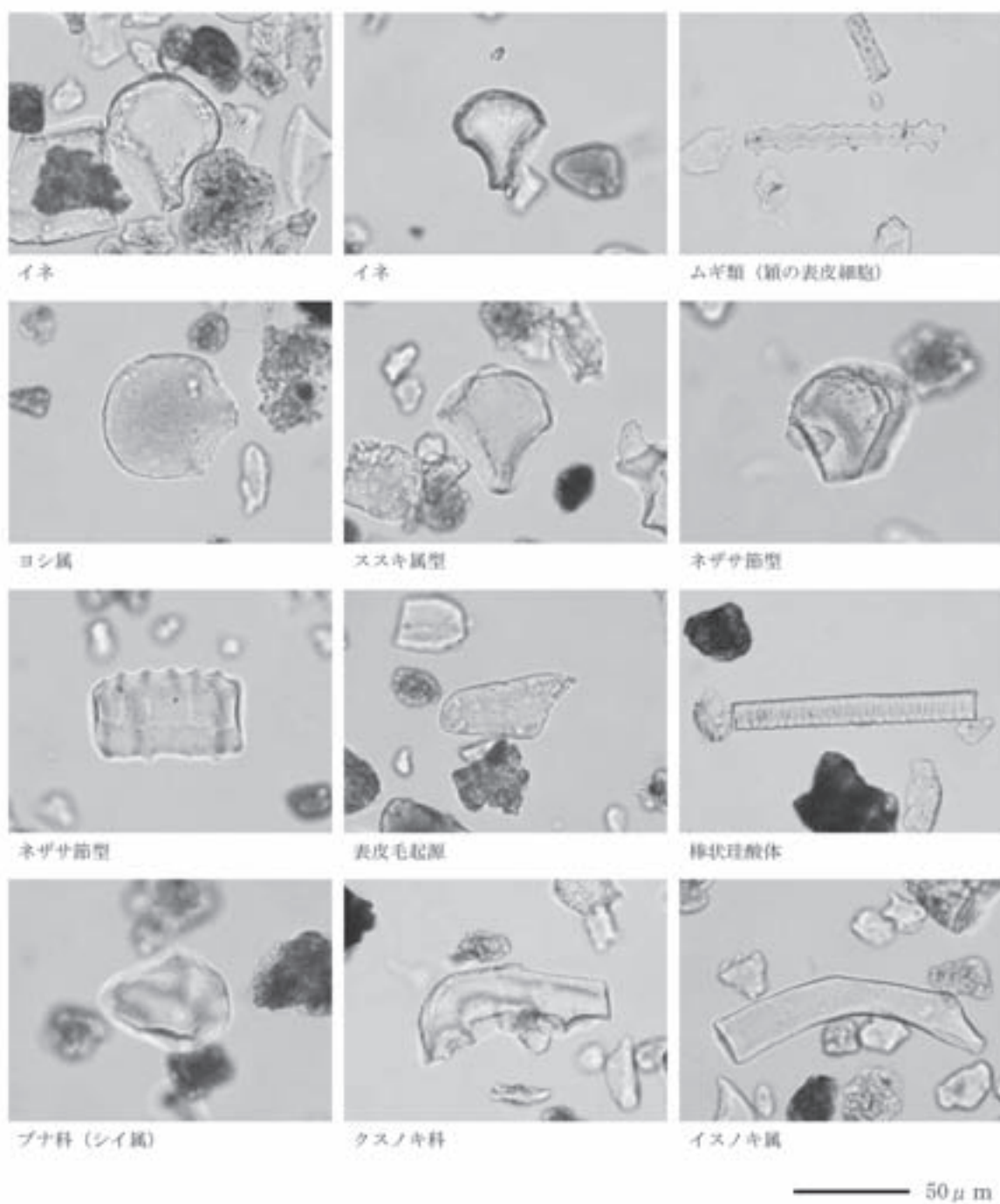
島倉巳三郎（1973）日本植物の花粉形態．大阪市立自然科学博物館収蔵目録第 5 集，60p.

中村純（1967）花粉分析．古今書院，p.82-110.

中村純（1974）イネ科花粉について、とくにイネ（*Oryza sativa*）を中心として．第四紀研究，13,p.187-193.

中村純（1977）稲作とイネ花粉．考古学と自然科学，第 10 号，p.21-30.

中村純（1980）日本産花粉の標徴．大阪自然史博物館収蔵目録第 13 集，91p.



第64図 龍毛遺跡第2次調査の植物珣酸体

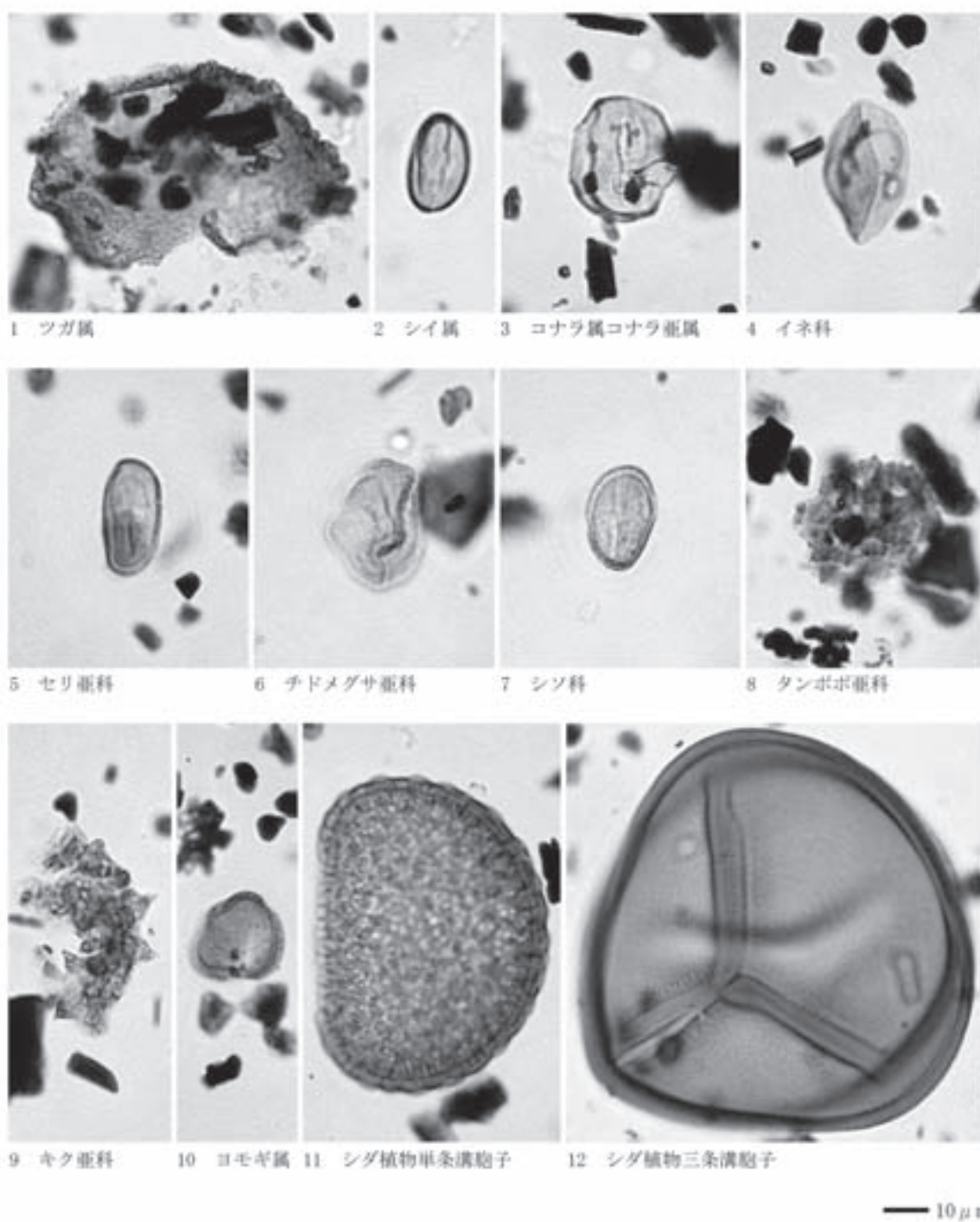
検出密度 (単位: ×100個/g)

分類群	学名	地点・試料														A' 地点					B 地点					C 地点				
		A 地点														A' 地点					B 地点									
		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	1	2	3	4	5													
イネ	<i>Oryza sativa</i>	75	51	57	58	48	15	7	14							6														
ムギ類 (穎の表皮細胞)	<i>Hordeum-Triticum</i>	6																												
ヨシ属	<i>Phragmites</i>	19		7		7											6					22								
ススキ属型	<i>Miscanthus</i> type	12	7	7	7	7	15	14	7	15							6				13	7	22	7	7					
タケ亜科	Bambusoideae	193	181	306	413	690	808	756	865	757	906	764								468	839	700	1025	985						923

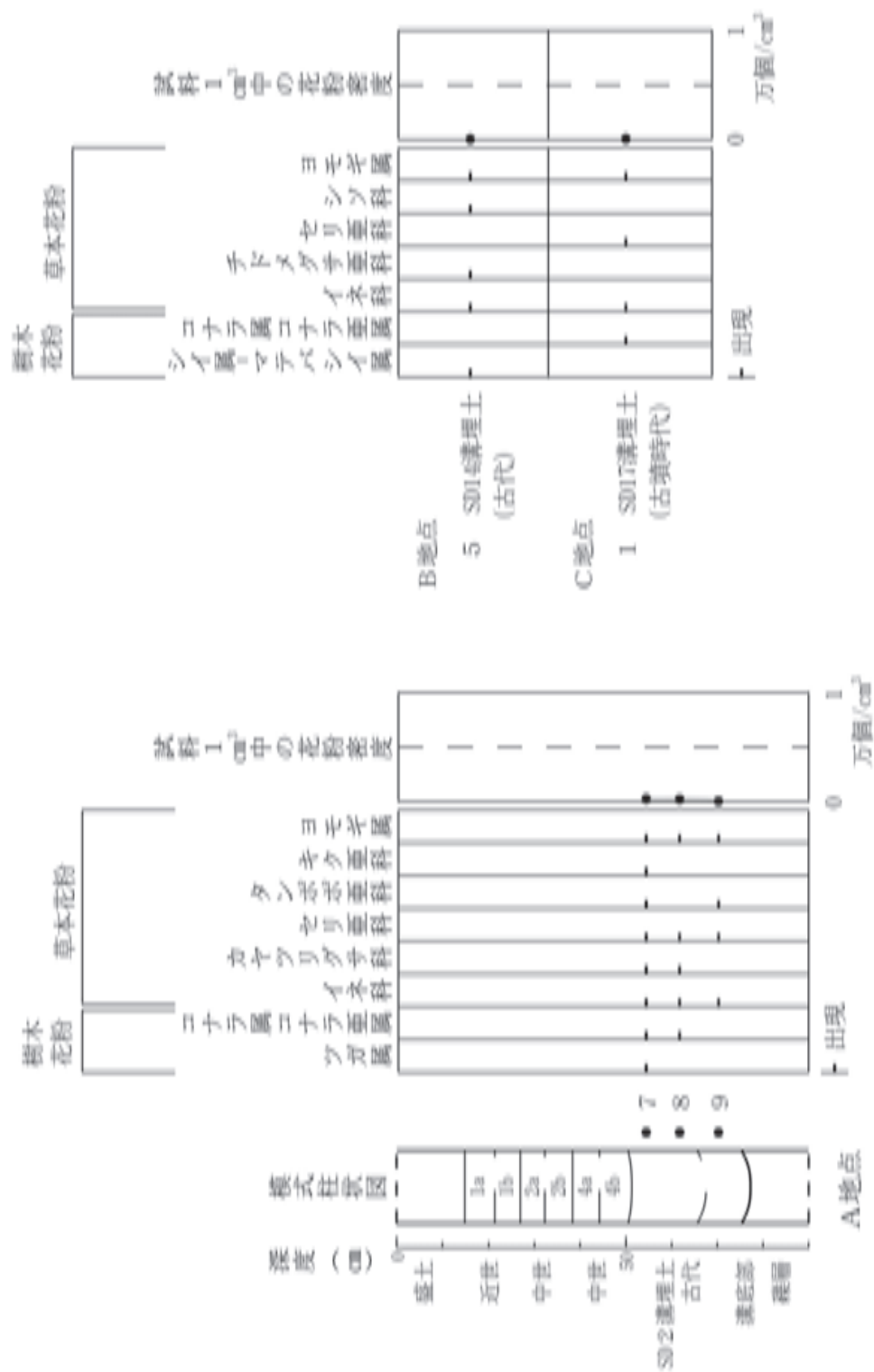
推定生産量 (単位: kg/㎡・cm) : 試料の仮比重を1.0と仮定して算出

イネ	<i>Oryza sativa</i>	2.19	1.49	1.67	1.71	1.42	0.43	0.21	0.42								0.19				0.43										
ヨシ属	<i>Phragmites</i>	1.18		0.45		0.44															1.39										
ススキ属型	<i>Miscanthus</i> type	0.15	0.09	0.09	0.09	0.09	0.18	0.18	0.09	0.18											0.16	0.09	0.27	0.09	0.09						
タケ亜科	Bambusoideae	0.93	0.87	1.47	1.98	3.31	3.88	3.63	4.15	3.63	4.35	3.67									2.24	4.03	3.36	4.92	4.73						

表 4 龍毛遺跡第 2 次調査におけるプラントオパール分析結果



第 66 図 龍毛遺跡第 2 次調査における花粉・胞子



第 67 図 龍毛遺跡第 2 次調査における花粉ダイアグラム

分類群		A 地点			B 地点	C 地点
学名	和名	7	8	9	5	1
Arboreal pollen	樹木花粉					
<i>Tsuga</i>	ツガ属	1				
<i>Castanopsis-Pasania</i>	シイ属-マテバシイ属				1	
<i>Quercus</i> subgen. <i>Lepidobalanus</i>	コナラ属コナラ亜属	1	1			2
Nonarboreal pollen	草本花粉					
Gramineae	イネ科	6	2	1	1	2
Cyperaceae	カヤツリグサ科	1	1			
Hydrocotyloideae	チドメグサ亜科				1	
Apioideae	セリ亜科	3	1	1		1
Labiatae	シソ科				1	
Lactucoideae	タンポポ亜科	1		1		
Asteroideae	キク亜科	1				
<i>Artemisia</i>	ヨモギ属	24	22	6	2	4
Fern spore	シダ植物孢子					
Monolate type spore	単条溝孢子	14	23	9	8	10
Trilate type spore	三条溝孢子	10	5	1	1	1
Arboreal pollen	樹木花粉	2	1	0	1	2
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉	0	0	0	0	0
Nonarboreal pollen	草本花粉	36	26	9	5	7
Total pollen	花粉総数	38	27	9	6	9
Pollen frequencies of 1cm ³	試料1cm ³ 中の花粉密度	2.6	2.2	7.2	4.8	7.2
		$\times 10^{-2}$	$\times 10^{-2}$	$\times 10^{-2}$	$\times 10^{-2}$	$\times 10^{-2}$
Unknown pollen	未同定花粉	5	4	3	2	3
Fern spore	シダ植物孢子	24	28	10	9	11
Helminth eggs	寄生虫卵	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)
Digestion rimeins	明らかな消化残渣	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)
Charcoal fragments	微細炭化物	(++)	(++)	(++)	(+)	(++)

表 5 龍毛遺跡第 2 次調査における花粉分析結果

6) 小 結

龍毛遺跡について

第2次調査区と第3・4次調査区では遺跡の内容が異なっている。前者は水田の可能性のある土層が検出されているが、集落の痕跡は認められなかった。後者は柱穴や土坑からなる中世の集落跡であった。最終地山面の標高を見ると、第2次調査区では46.1～46.4m、第3次調査区が46.2～46.6m、そして第4次調査区が46.7mで、標高差は小さいが順次高くなっている。ただし、第2・3次調査区の上に第1次調査区があって、その詳細は不明であるが、圃場整備事業によって地下げされていることから、おそらく周辺で最も高い尾根線上であったものと思われる。そこから東は緩やかに下降して黒川左岸のハカノ本遺跡まで遺跡が連続する。一方、第2次調査区の西側では隣接して道ノ本遺跡が調査されていて、これも詳細は不明だがこの遺跡付近で圃場整備事業によって1.5mほどの段差が形成されているが、これは本来の地形を反映している。したがって、第2次調査区は第1次調査区・道ノ本遺跡に挟まれた幅70～200mの谷部にあたる。各調査区の標高がさほど変わらないのに、遺跡の内容が大きく異なっていた原因はこの旧地形に求められよう。この第2次調査区の旧地形は、浅く奥行きのない谷であったようである。溝を掘削してその谷の水流を管理すれば、水田として利用するには適した地形であったと思われる。

第4次調査区は狭小な面積ではあったが、遺構面が浅く、集落の様を呈していた。出土した瓦器碗は高台が退化した形態から13世紀後半を中心とする時期に比定できる。表面採集の小片であるが、白磁口禿皿も時期的に相応しい。第3次調査も遺構が疎であったが、同じような時期の遺物を出土していることから、この一帯に短い期間に集落が営まれたと思われる。

出土石製品について

時期 プライマリーな出土状態ではなく、また縄文～弥生時代のまとまった土器もないために厳密な帰属時期は判然としないが、器種や組成によって推測してみる。

まず、扁平打製石斧・横刃削器は、豊前地域のみならず九州全域で縄文時代後・晩期に多出することが知られている。また、錐部周辺にのみ若干の二次加工を施して製作する粗製の石錐が14点出土しているが、大分

器 種 \ 石材	姫 島 産 黒 曜 石	腰 岳 系 黒 曜 石	針 尾 系 黒 曜 石	金 山 産 サ ヌ カ イ ト	チ ヤ ー ト	玉 髓	メ ノ ウ	緑 泥 片 岩	合 計
石 鏃	2 1.9								2 1.9
石 錐	10 16.7	2 6.0			2 9.2				14 31.9
削 器	4 80.2								4 80.2
搔 器			1 2.3						1 2.3
背付石器	1 1.7								1 1.7
打製石包丁								1 87.5	1 87.5
打製石斧								1 31.0	1 31.0
二次加工剥片	1 2.9								1 2.9
使用痕剥片	3 3.2								3 3.2
剥 片	4 9.5		1 0.6			1 1.4			6 11.5
調整剥片	1 0.3			1 0.6					2 0.9
碎 片	2 0.8								2 0.8
分割礫・礫片					1 7.3		1 0.9		2 8.2
合 計	28 118	2 6.0	2 2.9	1 0.6	3 16.5	1 1.4	1 0.9	2 119	40 265.0

表6 龍毛遺跡出土石製品器種別・石材別組成表

市若宮八幡宮遺跡などの所見からすると縄文時代晩期から弥生時代早期に認められる傾向である。さらに、脚部が内側に屈曲する形態の石鏃もやはり縄文時代後・晩期に見られるタイプのものである。そして、福岡県側の豊前地域で姫島産黒曜石が多用されるようになるのは、縄文時代後期以降の様相である。以上のことから、本遺跡の石器群は縄文時代晩期のほぼ一括の資料だと考えられる。

石材・器種組成 器種的には、二次加工・使用痕剥片を含め製品が28点、(調整剥片を含めて)剥片・碎片が10点、残りは礫片・分割礫各1点となっている。即ち、石核が全く出土しておらず、全石材において剥片剥離の痕跡が見受けられない。製品では石錐の多出が目立つ。

出土石器40点中、その石材で最も多いのは28点で70%を占める姫島産黒曜石である。他石材は全て3点未満に過ぎない。姫島産黒曜石では剥片・碎片も揃っており、剥離作業は認められなくても、剥片レベルでの搬入と製品の製作が行なわれたと考えられる。針尾島系黒曜石は搔器と剥片が各1点出土しており、少なくとも製品搬入後の若干の再加工が想定される。越岳系黒曜石は石錐2点で、剥片石器の製品搬入が行なわれたと考えられる。金山産サヌカイトと玉髓は剥片各1点の出土で、剥片石器の製作ないしは再加工が想定される。緑色片岩は横刃削器・扁平打製石斧各1点の出土で、大型石器の製品搬入である。チャートは石錐2点と分割礫1点があるが、分割礫が石核のブランクだとすると、剥片剥離から石器製作までの一貫工程が行なわれた可能性がある。

石錐について 形態・加工・素材から、大きく二分できる。第1は第 図14～18で、やや分厚い幅広剥片を素材とし、片側縁(15～17)ないしは両側縁(14・18)に抉入状の整形を施して先端部を形成するもので、腹面には平坦剥離を施すものもあり、比較的丁寧な加工である。また16を除いて錐部は1箇所固定される。第2は素材の縁辺に沿って割合簡便な加工で先端部を形作るもので、素材の変形度が小さい。また、21・25を除き、2箇所の錐部が認められ、先端部の欠損により錐部を安易に変更していったものと推察される。腰岳系黒曜石のみは第1グループに限定される。

一方、14～16・19・20・25は、バルブ部分の厚みを嫌ってか、打面付近を除去すると共に、25以外は切断によって長さを2.0cm内外に調節しているようで、両グループの製作技術は共通基盤上にあると考えられる。

IV. おわりに

以上で3遺跡の報告を終える。佐井川河畔から龍毛遺跡第4次調査区までは約600mの距離を隔てるが、そのほぼ全面に遺跡が所在した。さらに東は黒川に至る約300mの間にハカノ本遺跡があって、黒川の氾濫原でわずかの間は遺跡が途絶えるが、すぐにまた安雲山田遺跡が展開している。およそ佐井川から東へ1.8kmまでの路線内はほぼ全面的に遺跡が所在していたこととなる。路線外では、安雲山田遺跡のすぐ南の丘陵に線刻壁画をもつ町史跡山田古墳、垂水廃寺へ瓦を供給した照日窯跡群・山田窯跡群などが、そしてやや離れて同じく垂水廃寺への供給窯で、階段式登窯の友枝瓦窯（国史跡）がある。報告中でもあったように、近年の圃場整備事業に伴って行われた発掘調査など、すべての報告が出そろえば、地域の歴史がずいぶん明らかとなるのであろう。今年度報告の「ハカノ本遺跡」（『東九州自動車道関係埋蔵文化財調査報告』-7-）の報告で旧地形図に周辺の遺跡分布を図示しているので参照されたい。

縄文～弥生時代の遺構はほとんど確認できなかったが、調査地のほぼ全域から縄文時代に遡る可能性のある石製品等がかなりの量出土している。ただ、確実な生活遺構は認められず、土器もほとんど見られないことから、この付近を狩猟の場として活発に行動していたものと思われる。

古墳時代の遺構としては緒方古墳群および七ツ枝遺跡2次調査の竪穴住居跡などがあげられる。この報告にかかる調査では古墳の痕跡をとらえた程度であるが、町教委は大破した古墳を1基調査している。『福岡県遺跡等分布地図』ではこの近辺に緒方1・2号墳の2基の古墳が記されるのみであるが、群集墳の盛行する時期に属し、もっと存在したのであろう。佐井川右岸は早くから集落化したようだが、まだまだ埋もれた古墳があるものと思われる。

古代の遺跡は今回の調査でははっきりとしないが、龍毛遺跡の溝からは8世紀代の土器が一定量出土しているので、近くに集落があったものと思われる。小規模な谷水田も利用していたようである。

さて、緒方古墳群中には近世墓が存在し、江戸後期の文人で大庄屋を務めた曾木墨莊の一族の墓地と伝えられてきた。調査担当者自身、不明を恥じるしかないが、教科書に紹介される田能村竹田がこの豊前の地に1月逗留したという話は寡聞にして知らず、墨莊が竹田の親友とも呼べる人物であったということもつゆ知らぬことであった。ましてや頼山陽との出会いなどは、『豊前市史』や『新吉富村誌』を何度も開いたが、そこに紹介されている「曾木墨莊」という項目を読んだことがなかった。その墨莊を研究し、「天随忌」を主宰して顕彰活動をされていた橋本寛和氏の存在を知り、在野の研究者の重要性を改めて認識させられる機会となった。費用と時間をかけて、目の前の遺跡を調査することを職業とする我々には、存在するか否かもわからないモノを、自分の時間と費用を削って探し回り、公にしようとする地道な無私の活動には想像も及ばない。あらためて、道半ばで急逝された橋本和寛氏のご冥福をお祈りします。



曾木墨莊の墓碑

図 版



1. 調査区全景
(南東上空から)



2. 同上空から

1. 2号墳現況
(南西から)



2. 5トレンチ北壁
土層 (南から)



3. 3号墳周溝
土器出土状況
(北東から)





1. 1号土坑
(南西から)



2. 2号土坑
(北東から)



3. 3号土坑
(北東から)

1. 4号土坑
(北西から)



2. 5号土坑
(北西から)



3. 6号土坑
(北西から)





1. 7号土坑
(北から)



2. 8号土坑
(北東から)



3. 9号土坑
(南西から)

1. 10号土坑検出時（北東から）
2. 10号土坑（南東から）



3. 南西端土坑群（北西から）



4. 南西端土坑群（東から）





1. 2号溝状遺構
(南から)



2. 2号溝状遺構
完掘後(西から)



3. 3号溝状遺構
全景(南西から)

1. 3号溝状遺構
1区（西から）



2. 3号溝状遺構2区・
3区南半（北西から）



3. 3号溝状遺構3区
南半（北東から）





1. 3号溝状遺構3区
南半（北から）



2. 3号溝状遺構3区
北半（北西から）



3. 4号溝状遺構
（西から）

1. 石敷き遺構
(南東から)



2. 石敷き遺構南西端
(北東から)



3. 石敷き遺構完掘後
(北東から)

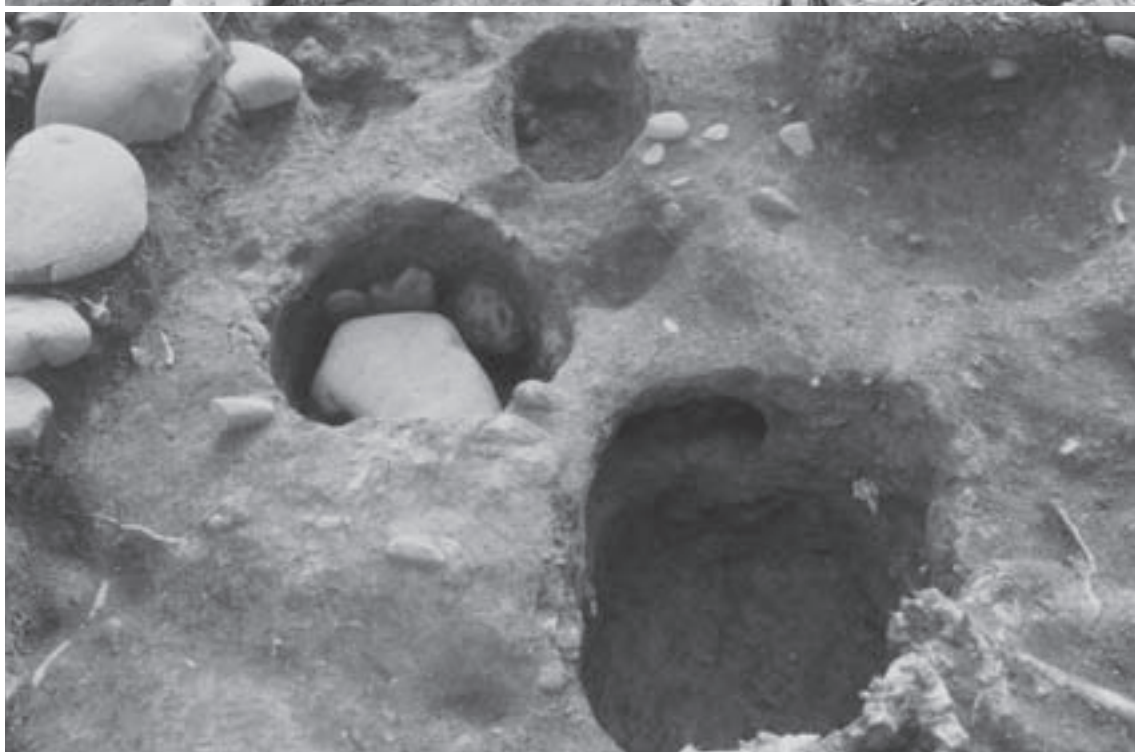




1. 曾木家墓地発掘前
(北西から)



2. 曾木家墓地発掘後
(北西から)

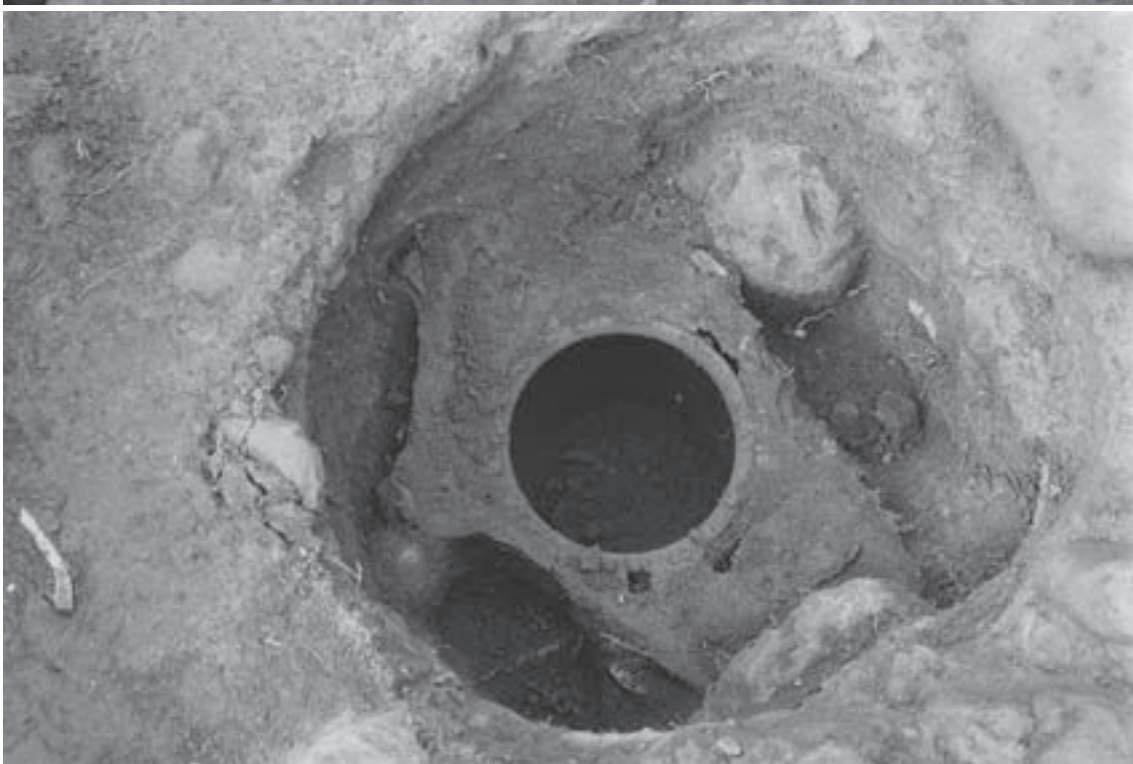


3. 1～3号墓
(北から)

1. 2・3号墓検出
状況（北西から）



2. 2号墓蓋石除去
後（北東から）

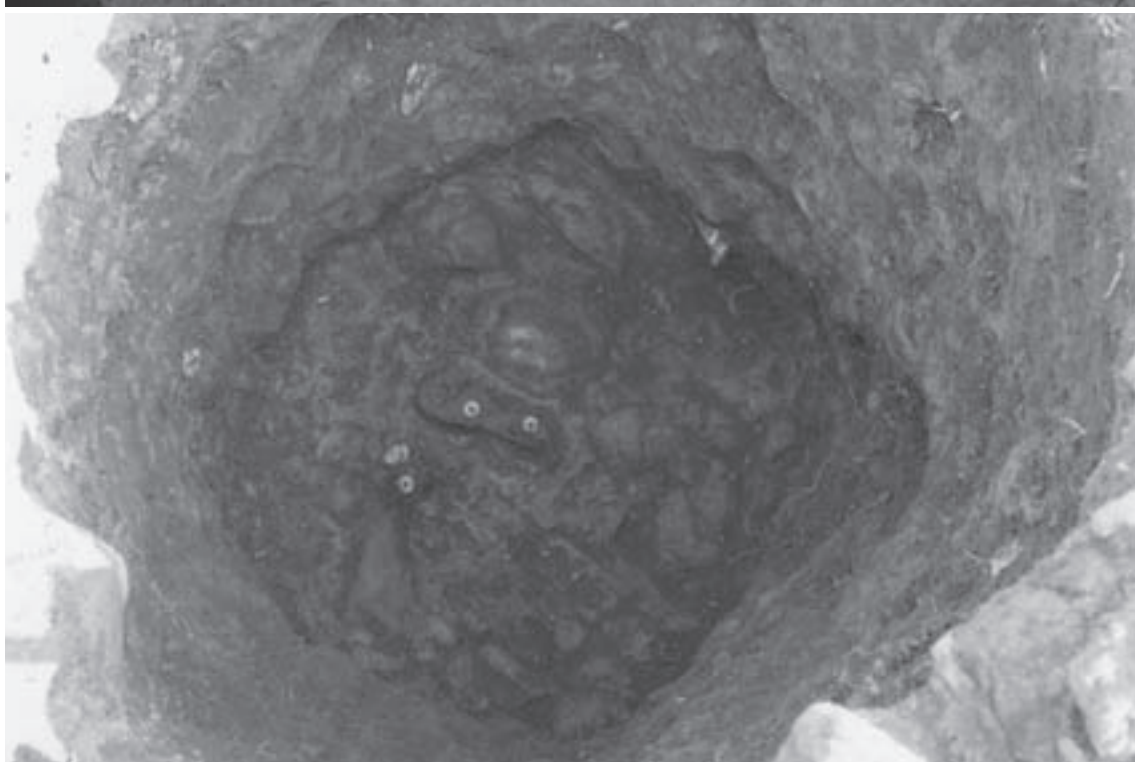


3. 4号墓（仮称）検
出状況（東から）

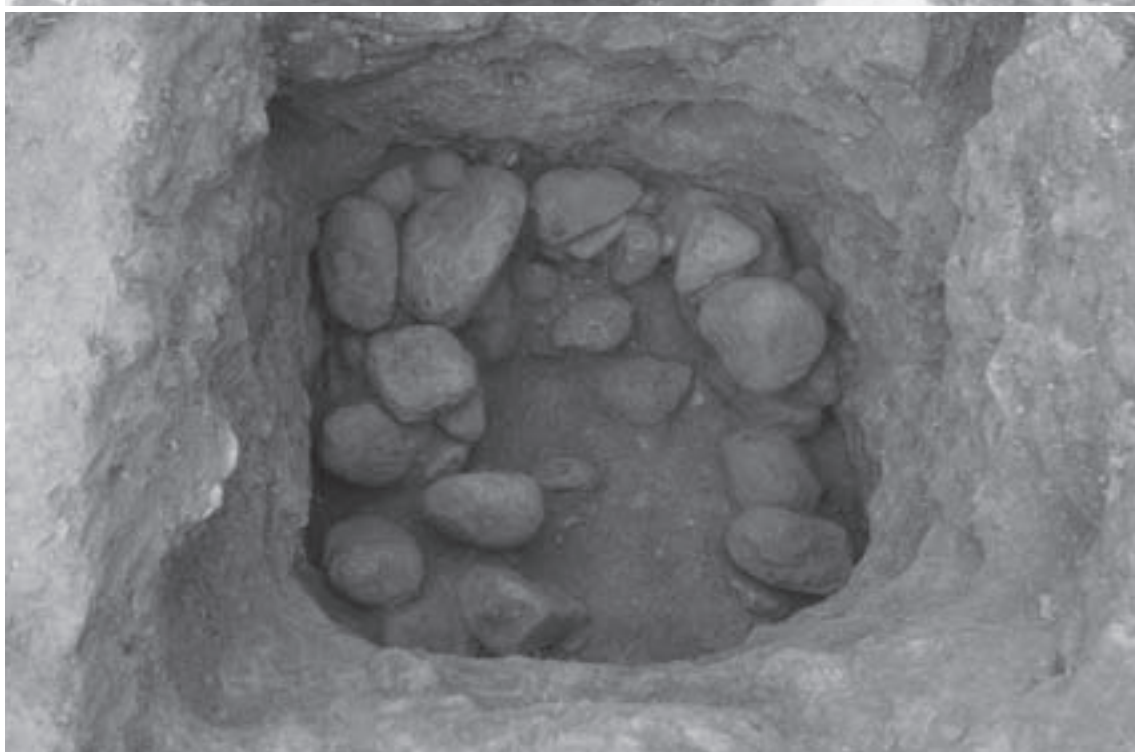




1. 5号墓礫群検出
状況（東から）



2. 5号墓床面
（北西から）



3. 6号墓礫群検出
状況（東から）

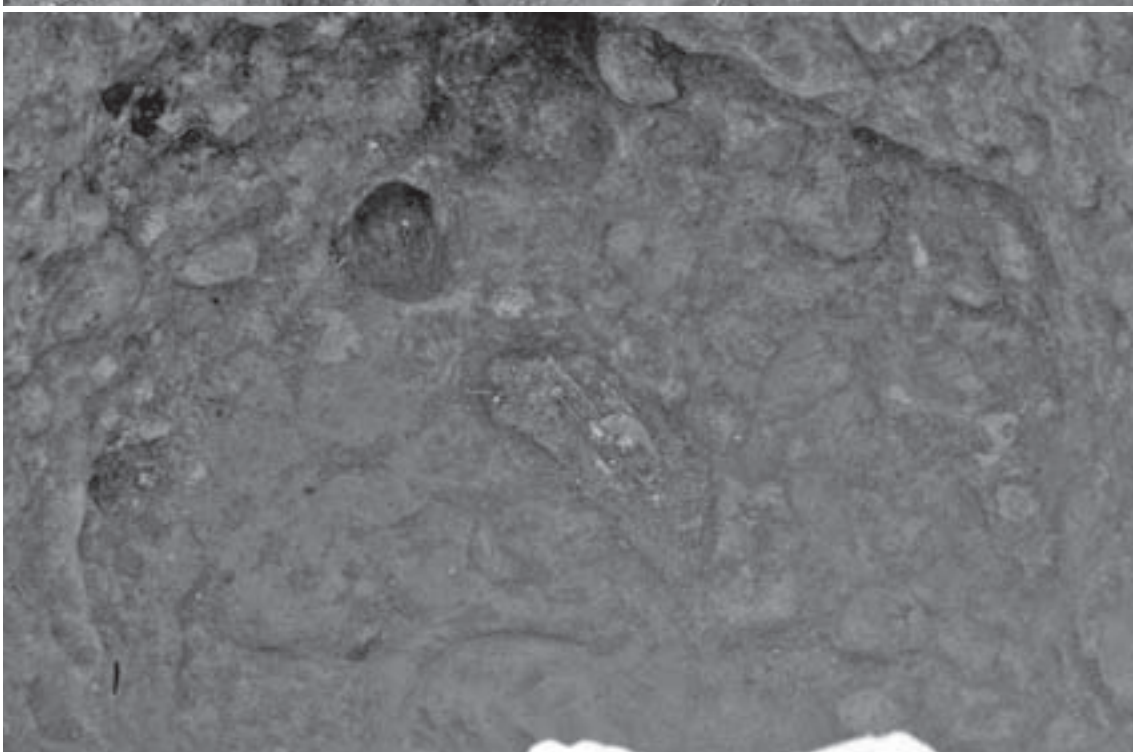
1. 6号墓床面
(西から)



2. 7号墓礫群検出
状況(北東から)



2. 7号墓床面
(北西から)





1. 8号墓
(北西から)



2. 8号墓床面
(北西から)



3. 火葬骨壺出土状況
(北西から)

1. 現石垣
(南東から)

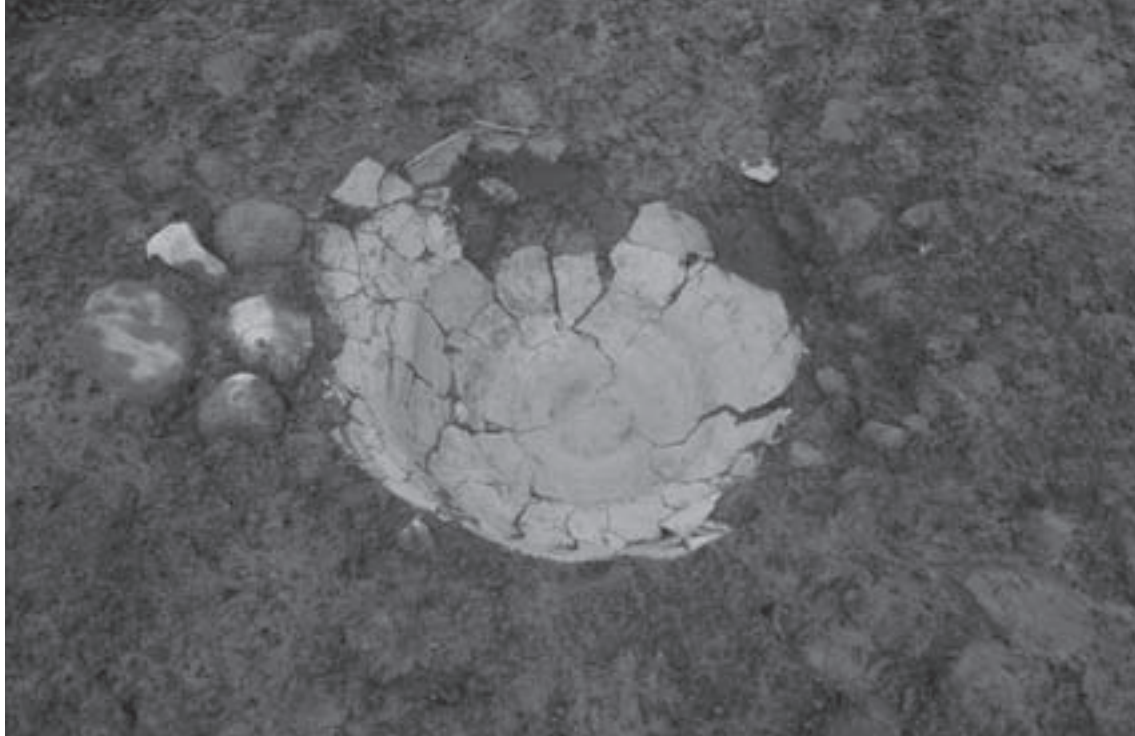


2. 古石垣
(東から)

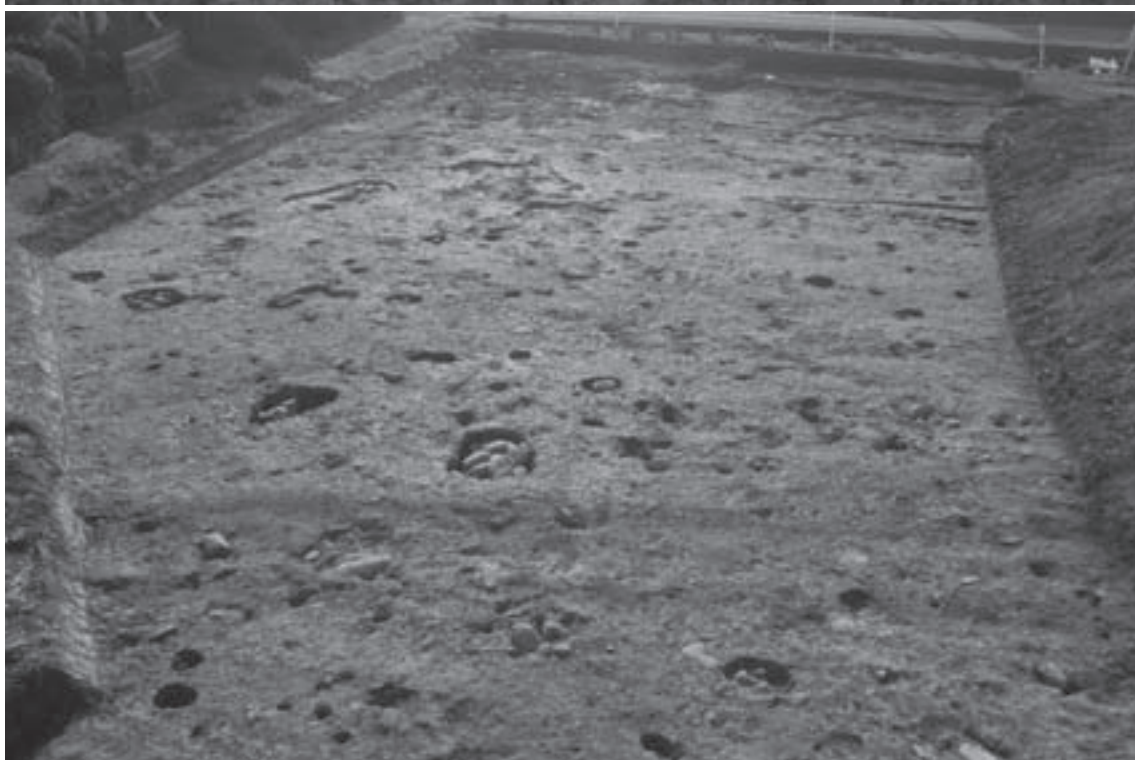


3. 新旧石垣間の状況
(北東から)





1. 調査区南東端の
埋葬（南東から）



2. 調査区東端部北半
（北西から）

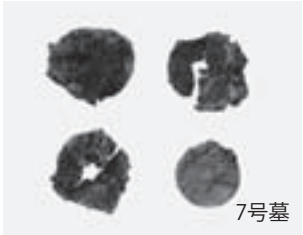
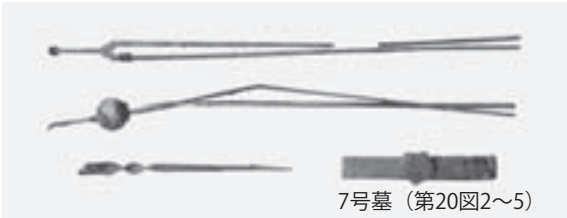
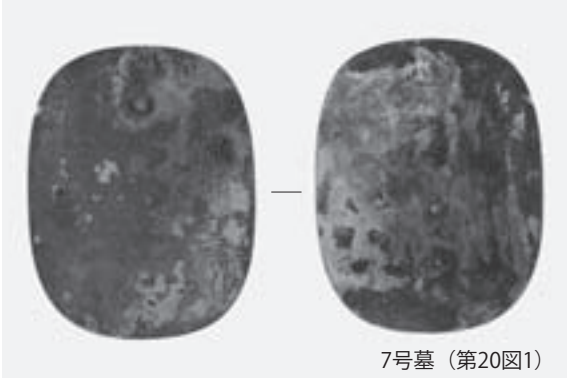
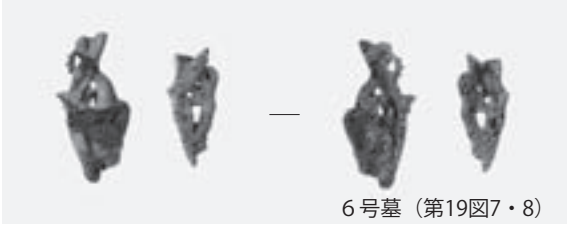
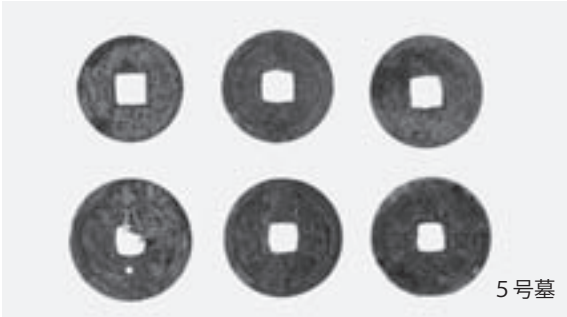


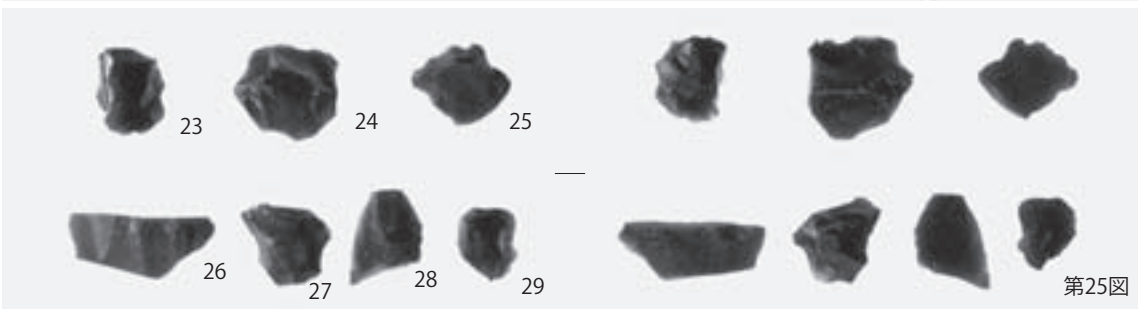
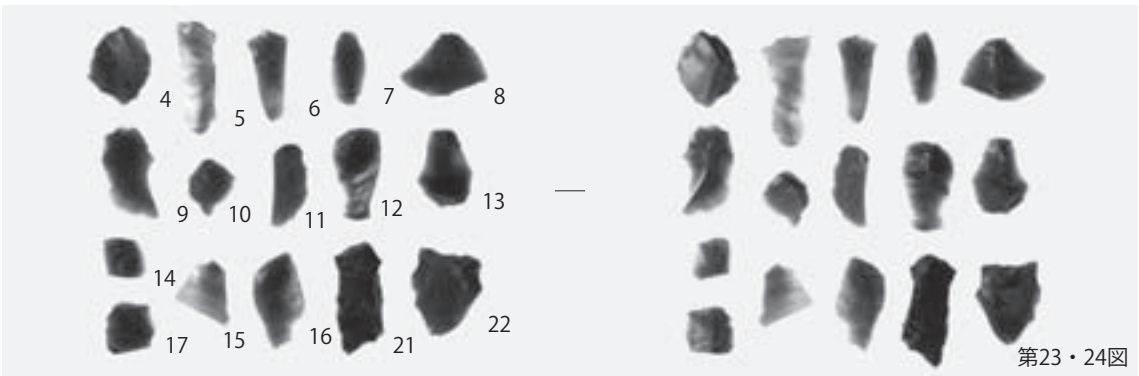
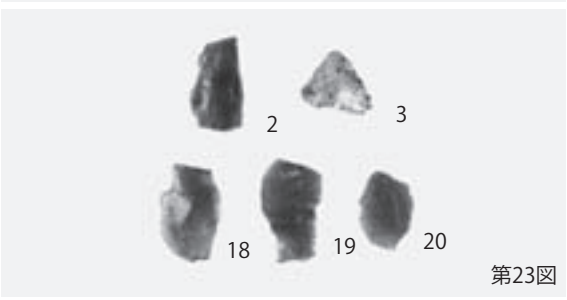
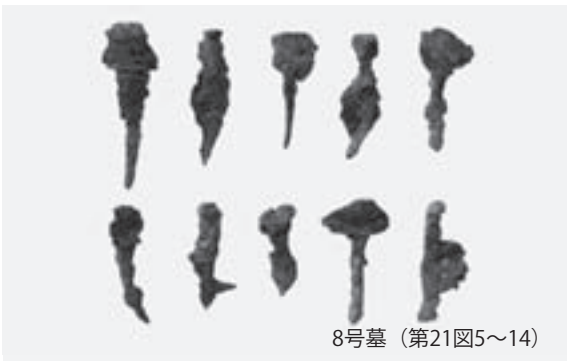
3. 査区東端部南半
（北西から）



出土遺物 1









1. 第2次調査区全景
(南東上空から)



2. 同 (北西上空から)

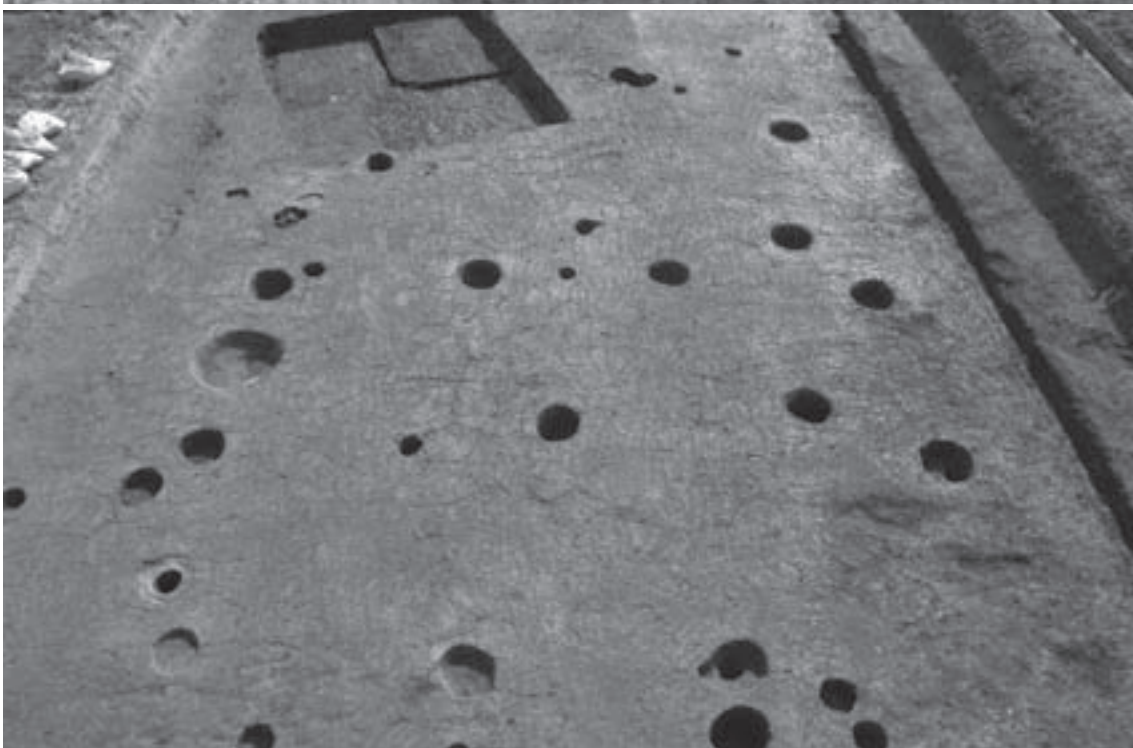
1. 1号竪穴住居跡
(南から)



2. 同カマド付近
(南西から)



3. 1・2号掘立柱
建物跡
(北西から)





1. 3号掘立柱建物
跡（南西から）



2. 1号溝状遺構
（北から）



第37図1



第37図3



第36・37図



1. 第4次調査区
全景
(東上空から)



2. 第4次調査
1区全景
(上空から)

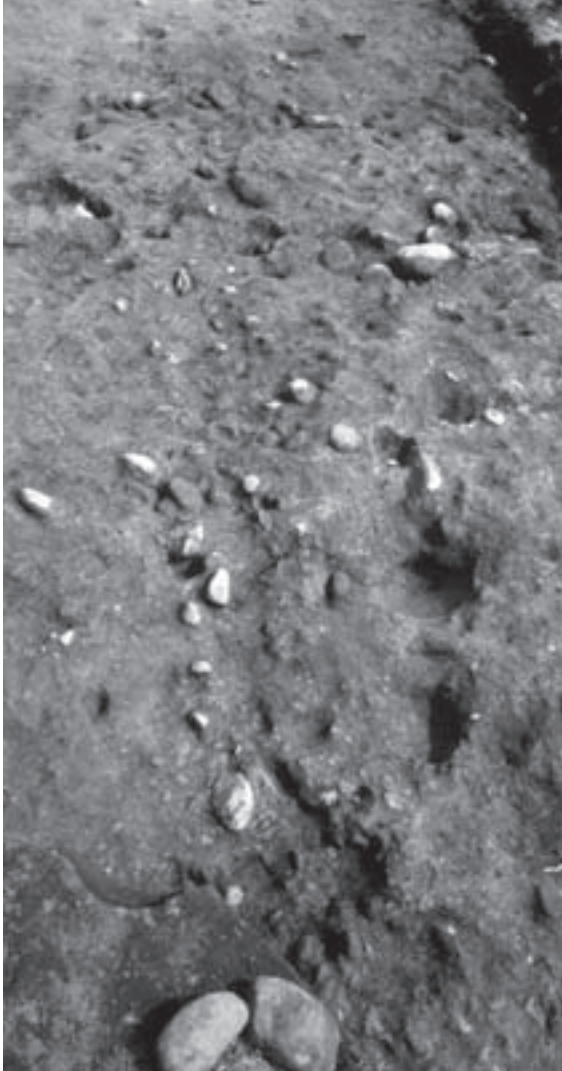


1. 1区2号溝状遺構検出状況
(北東から)
2. 同完掘後
(南西から)



3. 1区3号溝状遺構検出状況
(北東から)
4. 同完掘後
(北東から)

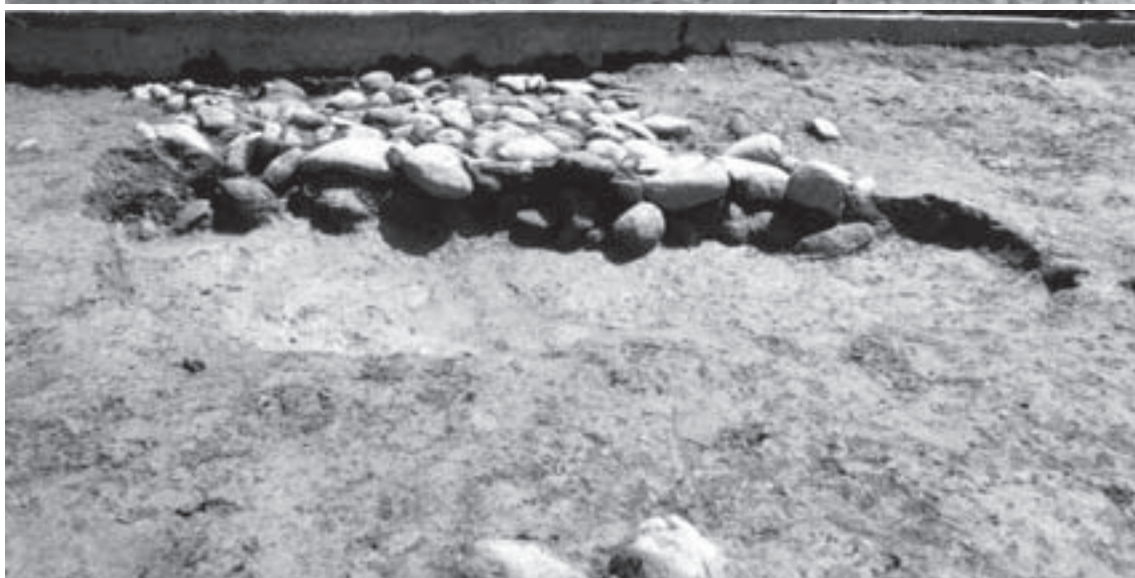
1. 2区1号溝状遺構
検出状況
(北西から)
2. 同完掘後
(北西から)

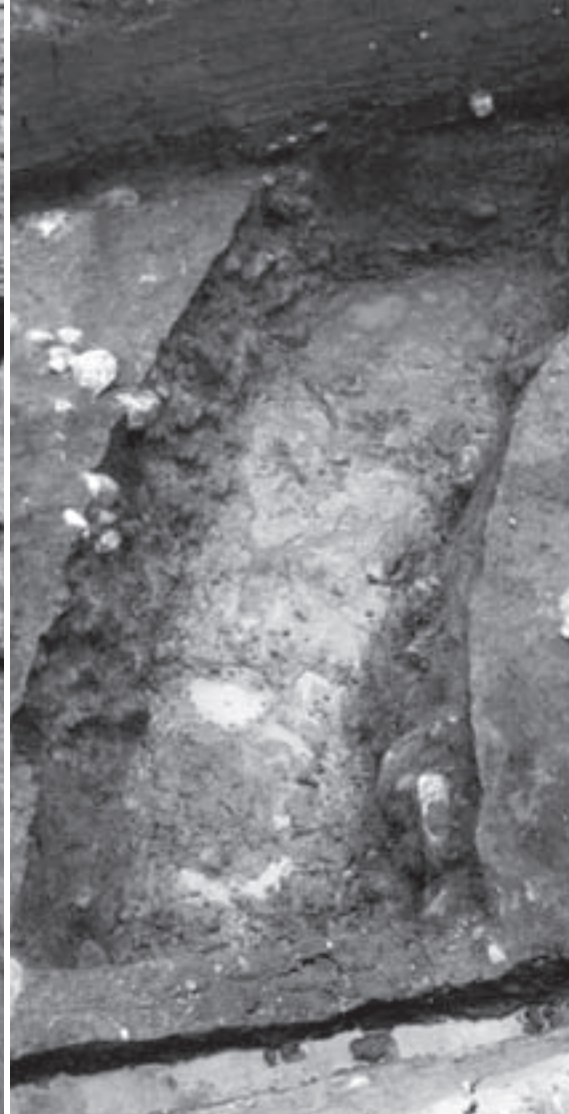


3. 2区3号土坑
検出状況
(北西から)



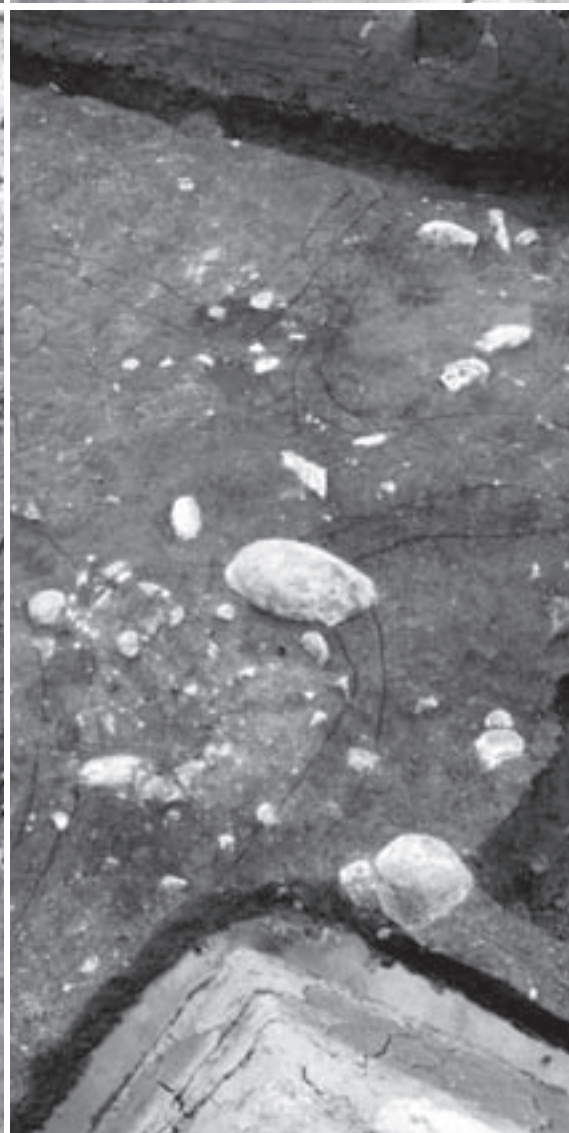
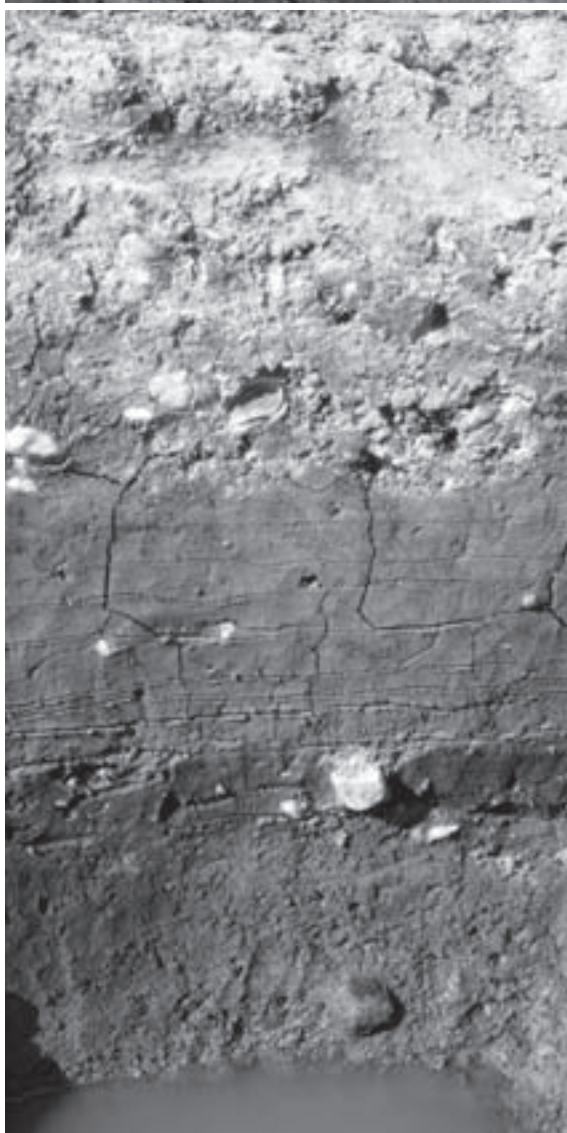
4. 同半截状況
(北西から)





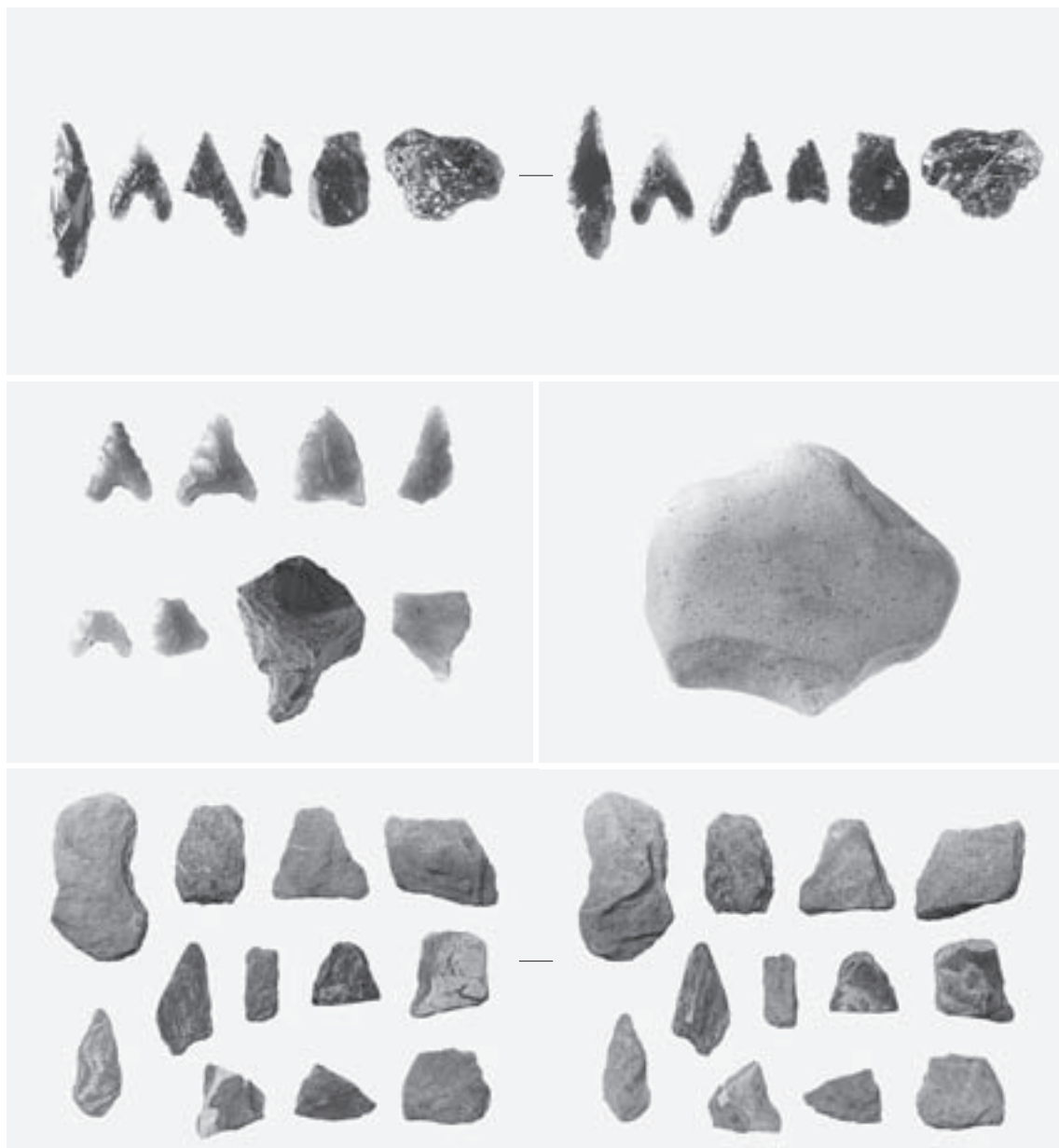
1. 4区3号溝状遺構
(北東から)

2. 4区4号溝状遺構
(北から)



3. 4区4号溝状遺構
付近土層
(北から)

4. 4区西端付近
「畦畔」(北東から)



第4次調査区出土遺物

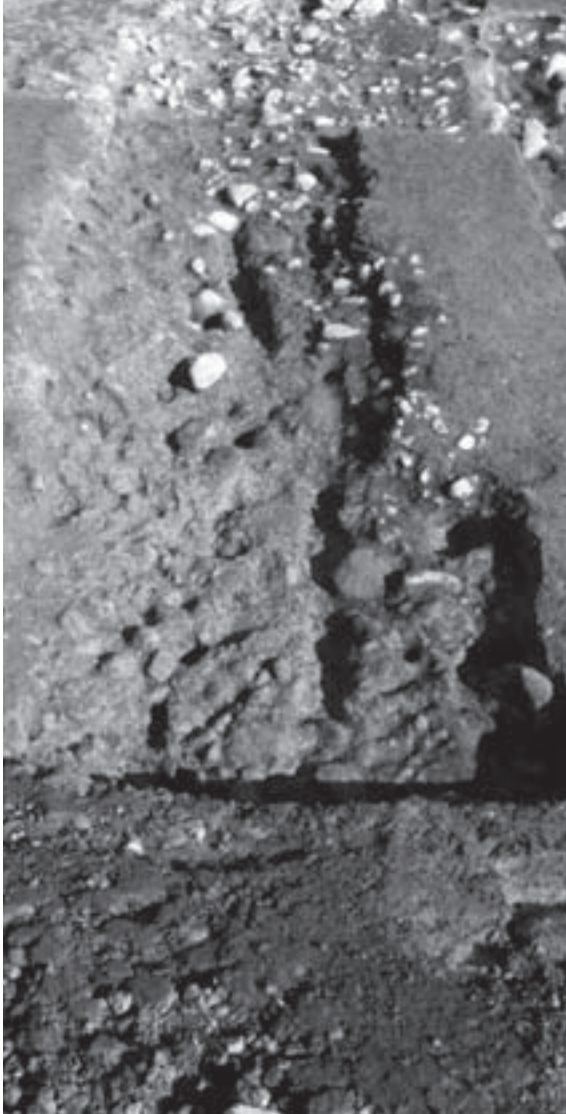


1. 第2次調査区西端
付近全景
(北西から)



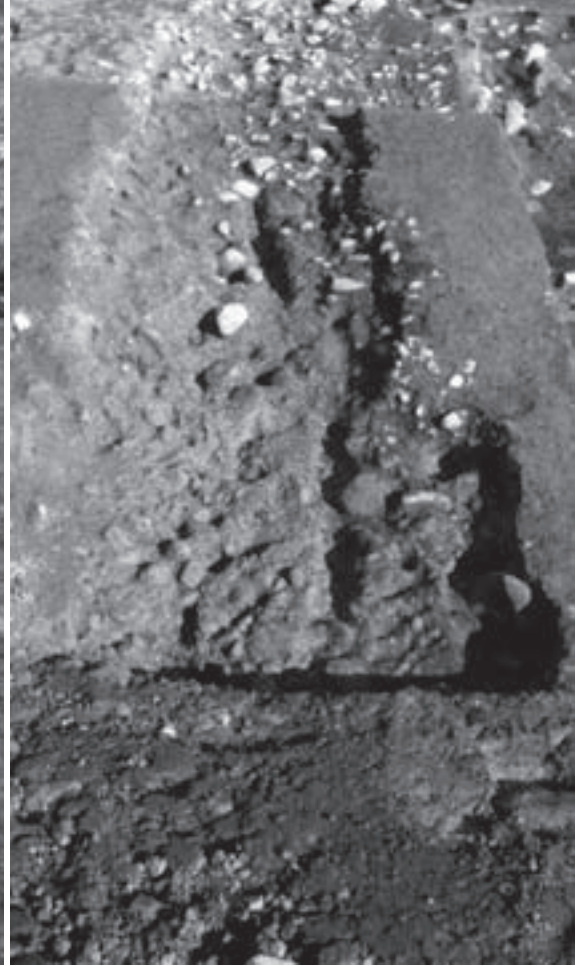
2. 同(上空から)

1. 10号溝状遺構
(南東から)
2. 12号溝状遺構
(南西から)

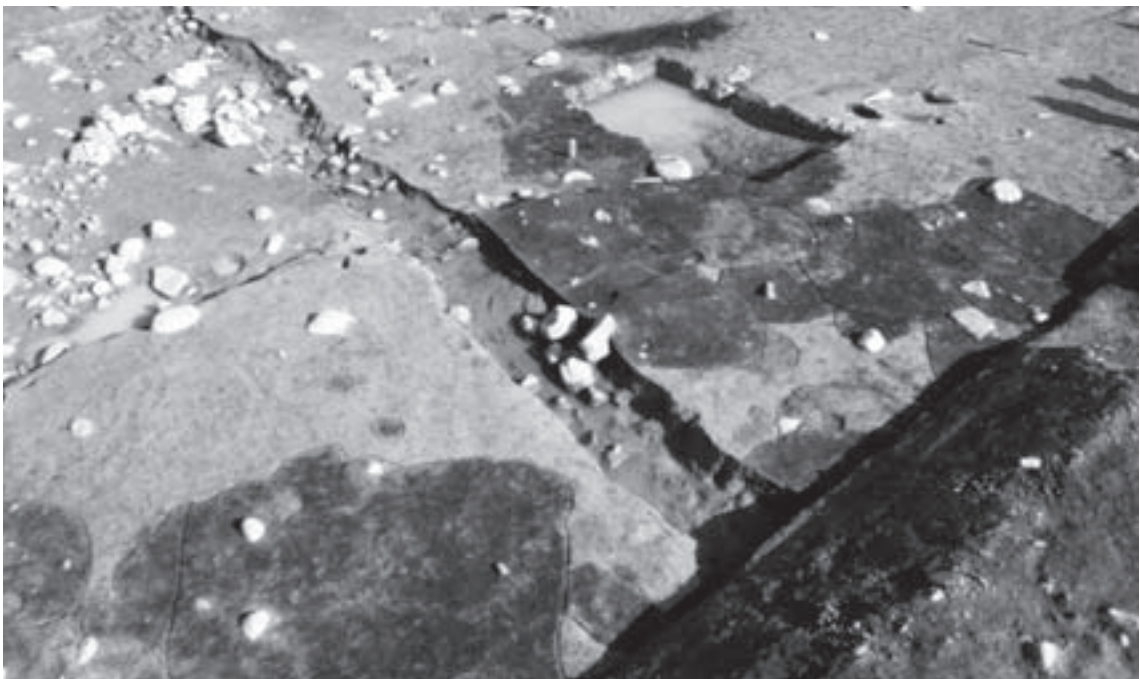


3. 1号溝状遺構
(北東から)
4. 2号溝状遺構
北東部
(南西から)

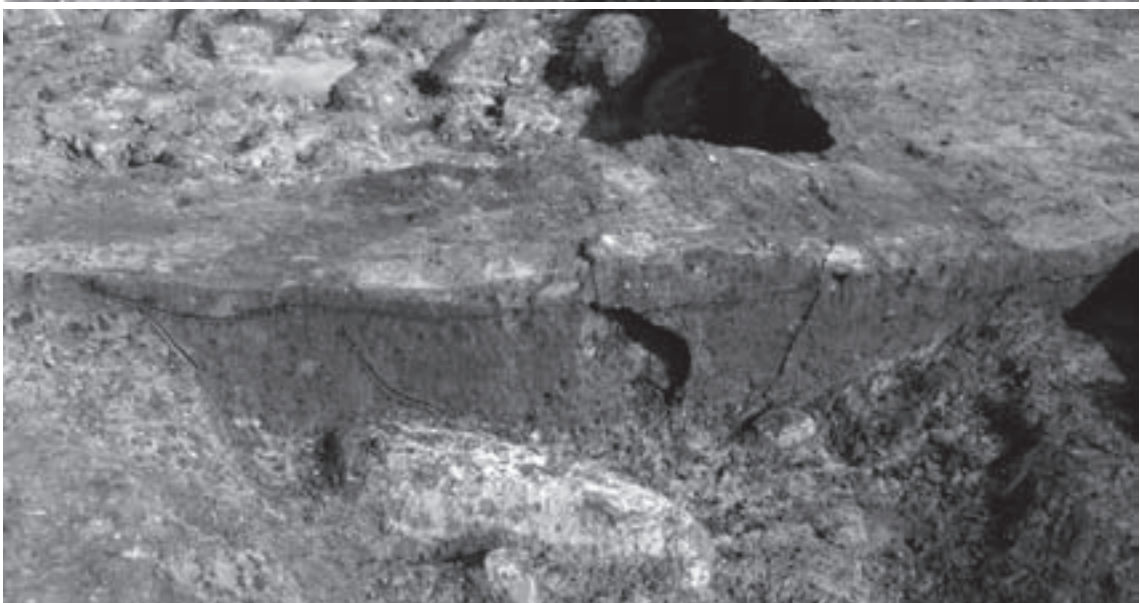




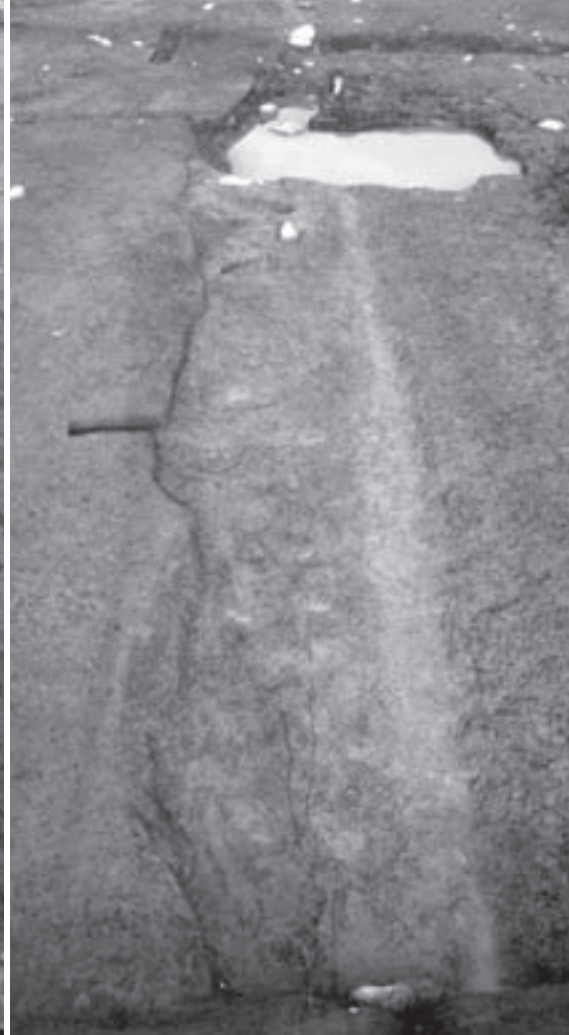
1. 2号溝状遺構南西部検出状況
(南西から)
2. 同完掘後
(南西から)



3. 2号溝状遺構南西部周辺
(北西から)



4. 2号溝状遺構土層
(南西から)

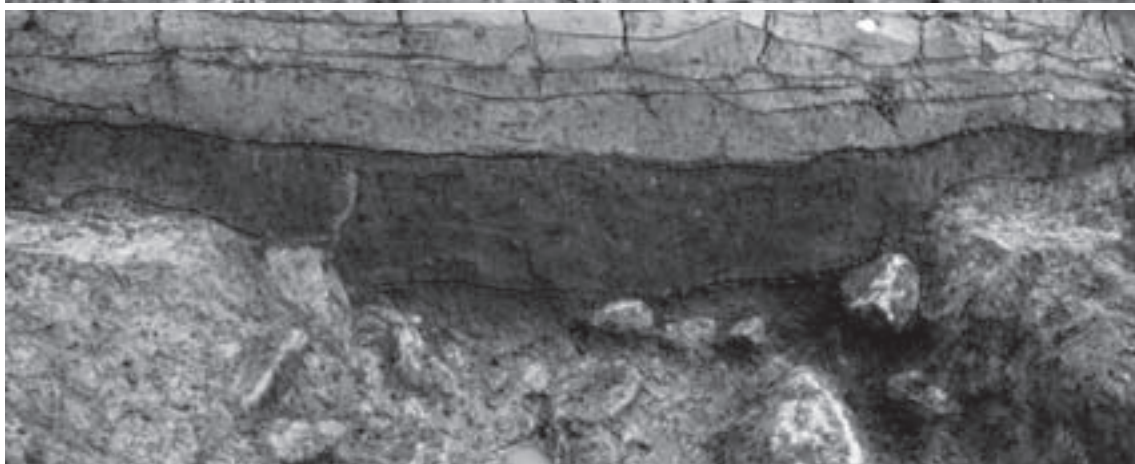


1. 14号溝状遺構
検出状況
(南東から)

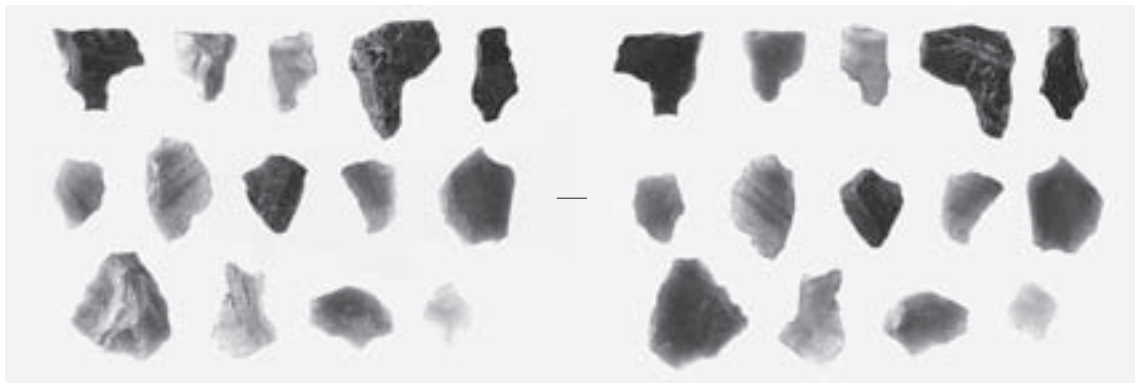
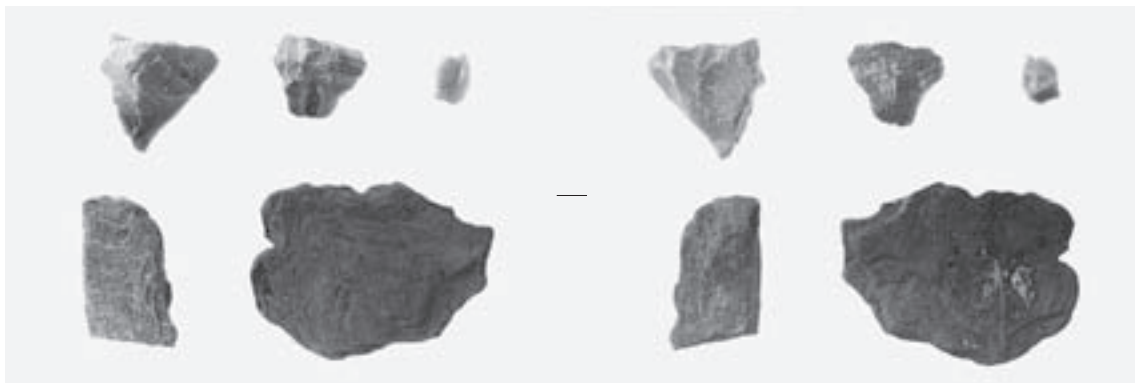
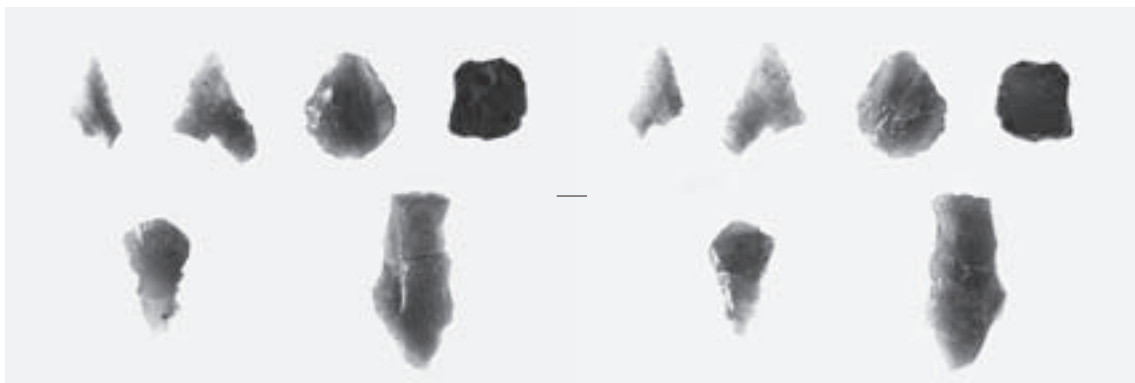
2. 同完掘後
(南東から)



3. 調査区北半部
全景(北西から)



4. 2号溝状遺構
北東端土層
(南西から)



第2次調査出土遺物

1. 第3次調査区全景
(北東上空から)



2. 同 (上空から、
上が北)





1. 第3次調査区
全景（北西から）



2. 1号土坑
（南から）



3. 2号土坑
（北西から）

1. ピット遺物出土状況
(南東から)



2. 溝状遺構
(東から)



3. 土層堆積状況
(東から)





第3次調査出土遺物

1. 第4次調査西区
(南東から)



2. 同(北西から)



3. 2号土坑
(北から)





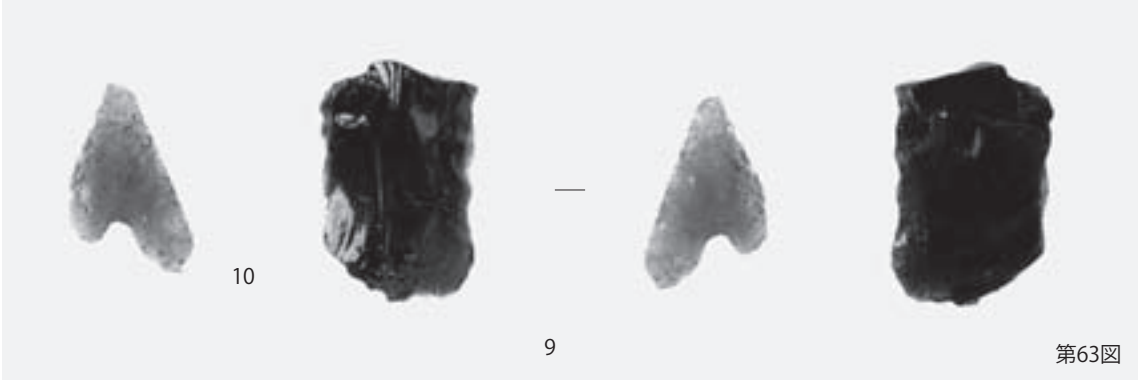
1. 柱穴 P1 土器出土状況（東から）



2. 柱穴 P2 土器出土状態（南から）



3. 第 4 次調査東区
全景（北東から）



第 4 次調査出土遺物

報告書抄録

ふ り が な				おがたこふんぐん		ななつえいせき		りゅうげいせき				
書 名				緒方古墳群		七ツ枝遺跡		龍毛遺跡				
副 書 名												
巻 次												
シ リ ー ズ 名				東九州自動車道関係埋蔵文化財調査報告								
シ リ ー ズ 番 号				第8集								
編 著 者 名				飛野博文 吉村靖徳 荻幸二 末永浩一 ほか								
編 集 機 関				九州歴史資料館								
所 在 地				〒838－0106 福岡県小郡市三沢5208－3 ☎0942－75－9575								
発 行 年 月 日				西暦2013年3月31日								
ふ り が な				ふ り が な		コード		北 緯	東 経	調 査 期 間	調査面積	調 査 原 因
所 収 遺 跡 名				所 在 地		市 町 村 遺跡番号						
お が た こ ふ ん ぐ ん				ふくおかけんちくじょうぐんこうげまち		40646	970033	33°	131°	2009. 12. 02	1000 m ²	東九州自動車道建設
緒 方 古 墳 群				福岡県築上郡上毛町				34′	8′	～		
お お あ ざ お が た				大字緒方389-1ほか				11″	11″	2010. 03. 26		
な な つ え い せ き				同大字緒方305ほか		33°	131°	2008. 01. 15	900 m ²			
七 ツ 枝 遺 跡 2 次						34′	8′	～		2008. 03. 18		
						46″	17″					
な な つ え い せ き				同大字緒方419-3ほか		33°	131°	2010. 04. 12	1500 m ²			
七 ツ 枝 遺 跡 4 次						34′	8′	～		2010. 08. 11		
						50″	14″					
り ゅ う げ い せ き				同大字緒方465-3ほか		33°	131°	2009. 09. 09	4000 m ²			
龍 毛 遺 跡 2 次						34′	8′	～		2010. 02. 12		
						46″	21″					
龍 毛 遺 跡 3 次				同大字緒方467		33°	131°	2012. 05. 15	600 m ²			
						34′	8′	～		2012. 07. 13		
						40″	29″					
龍 毛 遺 跡 4 次				同大字緒方485-2		33°	131°	2012. 11. 19	50 m ²			
						34′	8′	～		2012. 11. 20		
						39″	29″					
所 収 遺 跡 名				種 別		主な時代		主 な 遺 構		主 な 遺 物		特 記 事 項
緒 方 古 墳 群				古 墳		古 墳		古墳2基		須恵器		大庄屋曾木家の墓地
				墳墓		近世		土葬墓7基、火葬墓2基		土器・六道銭・刀子ほか		
				散布地		縄文・弥生				弥生土器・石製品		
七 ツ 枝 遺 跡 2 次				集落		古墳		竪穴住居跡1、掘立柱建物3		須恵器・土師器		
七 ツ 枝 遺 跡 4 次				散布地		縄文～中世		溝・「水田」		土器		
龍 毛 遺 跡 2 次				散布地		縄文～中世		溝・「水田」		土器		
龍 毛 遺 跡 3 次				集落		中世		土坑・柱穴		土器・鉄器		
龍 毛 遺 跡 4 次				集落		中世		土坑・柱穴		土器・石製品		
調査の概要；												
緒方古墳群 後期古墳の2基（大阪）、江戸後期の大庄屋曾木墨荘に関わる墓地などを調査。												
七ツ枝遺跡 古墳後期の竪穴住居、時期不明の掘立柱建物跡、水田に伴う可能性のある溝などを調査。												
龍毛遺跡 水田に伴う可能性のある溝、中世の土坑・柱穴など。												

福岡県行政資料	
分類番号 JH	所属コード 2117104
登録年度 24	登録番号 7

東九州自動車道関係埋蔵文化財調査報告

- 8 -

福岡県築上郡上毛町大字緒方所在遺跡群の調査
緒方古墳群・七ツ枝遺跡・龍毛遺跡

平成25年3月31日

発行 九州歴史資料館

〒838-0106 福岡県小郡市三沢5208-3

印刷 株式会社 四ヶ所

〒838-8512 福岡県朝倉市馬田336